

第4章 遺構

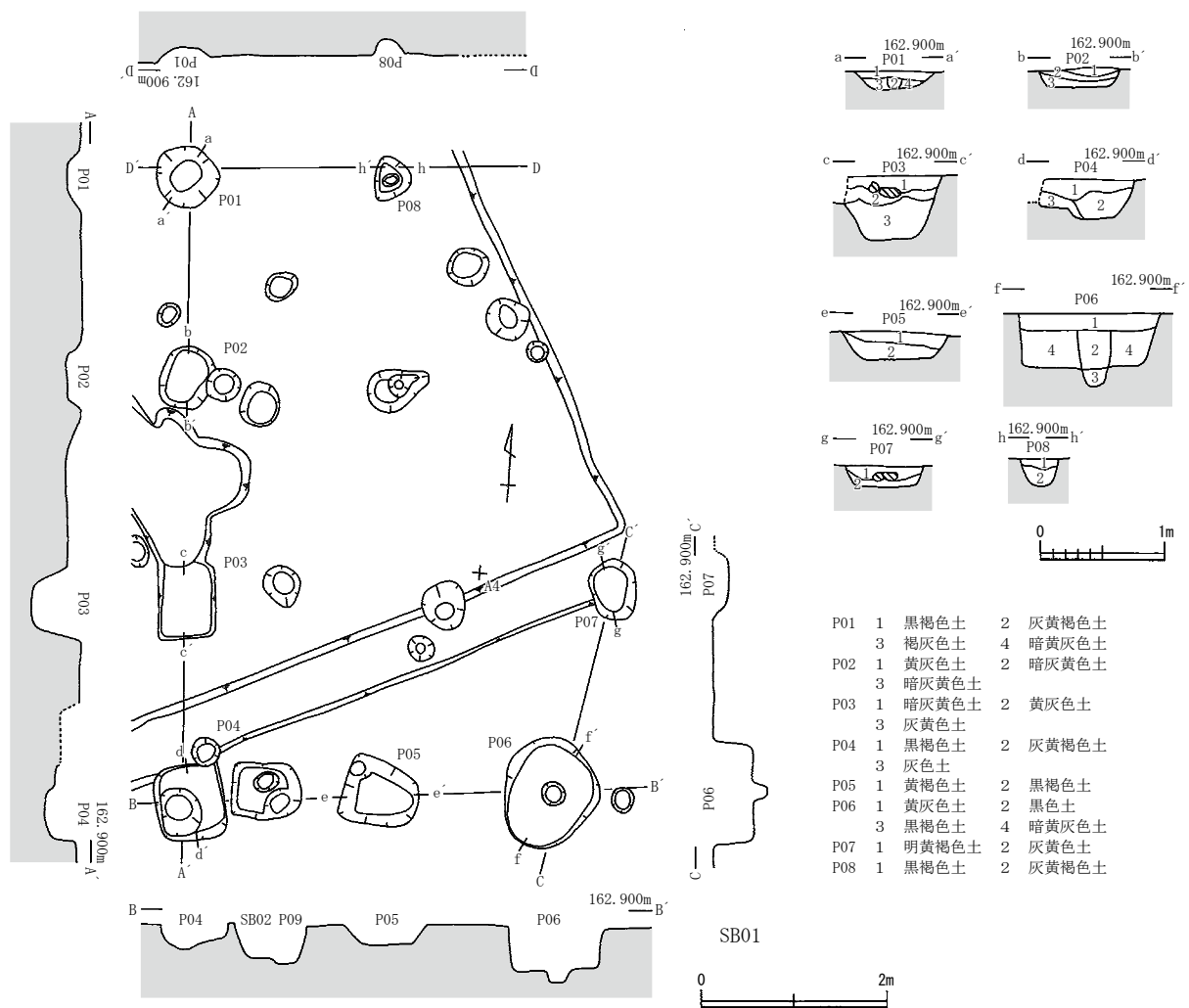
第1節 小矢戸地区の遺構

1 掘立柱建物（第7～35図、図版第7～11・22）

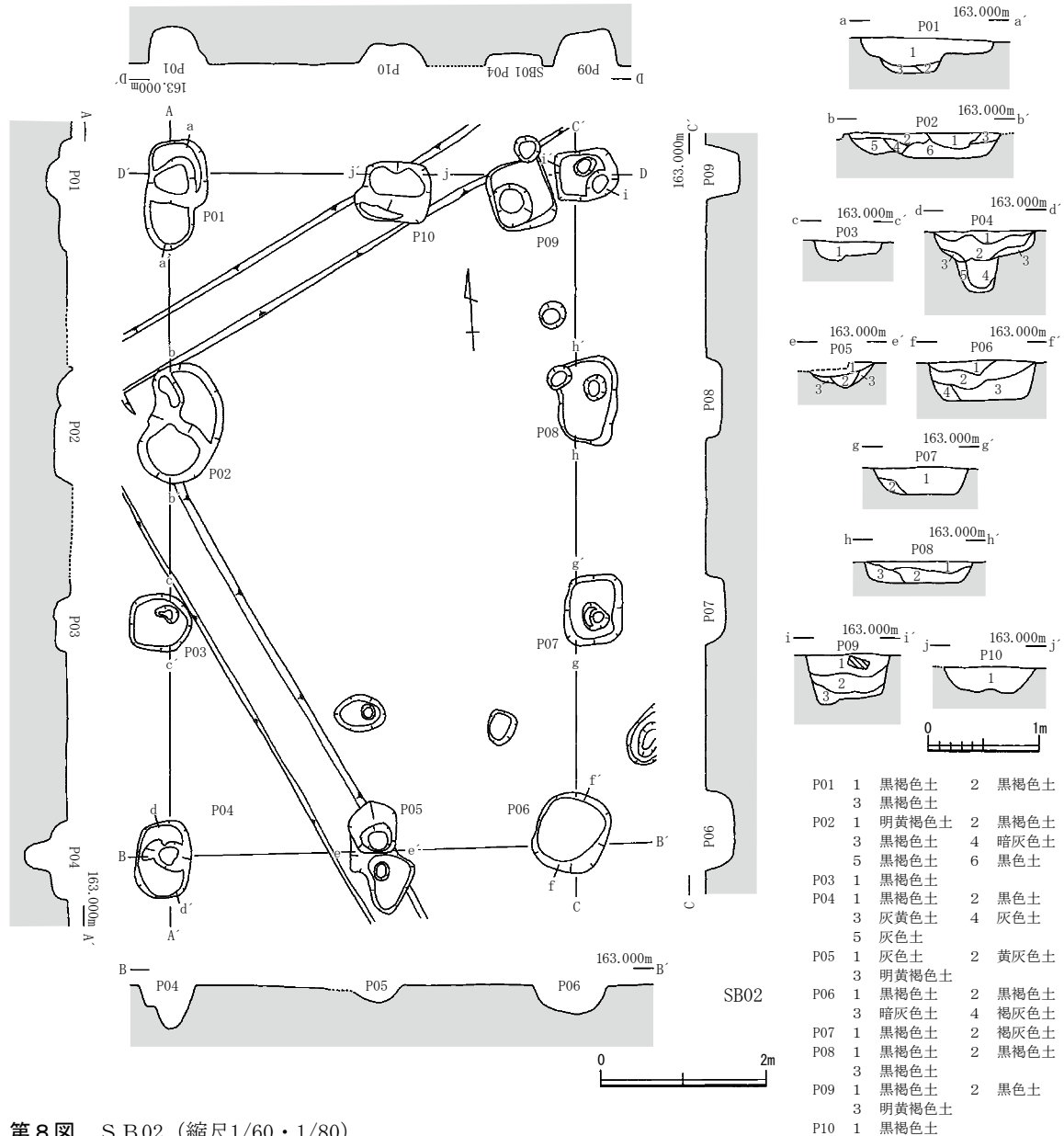
SB 01（第7図） A 3・4からB 3・4で建物群の北端に位置し、桁行3間×梁間2間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行6.8mで梁間3.8m、柱間幅は桁行が2.2～2.3mで梁間が1.9～2.1mを測る。南東隅柱のP 06が内方へずれて桁行が平行せず、やや不整な形状を呈す。北東部の柱穴も確認できなかったため建物としたが不明確である。

SB 02（第8図） B 3・4からC 4でSB 01の南西に位置し、桁行3間×梁間2間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行8.2mで梁間4.9m、柱間幅は桁行が2.6～3.0mで梁間が2.3～2.6mを測る。P 05でSB 03のP 02、P 09ではSB 01のP 04と隣接し、SB 01・03と重複するが前後関係は不詳である。P 01・06・09から坏A、P 09から墨書の皿が出土した。また、P 03以外の各柱穴から須恵器と土師質土器の破片等が僅かに出土した。

SB 03（第9図） B 4・5からC 4・5でSB 02の南側に位置し、桁行4間×梁間2間で南北方向



第7図 SB01（縮尺1/60・1/80）



第8図 SB02 (縮尺1/60・1/80)

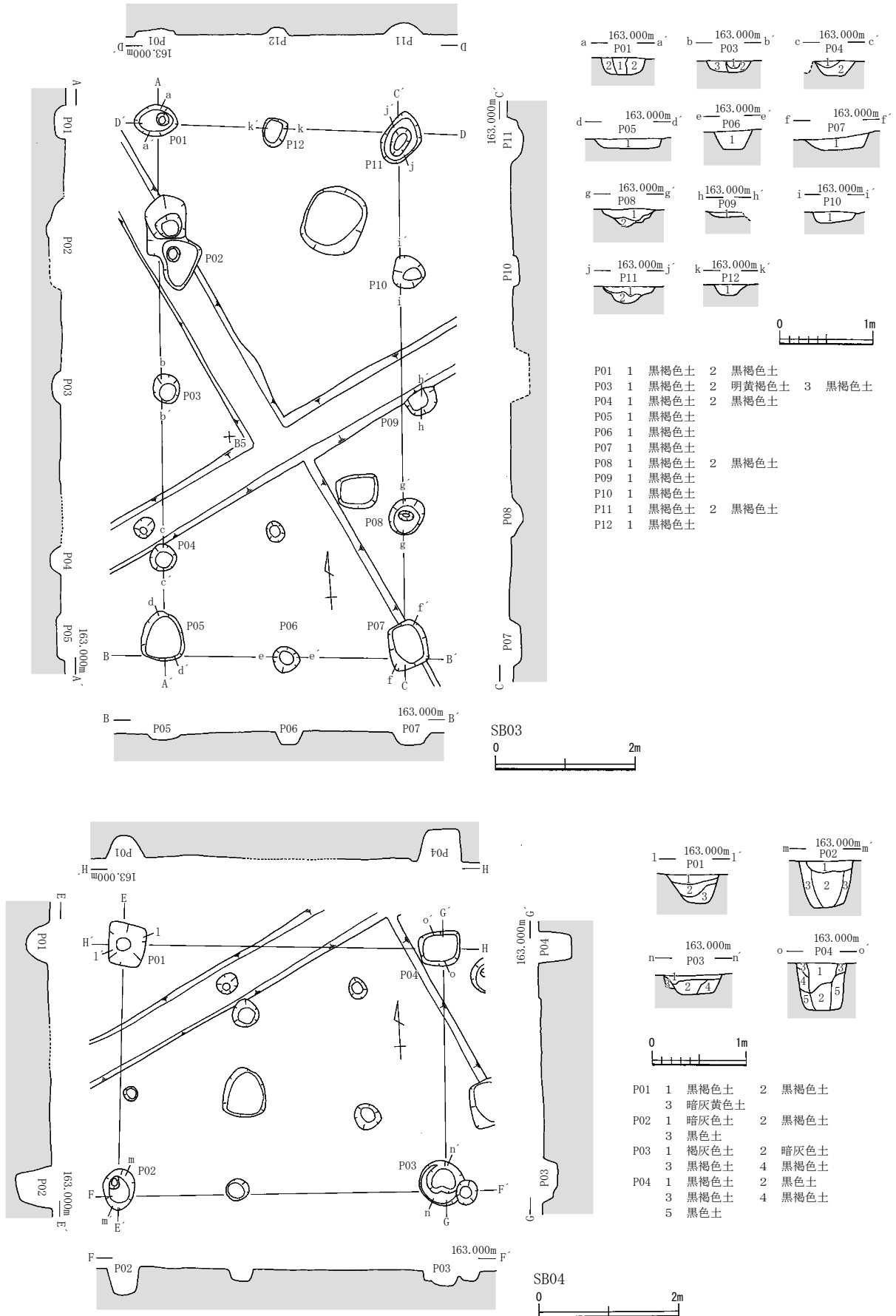
に棟をもつ。規模は桁行7.4mで梁間3.5m、柱間幅は桁行が1.2～2.3mで梁間が1.8m程を測る。桁行は柱間幅がやや不規則であり、P09は列から外れる。P01～09で土師質土器の破片が僅かに出土した。

SB04 (第9図) B5からC4・5でSB03の南西に位置し、桁行1間×梁間1間で南北方向に棟をもつと推察される。規模は桁行3.4mで梁間4.6mを測り、やや小形の方形状を呈す。SB03と重複するが前後関係は不詳である。P01から坏B、P01～04で須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

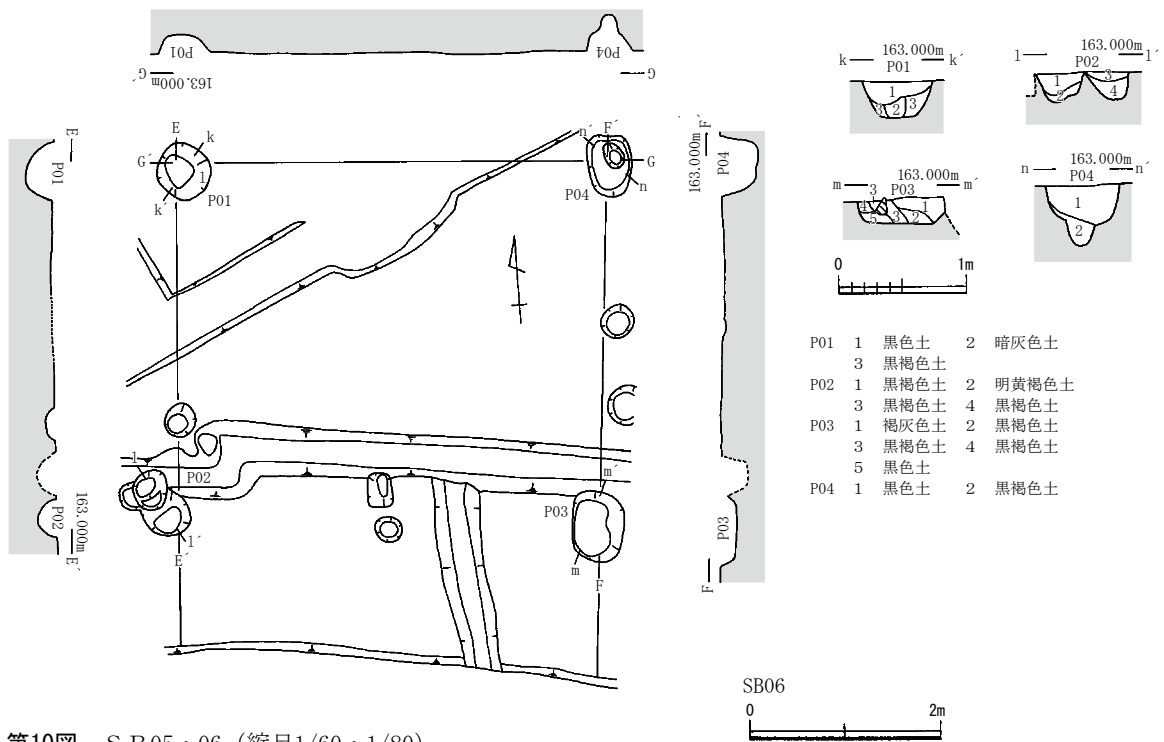
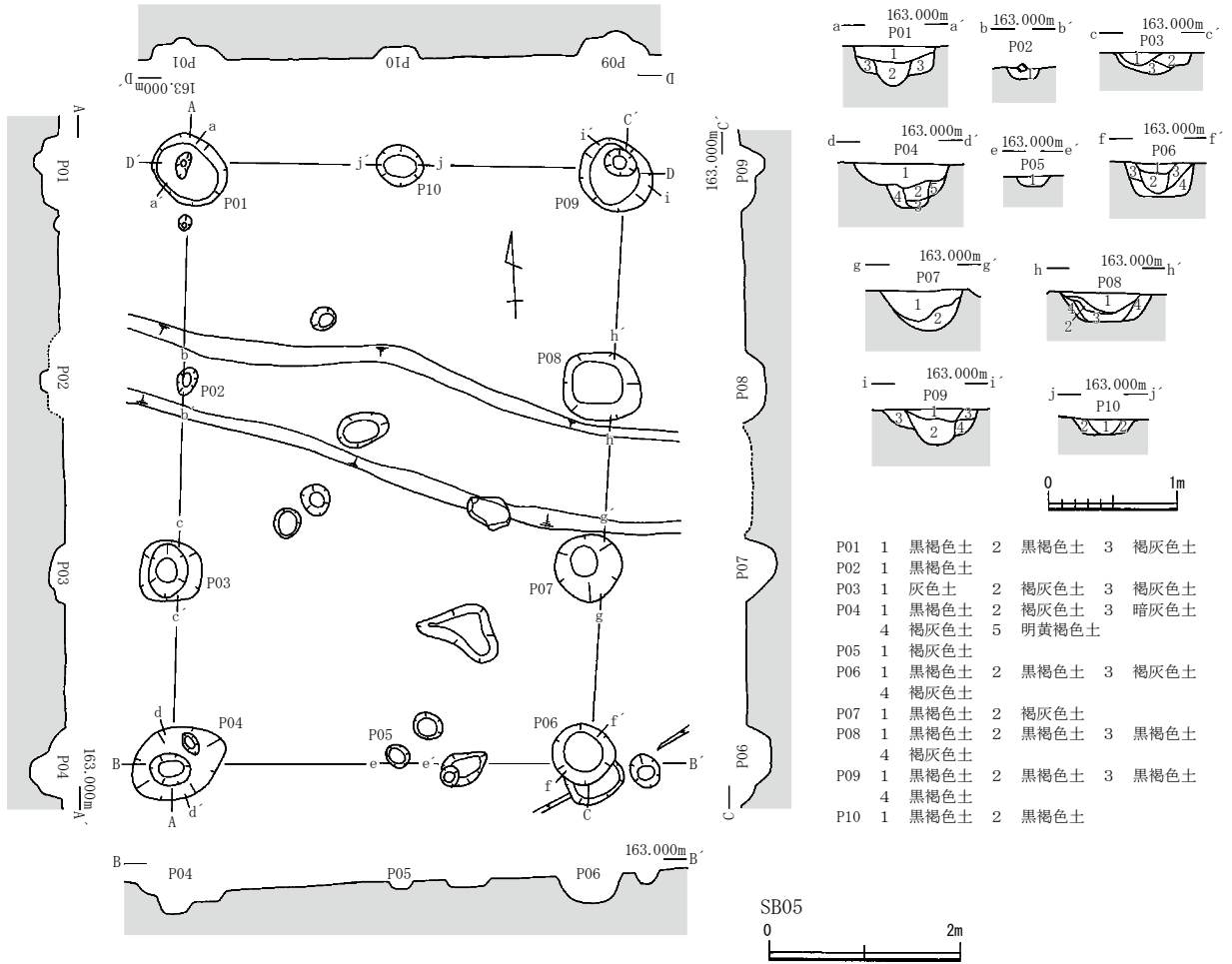
SB05 (第10図) C5・6でSB04の南側に隣接し、桁行3間×梁間2間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行6.2mで梁間4.4m、柱間幅は桁行が1.9～2.1mで梁間が1.9～2.4mを測る。P02は近現代の暗渠による攪乱で底部が僅かに遺存していた。P07から坏A、P01・04・06～10で須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

SB06 (第10図) C5・6からD6でSB05の南側に隣接し、桁行1間以上×梁間1間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行5.2mで梁間4.5m、柱間幅は桁行が3.7m程を測る。桁行は南へのび2間

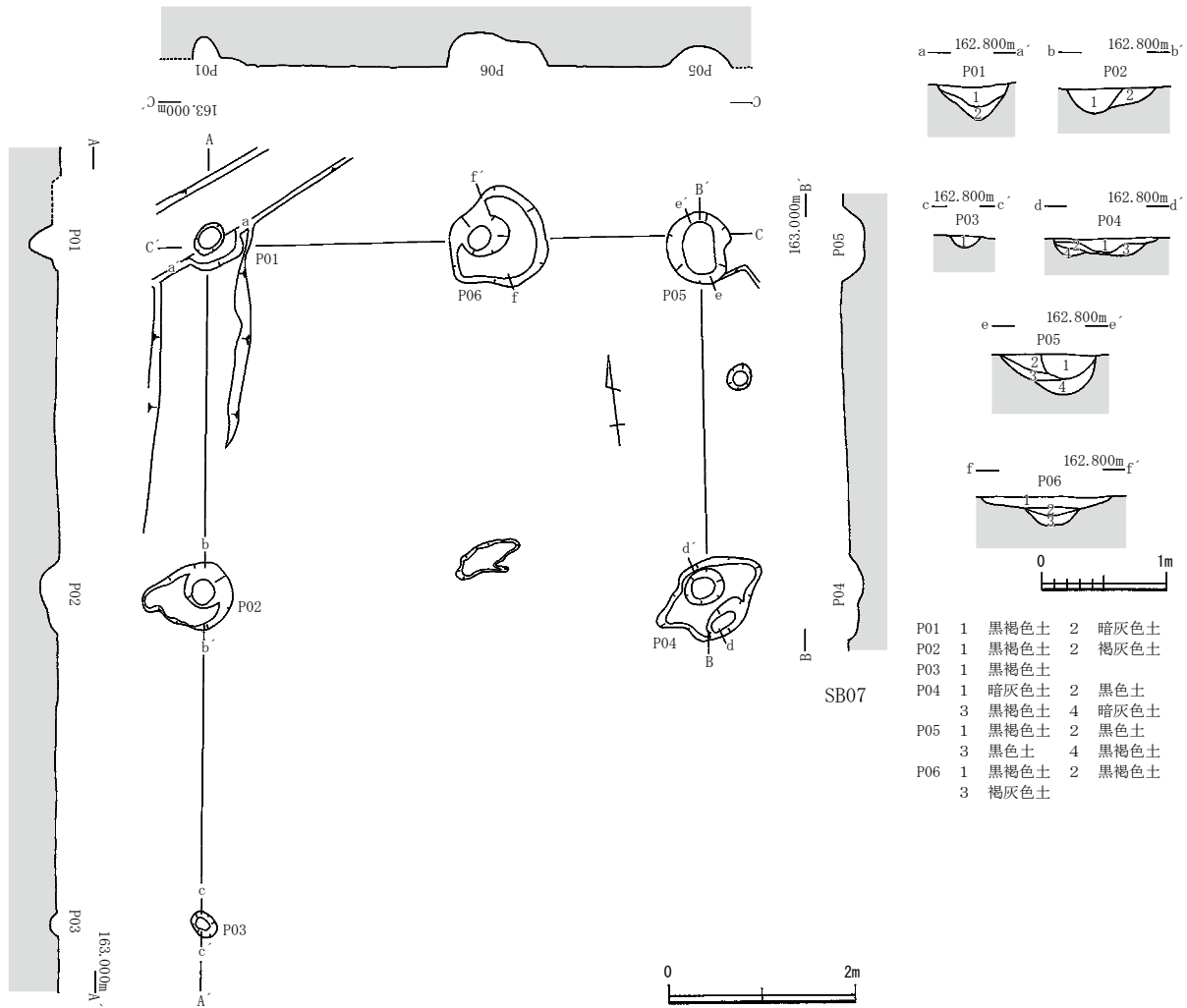
第1節 小矢戸地区の遺構



第9図 SB03・04 (縮尺1/60・1/80)



第10图 SB05·06 (縮尺1/60·1/80)



第11図 SB07 (縮尺1/60・1/80)

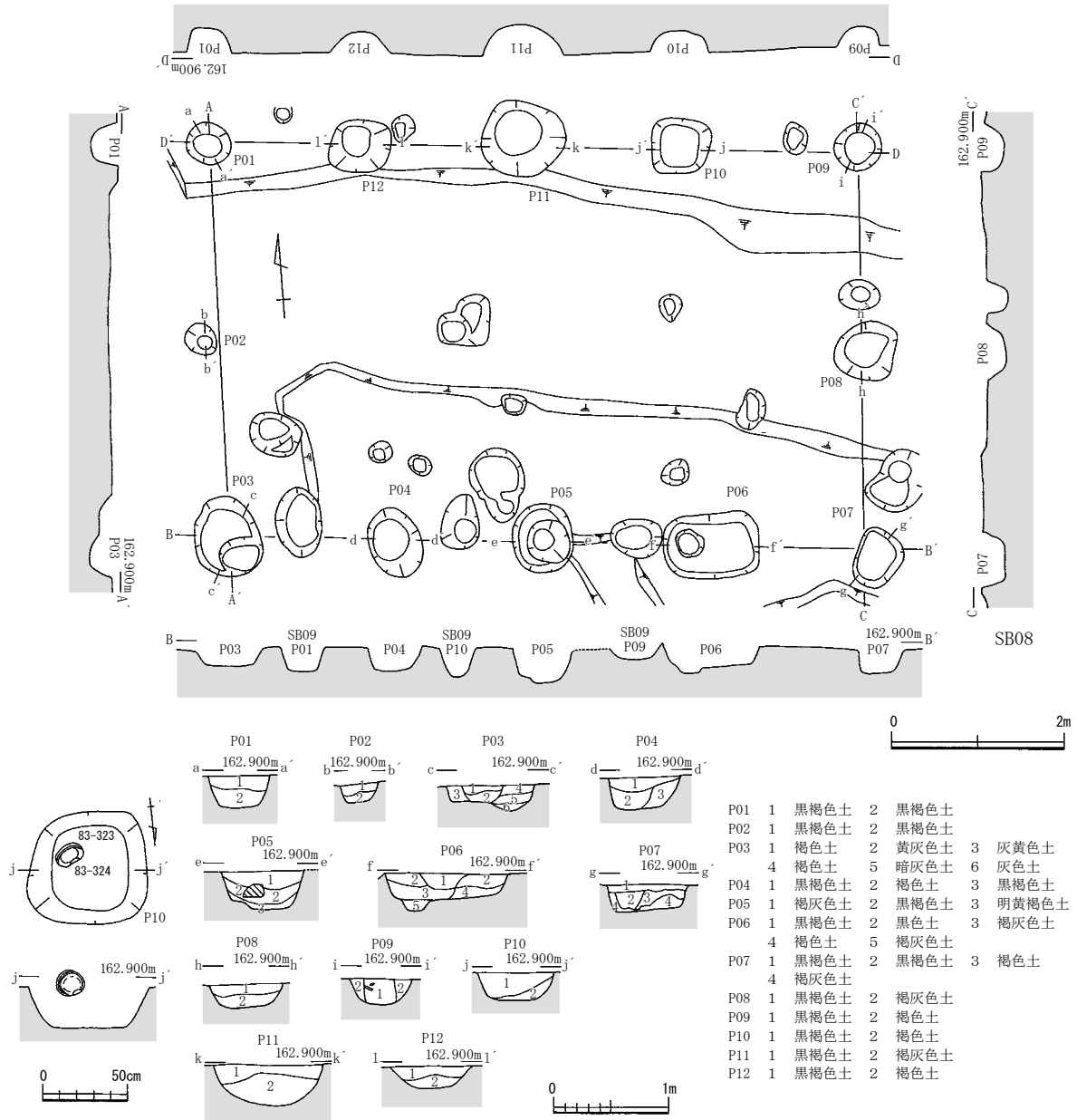
とも考えられるが、規模や構造がSB04と類似する可能性もある。また、各柱穴から須恵器と土師質土器の破片等が僅かに出土した。

SB07 (第11図) A・B5でSB03の東側に位置し、桁行2間以上×梁間2間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行7.4mで梁間5.4m、柱間幅は桁行が3.8m程で梁間が2.4～2.9mを測る。SB07の南東半は削平により遺存しない。P01・05から須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

SB08 (第12図) D・E6でSB06の南西に位置し、桁行4間×梁間2間で東西方向に棟をもつ。規模は桁行7.5mで梁間4.6m、柱間幅は桁行が1.9～2.1mで梁間が2.4m程を測る。また、SB09と重複するが前後関係は不詳である。P05から巡方、P10で墨書の皿2点が重なって出土した。P06・09～12で須恵器と土師質土器の破片等が僅かに出土した。

SB09 (第13図) D6からE6・7でSB08の南側に隣接し、桁行3間×梁間2間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行6.0mで梁間4.0m、柱間幅は桁行が1.9～2.0mで梁間が2.0m程を測る。P10から巡方、P06～08で須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

SB10 (第13図) D・E7でSB09の南東に位置し、桁行3間×梁間2間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行4.3mで梁間3.1m、柱間幅は桁行が0.8～1.9mで梁間が1.4～1.8mを測る。桁行は柱間幅が不規則であり、やや不整な形状を呈す。また、南西隅柱のP04は土坑が重複しているとも考えられる。



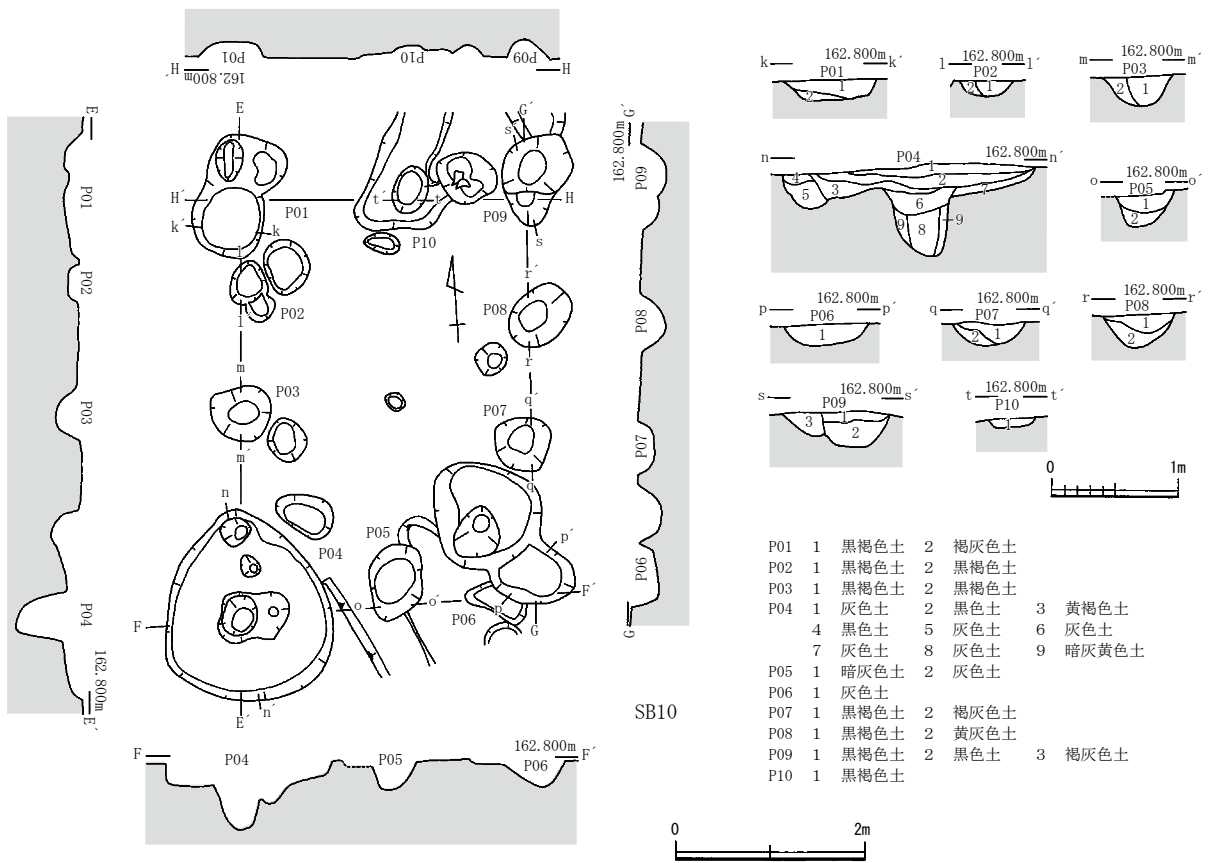
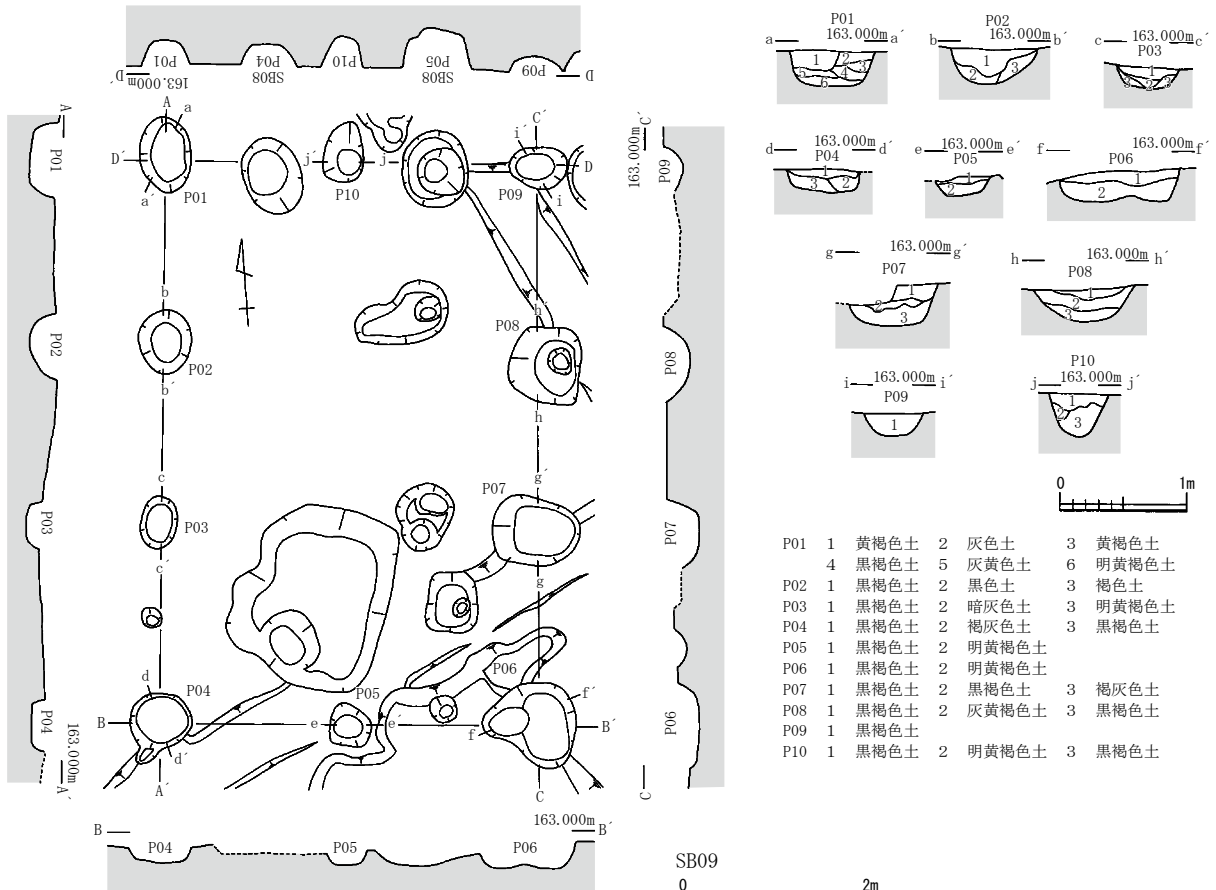
第12図 SB08 (縮尺1/40・1/60・1/80)

P 04 から坏Aと坏蓋、P 04～06 で須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

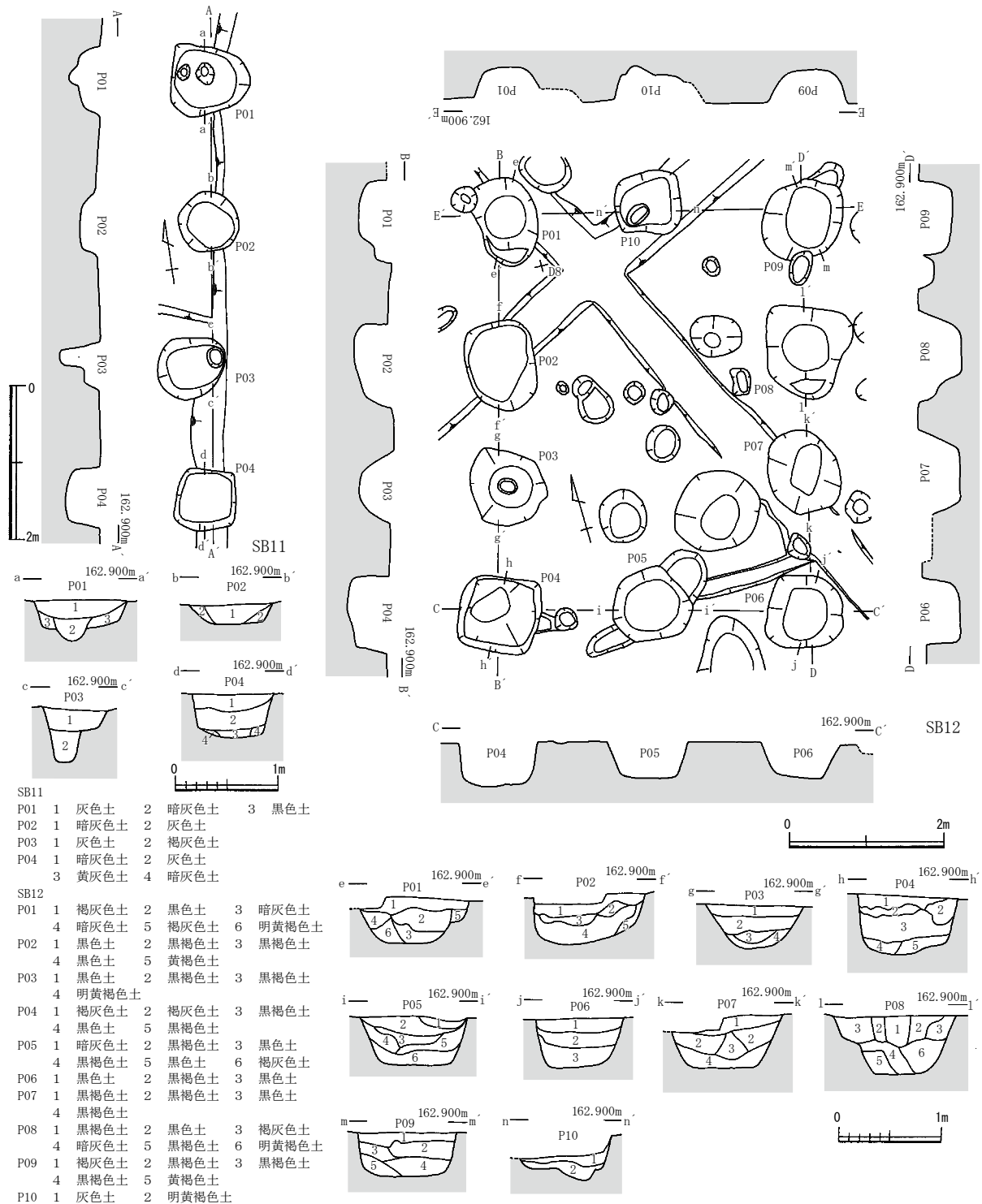
SB 11 (第14図) D 7でSB 10の東側に位置する。西側の桁行のみ検出し、建物の大半は削平等により遺存しない。桁行3間で南北方向に棟をもつと考えられ、規模は5.5mで柱間幅は1.8m程を測る。P 03から須恵器の碗、P 04で坏蓋、P 01～04で須恵器と土師質土器の破片等が僅かに出土した。

SB 12 (第14図) D 7・8からE 7・8でSB 10の南東に位置し、桁行3間×梁間2間でほぼ南北方向に棟をもつ。規模は桁行5.1mで梁間4.0m、柱間幅は桁行が1.7～1.9mで梁間が2.0m程を測る。構成する柱穴は、やや大形の隅丸形状を呈し、長軸で1.0～1.2mを測る。また、各柱穴から須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

SB 13 (第15図) B 7からC 6・7でSB 06の南東に位置し、桁行3間×梁間3間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行7.0mで梁間4.9m、柱間幅は桁行が2.2～2.5mで梁間が1.6m程を測る。構成する柱穴はSB 12と同様だが、北側梁間のP 01・10～12はやや不整な形状である。また、P 02・09は



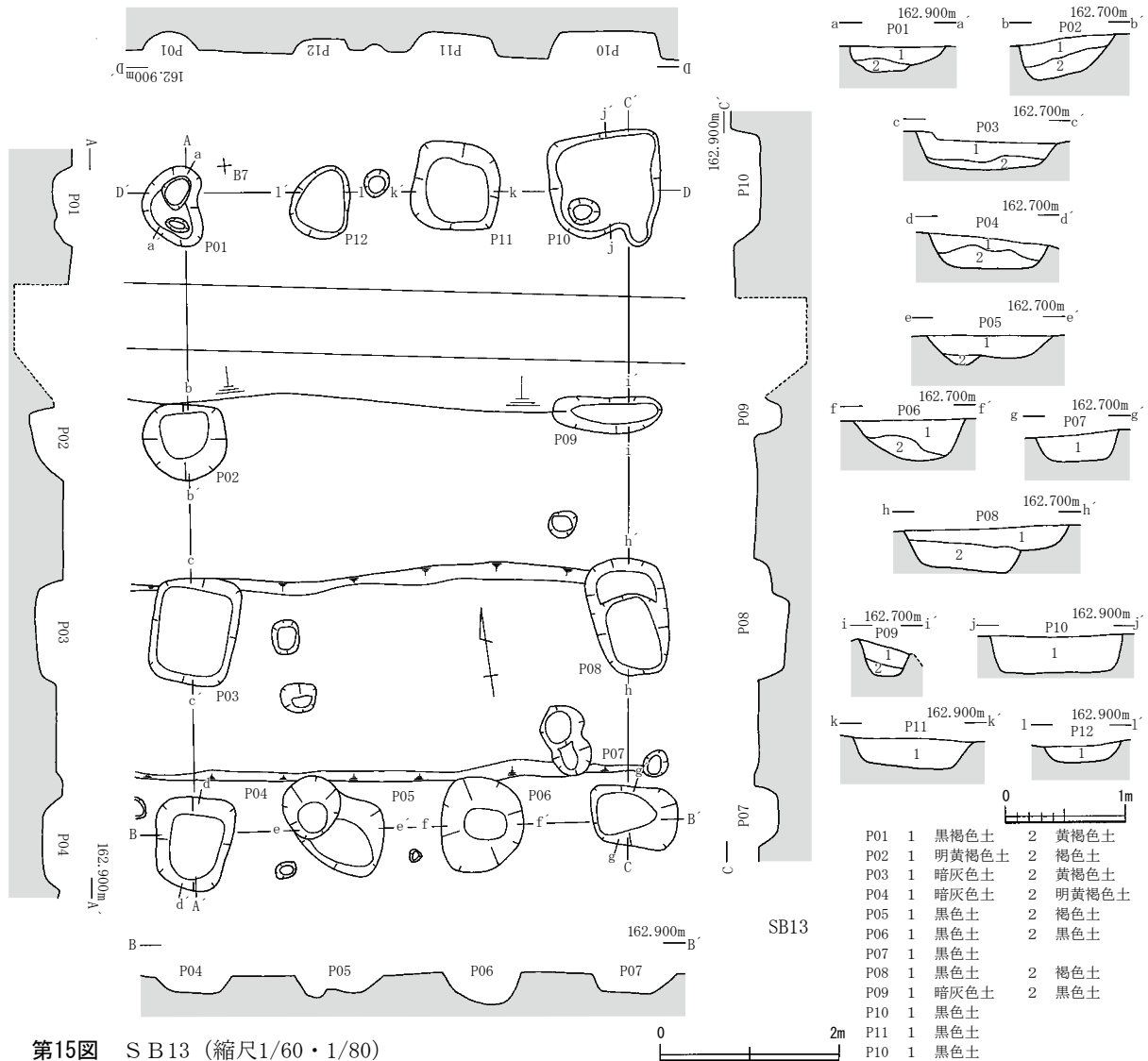
第13図 SB09・10 (縮尺1/60・1/80)



第14図 SB11・12 (縮尺1/60・1/80)

現代の用水路により一部削取されている。P 02～10で須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

SB 14 (第16・17図) A 8からB 7・8、C 8・9でSB 13の南東に位置し、桁行6間×梁間3間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行12.8mで梁間6.5m、柱間幅は桁行と梁間とも1.9～2.4mを測る。建物の南西半は削平により遺存状況が不良だが、構成する柱穴は大形の隅丸方形を呈し、長軸で1.3～1.6m程を測る。P 10・18で墨書の坏A、P 17で皿、P 08・11以外の各柱穴から須恵器と土師質土器の破片等が少量出土した。本遺跡では最大の規模であり、集落の中心的な施設であったと考えられる。

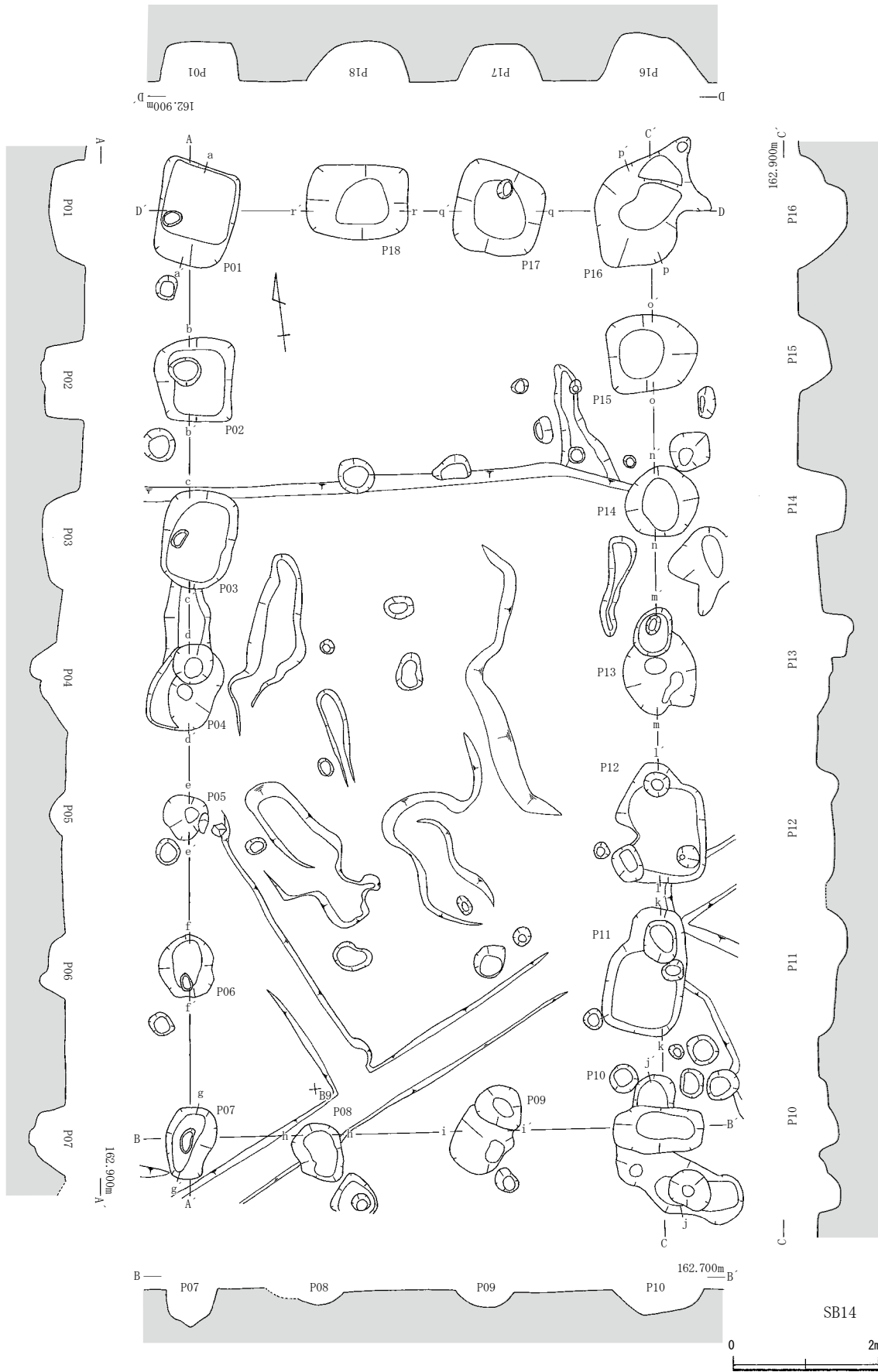


SB15 (第18図) D1・2からE1・2で検出した。桁行1間×梁間1間で北東から南西方向に棟をもつと考えられる。規模は桁行4.1mで梁間3.7mを測り、小形の方形を呈す。他の建物群から離れ、棟方向も異なっており、時期差があると推察される。

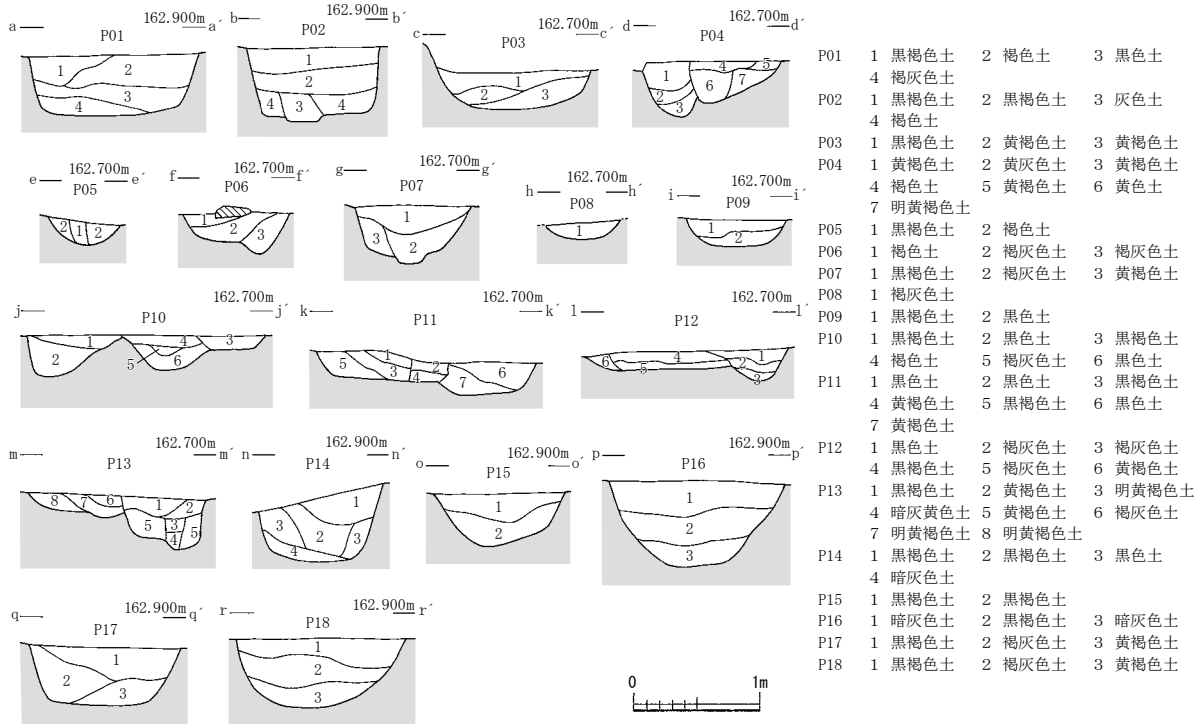
SB16 (第18図) E・F2で検出した。建物南西半のP01～08は県道区にあり、既に報告してある。SB15の南西に位置し、桁行4間×梁間2間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行7.1mで梁間4.2m、柱間幅は桁行が1.6～2.0mで梁間が2.1～2.2mを測る。SB16と県道区のSB04は列状となり、調査区外の南方へ続くと考えられる。また、東側のSB01～14の建物群と対をなすと推察される。

SB17 (第19図) D・E12でSR01の南側に位置する。桁行は3間だが、梁間は北側2間で南側1間であり、南北方向に棟をもつ。規模は桁行4.1mで梁間3.8m、柱間幅は桁行が1.3～1.4mを測り、小形の方形を呈す。SB19と重複するが前後関係は不詳である。また、P01・07から土師質土器の破片等が僅かに出土した。

SB18 (第19図) D12・13でSB17の東側に位置し、桁行3間×梁間2間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行5.0mで梁間3.2m、柱間幅は桁行と梁間とも1.5～1.7mを測る。南東隅柱のP06が内方へずれて桁行が平行せず、やや不整な形状を呈す。P02でSB19のP10・11、P03で同P15、P04で同



第16図 SB14 (1) (縮尺1/80)



第17図 SB14 (2) (縮尺1/60)

P 07 と重複しており、S B 18 が埋没後に構築されている。P 03 で土師質土器の破片が僅かに出土した。

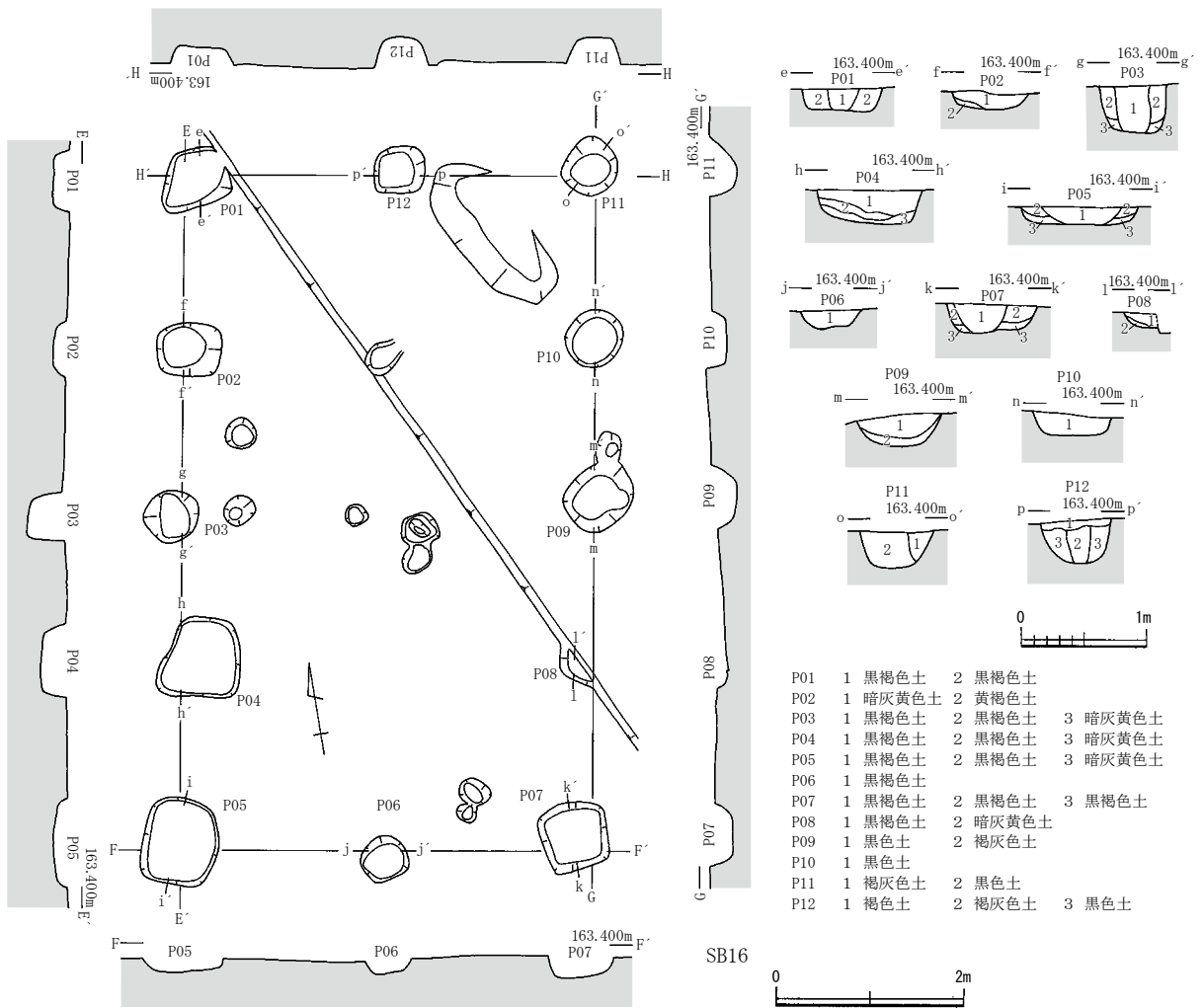
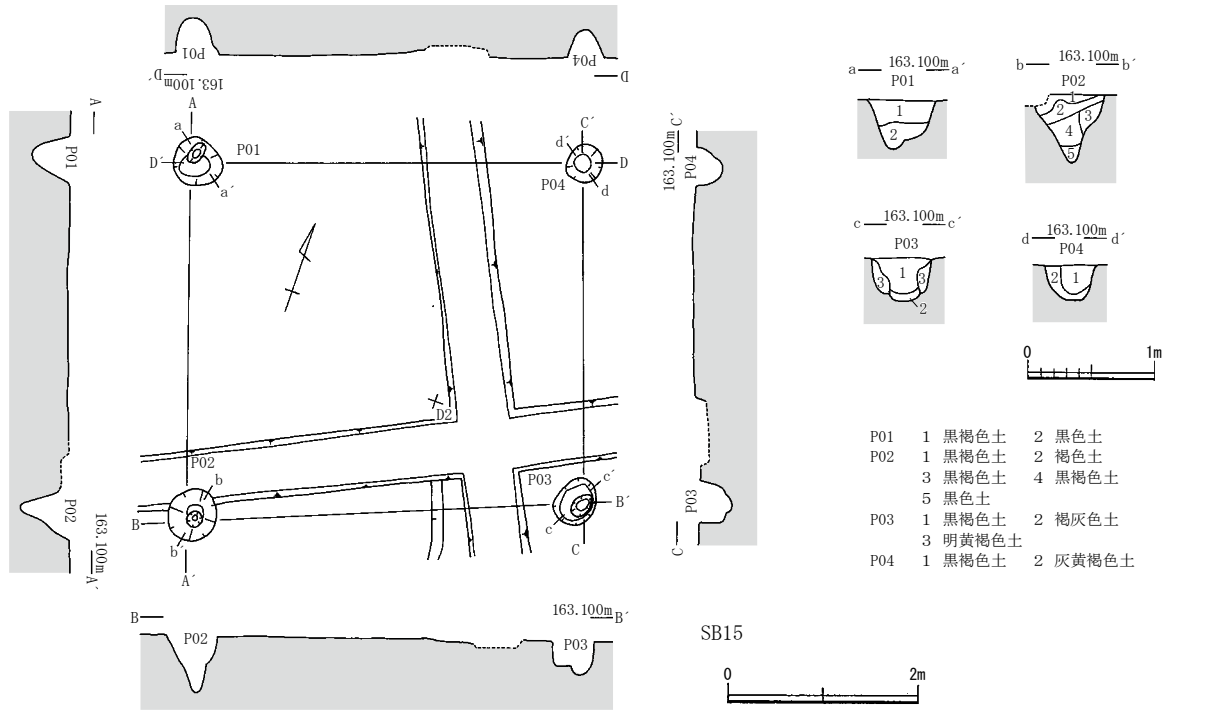
S B 19 (第20図) D 12・13 から E 12・13 で S B 18 の南西に位置し、桁行4間×梁間2間で東西方向に棟をもつ。東側の梁間を中心に建て替えられ、規模が約半間分縮小されている。梁間の柱穴は P 08・09・10 から P 07・15・11、桁行の P 06・12 も西側へずらし再構築されている。規模は桁行が 7.5 m から 6.7 m となり、梁間は 4.4 m を測る。柱間幅は桁行が 1.6 ~ 1.9 m で梁間が 2.0 ~ 2.3 m である。構成する柱穴は、やや大形の隅丸形状を呈し、長軸で 1.0 ~ 1.2 m を測る。また、P 13 から坏 A、P 01・11 ~ 14 で須恵器と土師質土器の破片が少量出土した。

S B 20 (第21図) D 14 から E 14・15 で S B 19 の南東に位置し、桁行4間×梁間2間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行 6.8 m で梁間 4.4 m、柱間幅は桁行が 1.6 ~ 1.8 m で梁間が 2.2 m 程を測る。また、建物南東端の P 06・07 で S R 06、P 06 で S B 21 の P 03、P 09 で同 P 01 と重複しており、S R 06 が埋没後に S B 21、次に S B 20 の順で構築されている。P 03・04・09 から坏 A、P 03 で皿、P 03 ~ 11 で須恵器と土師質土器の破片等が少量出土した。

S B 21 (第22図) D・E 15 で S B 20 の南東に位置し、桁行3間×梁間2間で南北方向に棟をもつ。桁行や梁間が平行せず、やや不整な形状を呈す。規模は桁行が東側 7.1 m で西側 7.4 m、梁間が南側 4.9 m で北側 4.6 m を測る。柱間幅は桁行と梁間とも 2.2 ~ 2.6 m である。建物南東半の P 03 ~ 08 で S R 06、P 05 で S B 24 の P 07 と重複しており、S R 06 が埋没後に S B 24、次に S B 21 の順で構築されている。P 03・07 から須恵器と土師質土器の破片が少量出土した。

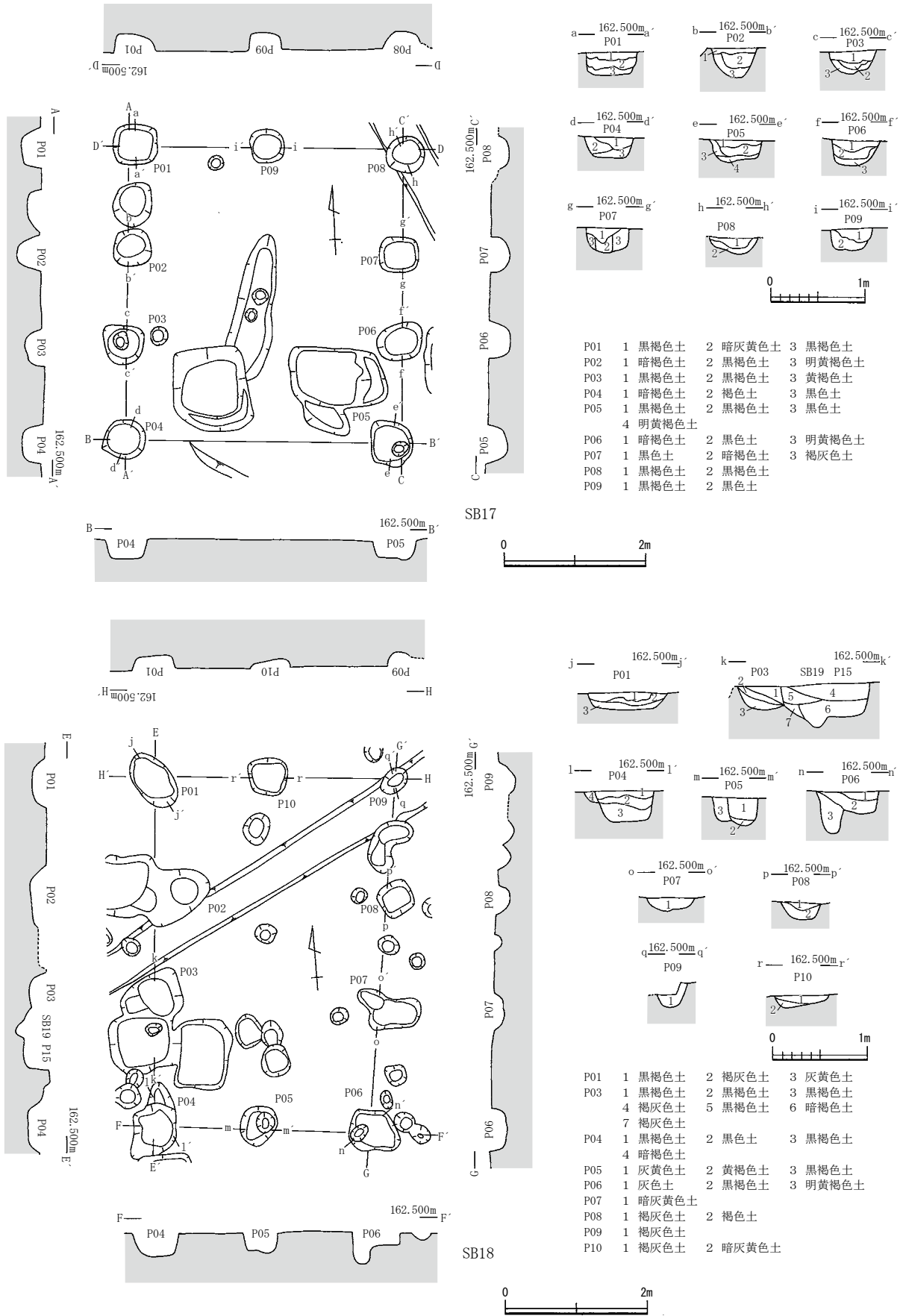
S B 22 (第23図) E 14 から F 14・15 で検出した。建物南西部の P 03 ~ 06 は県道区にあり、既に報告してある。S B 20 の南西に位置し、桁行4間×梁間3間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行 7.0 m で梁間 5.0 m、柱間幅は桁行と梁間とも 1.7 ~ 1.9 m を測る。S B 23 と重複するが前後関係は不詳である。

S B 23 (第24図) E 14・15 から F 14・15 で S B 22 の南東に位置し、桁行3間×梁間1間で南北

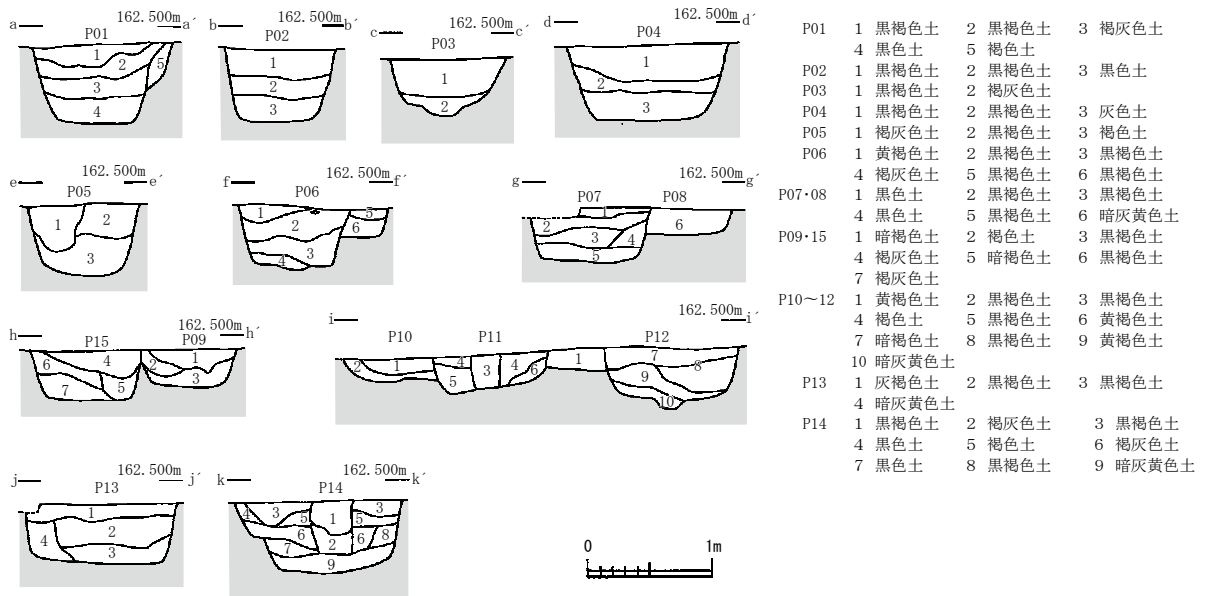
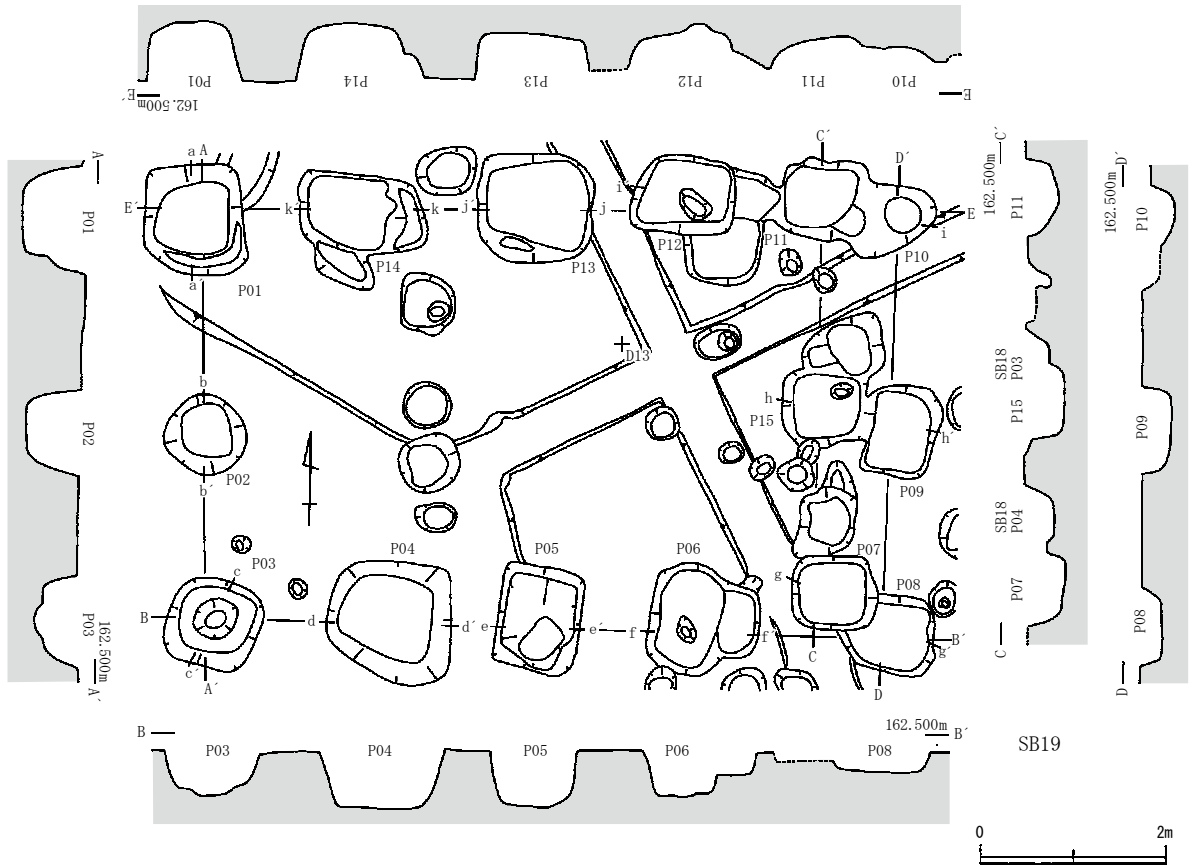


第18图 SB15·16 (縮尺1/60·1/80)

第1節 小矢戸地区の遺構



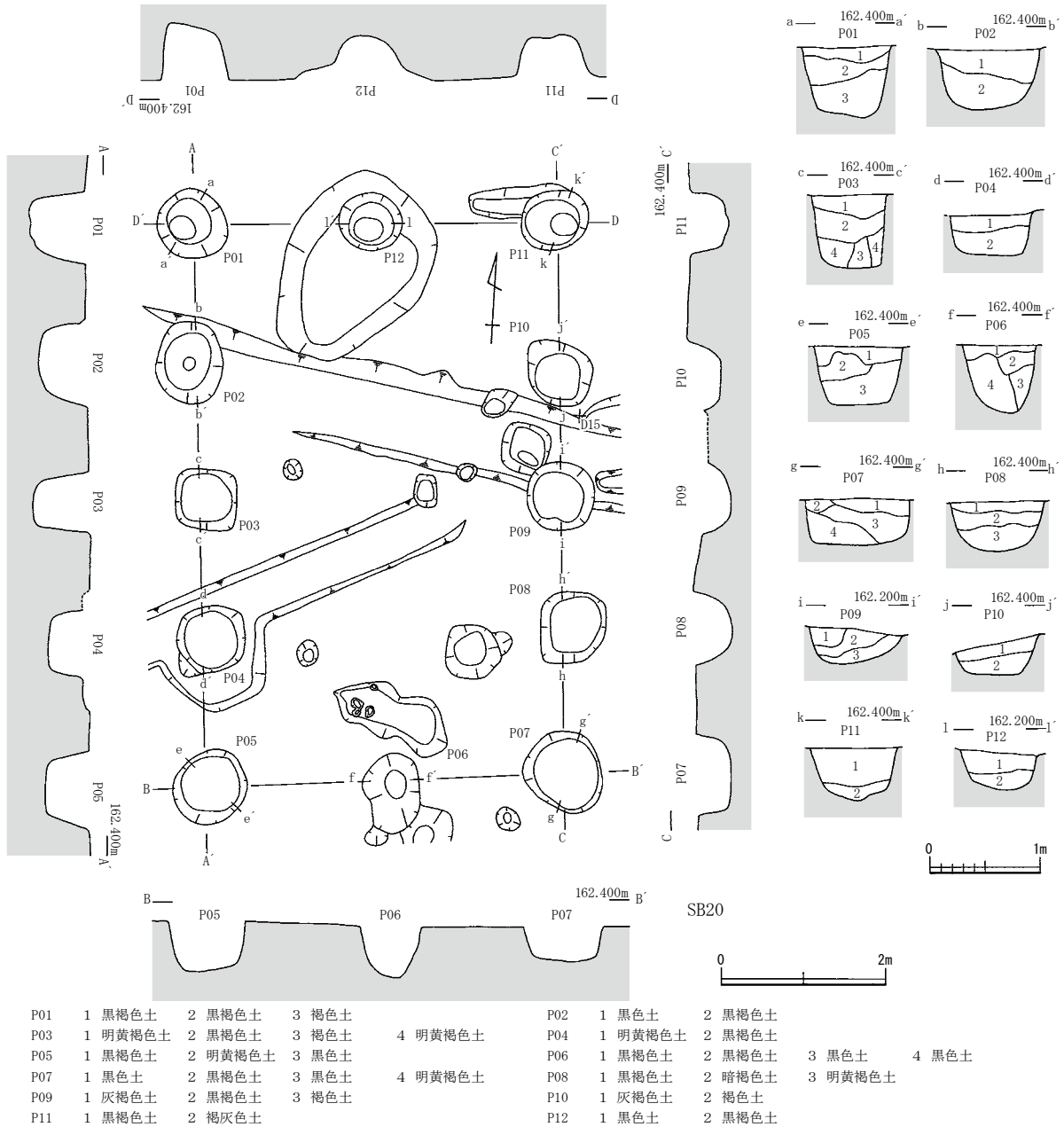
第19図 SB17・18 (縮尺1/60・1/80)



第20図 SB19 (縮尺1/60・1/80)

方向に棟をもつ。規模は桁行 5.9 m で梁間 4.3 m、柱間幅は桁行が 1.9 ~ 2.1 m を測る。P 01・06 から土師質土器の破片が僅かに出土した。

SB 24 (第 24 図) E 15・16 で SB 21 の南側に位置し、桁行 2 間×梁間 2 間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行 4.4 m で梁間 3.4 m、柱間幅は桁行が 2.0 ~ 2.4 m で梁間が 1.7 m 程を測る。北東隅柱の P 07 は外方へずれており、SB 21 の P 05 と重複する。また、各柱穴とも SR 06 と重複している。P 04・06

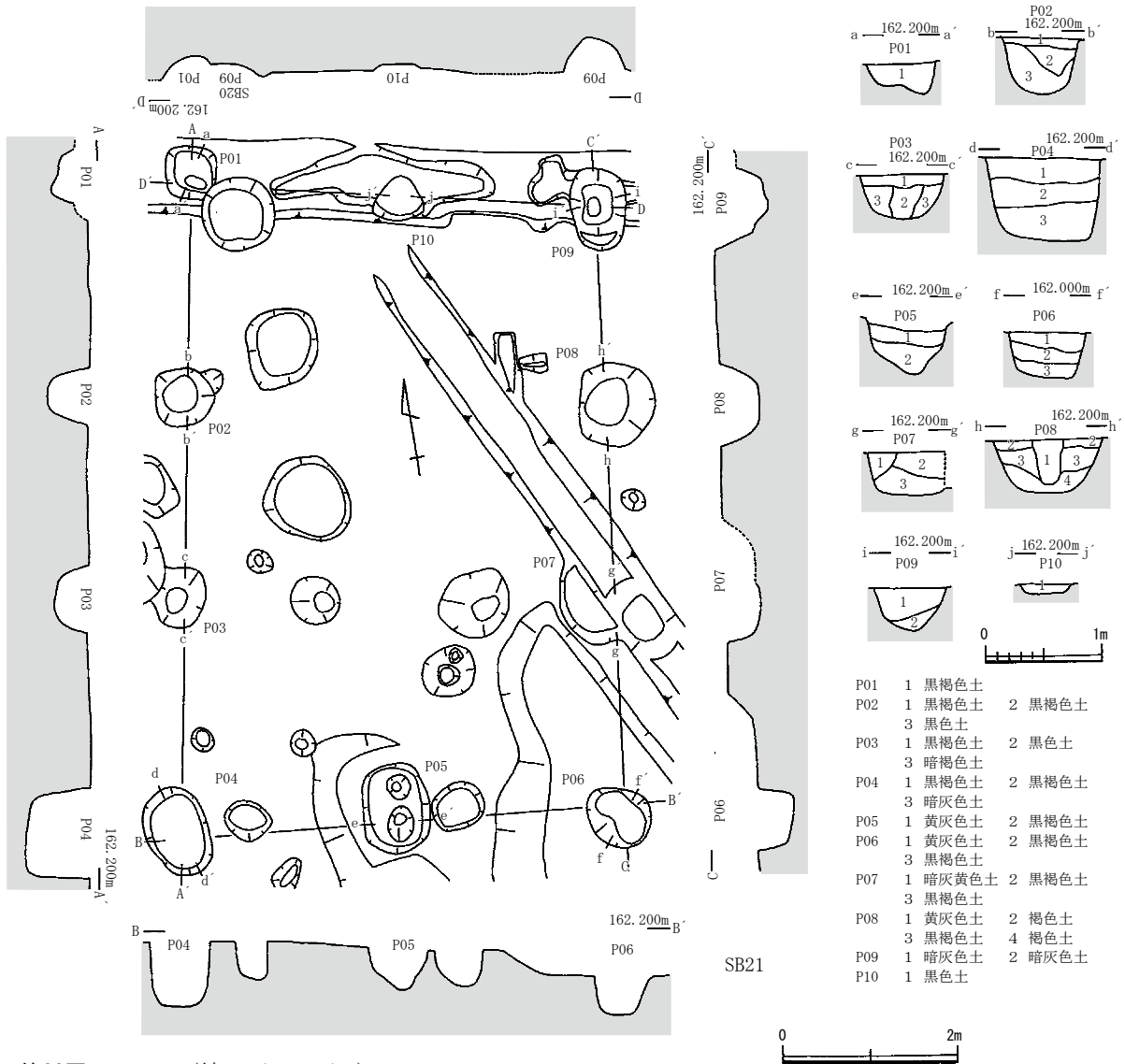


第21図 SB20 (縮尺1/60・1/80)

から須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

SB25 (第25図) E・F 16にかけてSB24の南側で検出した。ほぼ同じ位置で建て替えられ、規模は桁行が約半間分縮小されている。桁行4間×梁間3間から桁行3間×梁間2間となり、共に南北方向に棟をもつ。規模は桁行7.4mで梁間4.4mから桁行6.4mで梁間4.3mとなる。柱間幅は桁行1.9m程で梁間1.5～1.6mから桁行2.0～2.2mで梁間2.0～2.4mとなる。また、建物東半のP07～18でSR06、P10でSD11、P11で同10、P13で同09と重複しており、SR06が埋没後にSD09～11、次にSB25の順で構築されている。P04・09以外の各柱穴で須恵器と土師質土器の破片等が少量出土した。

SB26 (第26・27図) D16・17からE16・17でSB25の東側に位置する。桁行4間×梁間3間で東と南の2面に庇が付き、南北方向に棟をもつ。規模は桁行7.8mで梁間5.2m、柱間幅は桁行が2.0m程で梁間が1.8m程を測る。構成する柱穴は、身舎ではやや大形の隅丸方形状で長軸1.0m程、庇部分で



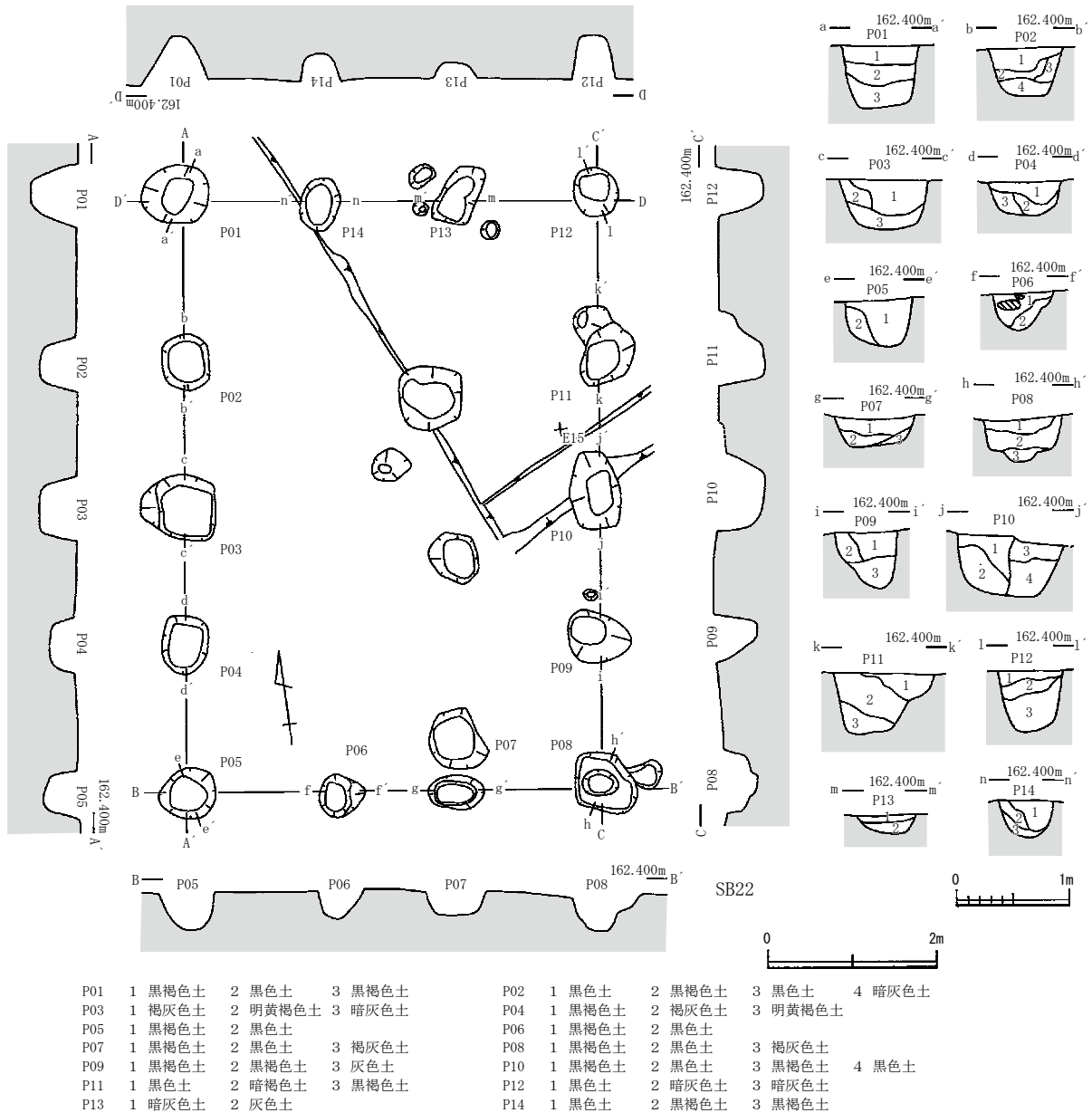
第22図 SB21 (縮尺1/60・1/80)

は小形の円形状で長軸0.6 m程を測る。建物北東端のP 12・13でSR 06、P 03・11でSD 11、P 04・10で同12、P 05・06で同14、P 07・08で同15、P 09で同13、P 17で同17と重複しており、SR 06が埋没後にSD 11～15・17、次にSB 26の順で構築されている。また、P 12・13から須恵器の甕、P 01～04・08・09で須恵器と土師質土器の破片が少量出土した。

SB 27 (第28図) C 14・15からD 15で検出した。桁行2間×梁間1間で東西方向に棟をもつと考えられる。規模は桁行2.5 mで梁間2.0 m、柱間幅は桁行が1.1～1.4 mを測る。小形で他の建物群から離れており、建物としたが不明確である。

SB 28 (第28図) A 15でSR 04の東側に位置する。建物の北東半は調査区外へひろがり、桁行2間×梁間2間の総柱構造で、北西から南東方向に棟をもつと考えられる。規模は桁行3.6 mで梁間1.8 m、柱間幅は桁行が1.8～2.0 mを測る。また、各柱穴ともSR 05と重複しており、SR 05が埋没後に構築されている。P 01から土師質土器の破片が僅かに出土した。

SB 29 (第29図) A・B 16でSB 28の南側に位置する。桁行2間×梁間2間の総柱構造で、ほぼ南北方向に棟をもつ。規模は桁行5.0 mで梁間4.6 mを測り、北西隅柱のP 01が内方へずれるが、ほ

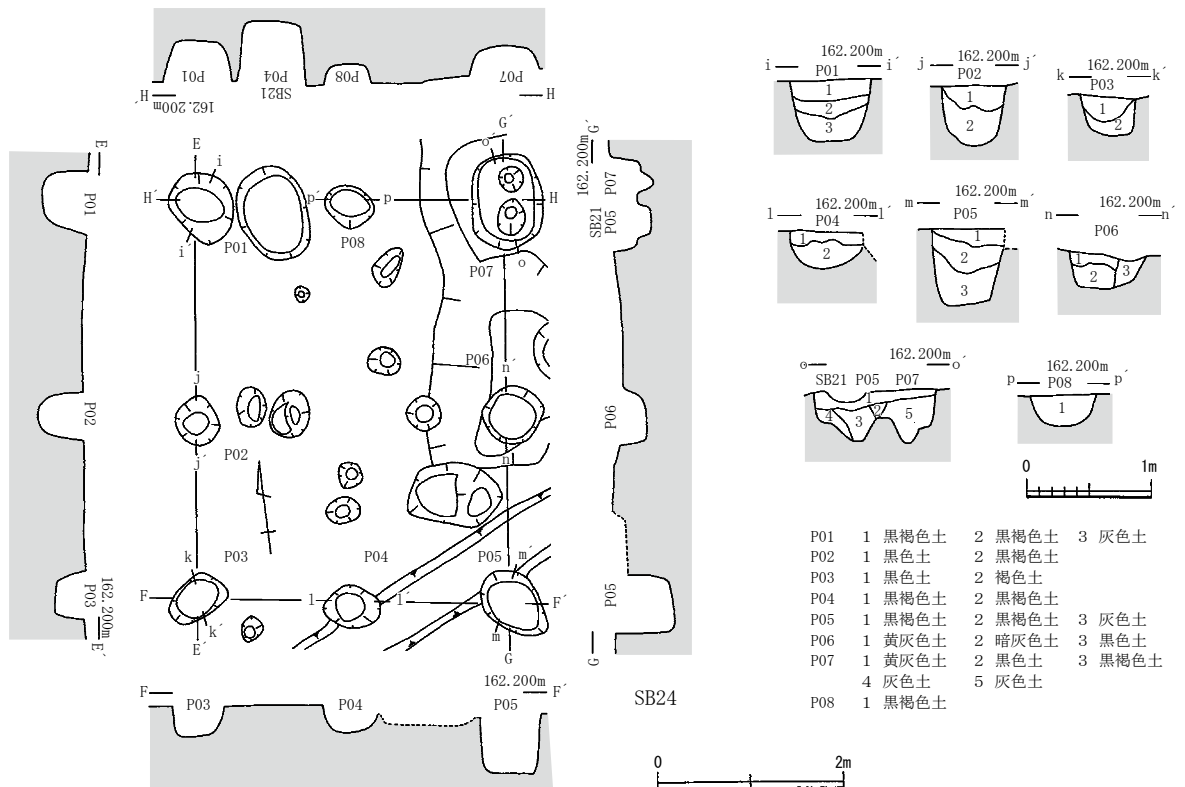
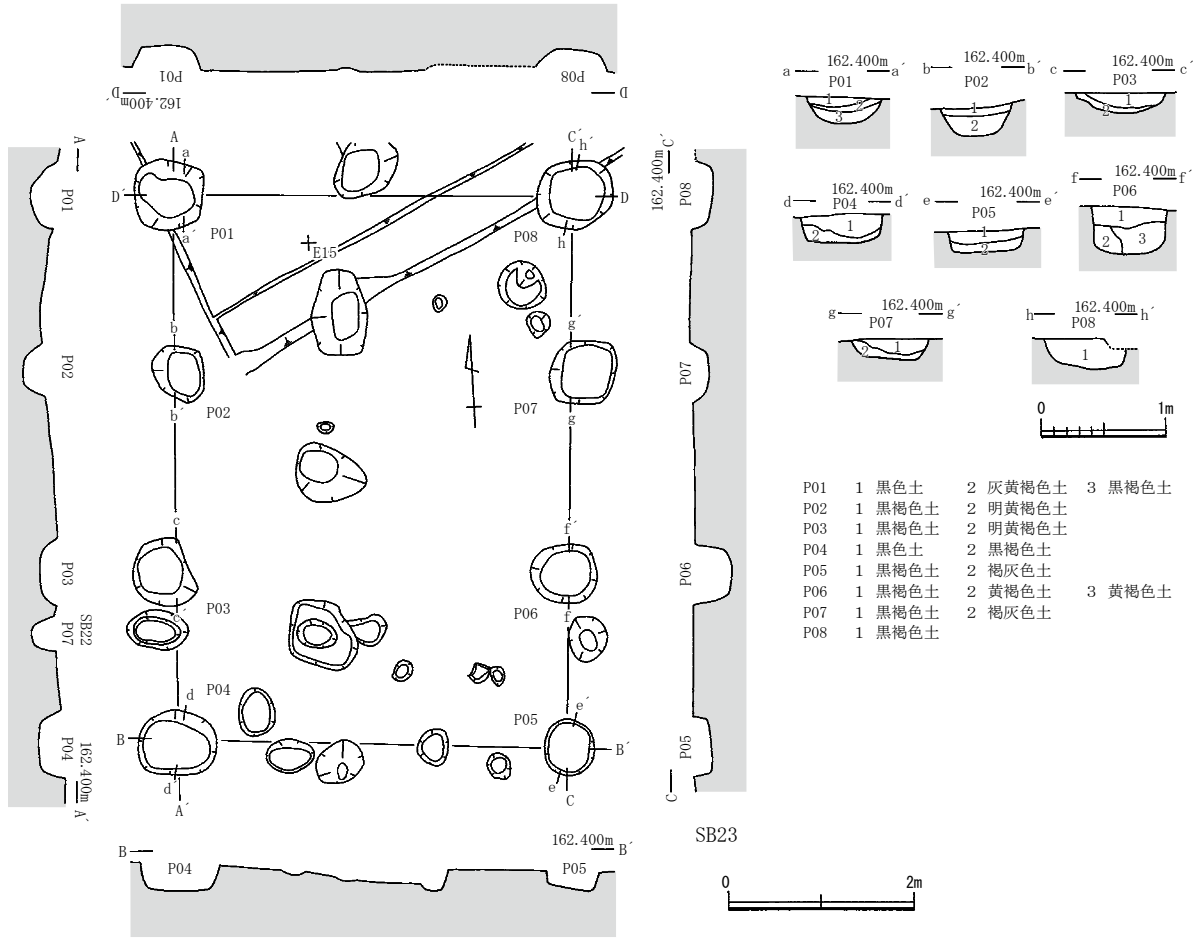


第23図 SB22 (縮尺1/60・1/80)

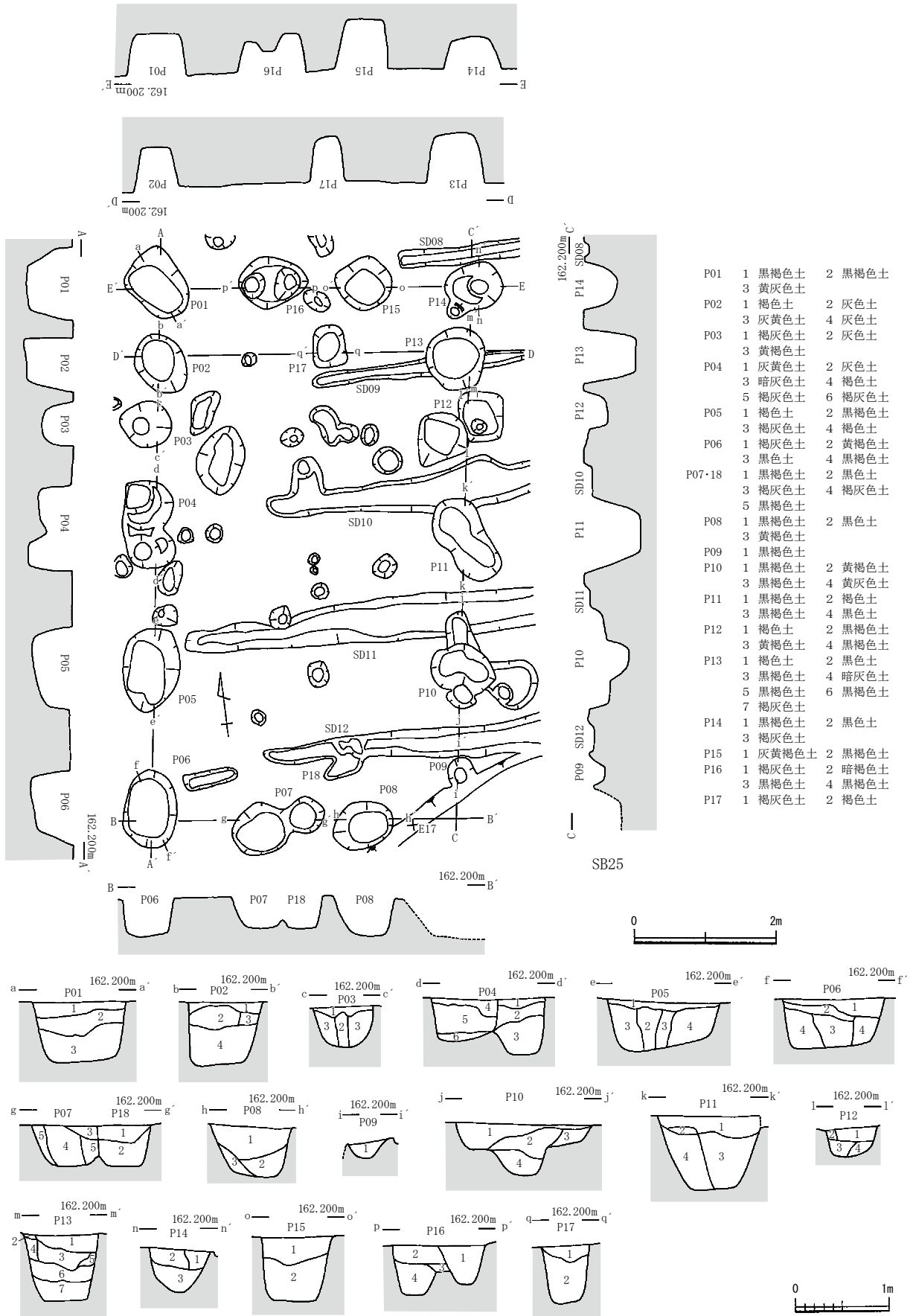
ほぼ正方形状を呈す。柱間幅は桁行が2.3～2.7mで梁間が2.2～2.5mを測る。構成する柱穴は、やや大形の隅丸方形状を呈し、長軸で1.0～1.4m程を測る。P05では柱根が遺存していた。P05でSB30のP06、P06で同P07と重複しており、SB30が埋没後に構築されている。また、P07から坯蓋、P08で坏A、P07・08から須恵器と土師質土器の破片等が僅かに出土した。

SB30 (第30図) A・B16でSB29の南東に位置する。桁行2間×梁間2間の総柱構造で、SB28と同様に北西から南東方向に棟をもつ。規模は桁行4.2mで梁間3.5m、柱間幅は桁行が2.0～2.2mで梁間が1.6～1.9mを測る。P07から須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

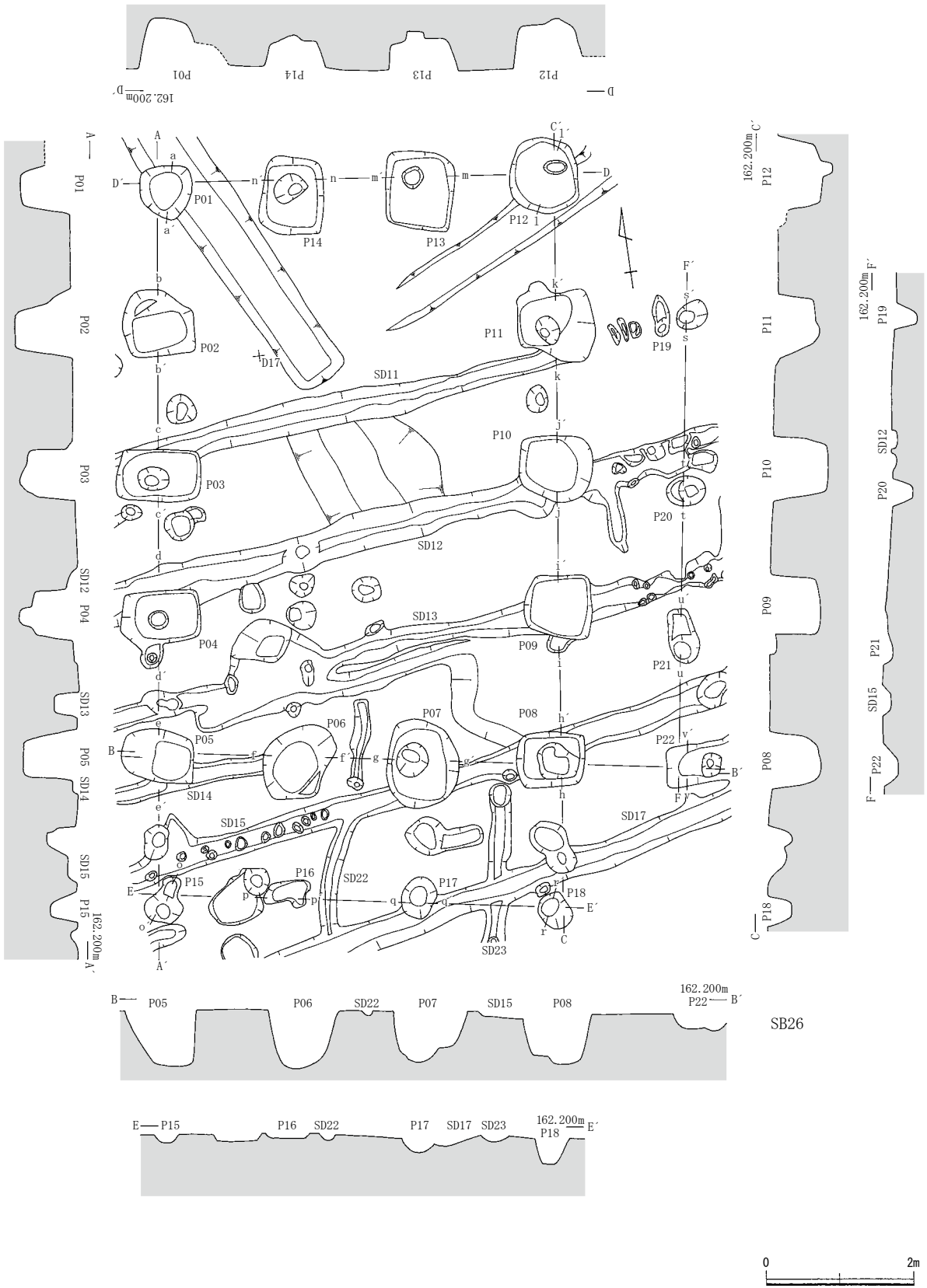
SB31 (第31図) E22・23からF22・23で検出した。建物南西部のP02～04は県道区にあり、既に報告してある。桁行3間×梁間2間で北面に庇が付き、ほぼ東西方向に棟をもつ。北東隅柱のP08が外方へずれて桁行や梁間が平行しない。規模は桁行が南側7.2mで北側8.0m、梁間が6.0m程を測る。柱間幅も不規則であり、桁行が2.0～3.2mで梁間が2.6～3.3mを測る。不整な形状であり、建物とし



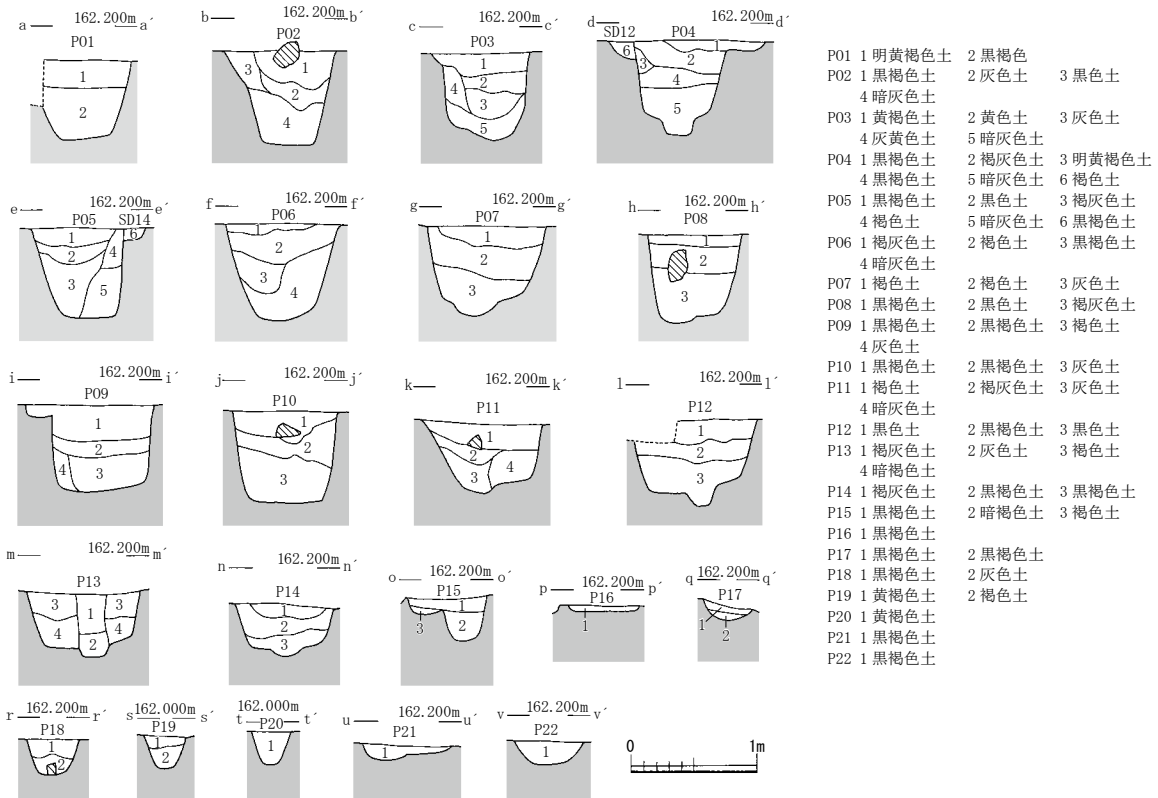
第24図 SB23・24 (縮尺1/60・1/80)



第25図 SB25 (縮尺1/60・1/80)



第26図 SB26 (1) (縮尺1/80)



第27図 S B 26 (2) (縮尺1/60)

たが不明確である。また、P 08・11でS E 13、P 14でS K 28と重複するが、前後関係は不詳である。P 10から古瀬戸製品の破片が僅かに出土した。

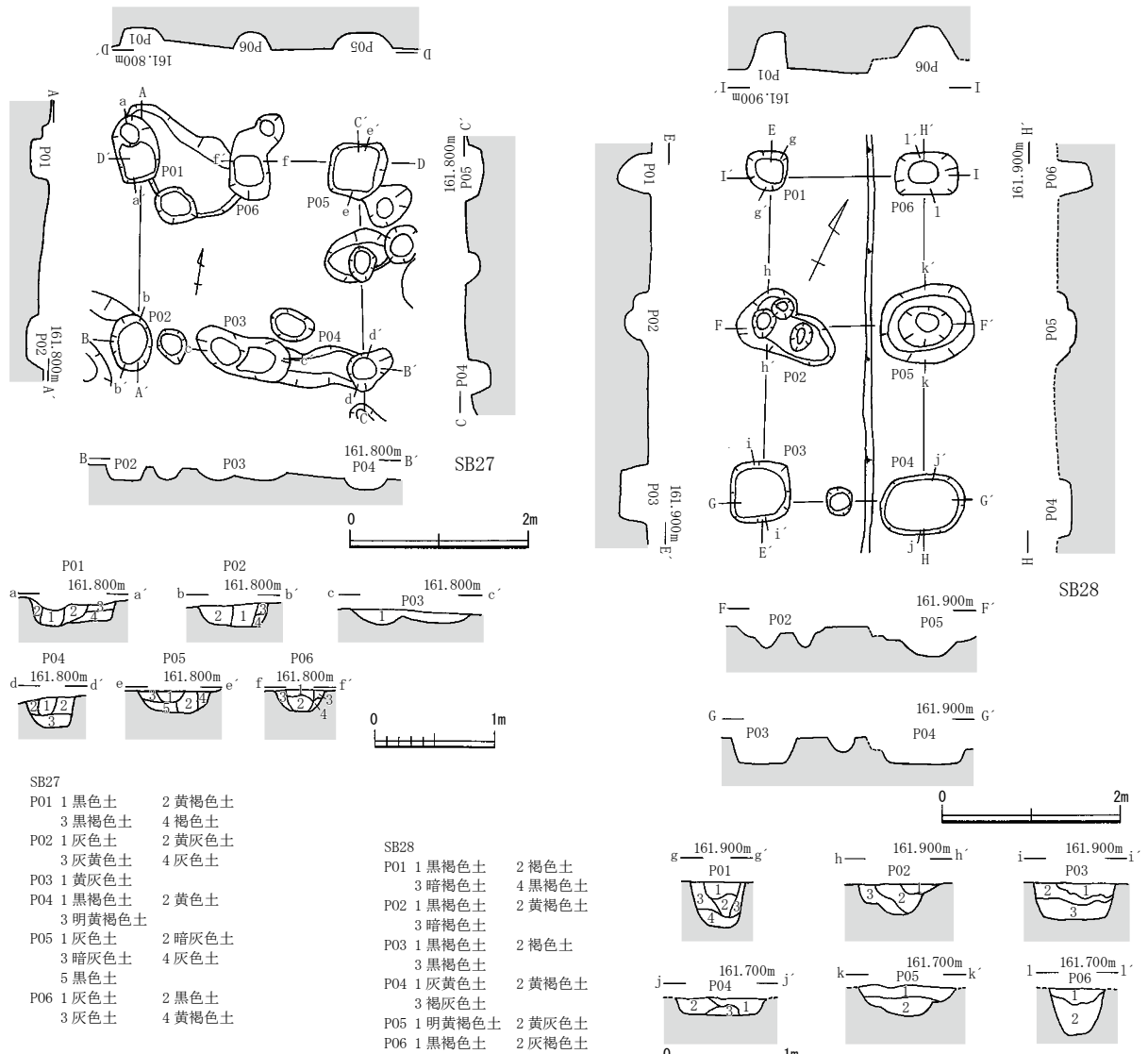
S B 32 (第32図) A 25からB 24・25で検出した。桁行3間×梁間2間の総柱構造で南北の2面に底が付き、ほぼ東西方向に棟をもつ。規模は桁行8.4mで梁間4.9m、柱間幅は桁行が2.8m程で梁間が2.5m程である。構成する柱穴は、小形の円形状で長軸0.6～0.8mを測る。また、P 03はS D 40と重複しており、S B 32が埋没後に構築されている。P 05・09・18から土師質土器の皿、P 02・06・13～15で破片が少量出土した。

S B 33 (第33図) B 27・28でS B 32の南東に位置し、桁行3間×梁間2間で南北方向に棟をもつ。規模は桁行4.8mで梁間3.9m、柱間幅は桁行が1.5～1.7mで梁間が1.5～2.4mを測る。梁間は柱間幅が不規則であり、北側隅柱のP 01・09はやや外方へずれている。また、P 02～04で須恵器と土師質土器の破片等が少量出土した。

S B 34 (第33図) C 28・29からD 28・29で検出した。桁行3間×梁間2間で北西から南東方向に棟をもつ。規模は桁行5.1mで梁間3.7m、柱間幅は桁行が1.6～2.0mで梁間が1.8m程を測る。また、北西隅柱のP 01がやや内方へずれている。P 01・04から土師質土器の破片が僅かに出土した。

S B 35 (第34図) B 27・28からC 27・28でS B 33の南西に位置する。桁行3間×梁間3間で南北方向に棟をもつが、東側桁行のP 07・08間では柱穴を確認できなかった。規模は桁行6.4mで梁間4.4m、柱間幅は桁行が2.0～4.4mで梁間が0.9～2.0mを測る。梁間の柱間幅も不規則であり、やや不整な形状を呈す。P 02でS B 36のP 01・02、P 03で同P 03、P 04で同P 04と重複しており、S B 36が埋没後に構築されている。また、P 09から土師質土器の破片が僅かに出土した。

S B 36 (第34図) C 27・28でS B 35の南西に位置し、桁行3間×梁間2間で南北方向に棟をもつ。



第28図 SB27・28 (縮尺1/60・1/80)

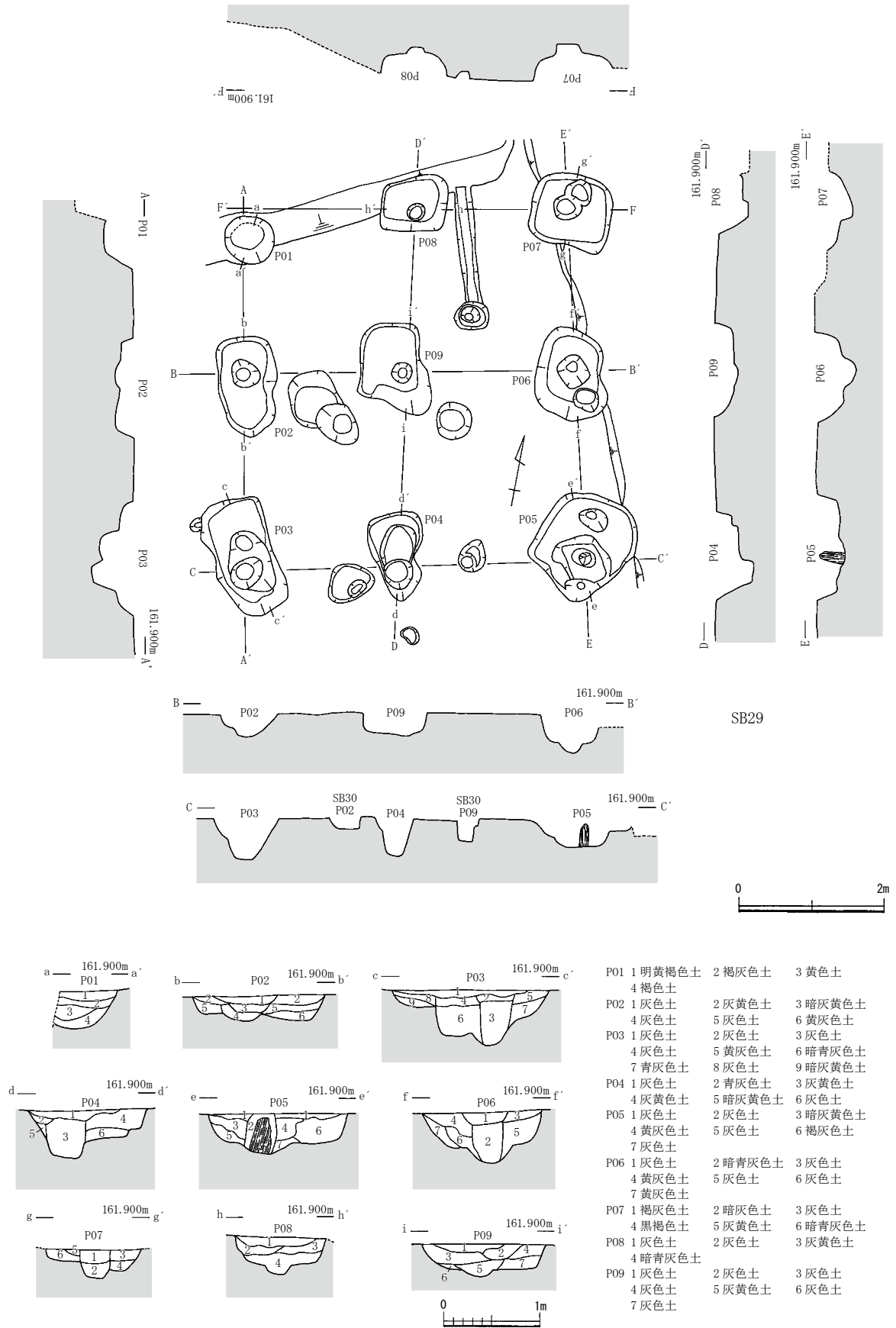
桁行や梁間が平行せず、P 08・10 は列から外れており、不整な小形の方形状を呈す。規模は桁行 3.9 m、梁間が南側 4.2 m で北側 3.6 m を測る。柱間幅は桁行が 1.0 ~ 1.8 m で梁間が 1.8 ~ 2.2 m である。また、P 05 で S K 34 と重複しており、S B 36 が埋没後に構築されている。P 03・07 から須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

SB 37 (第 35 図) E・F 28 で検出した。桁行 3 間×梁間 2 間で北西から南東方向に棟をもつ。規模は桁行 4.2 m で梁間 3.5 m を測り、小形の方形状を呈す。柱間幅は桁行 1.4 m で梁間 1.8 m を測る。また、P 05 から土師質土器の破片が少量出土した。

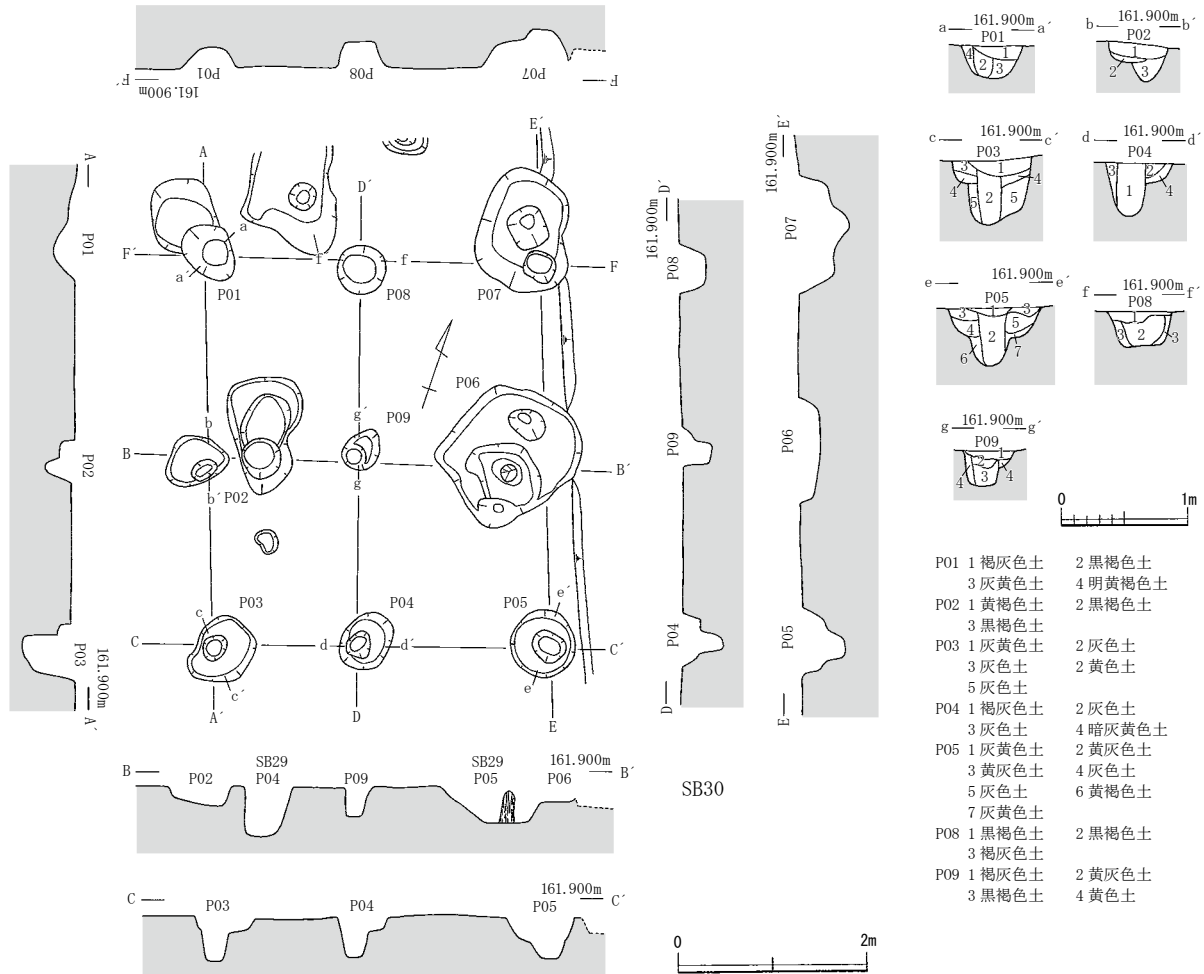
SB 38 (第 35 図) B・C 29 で S B 35・36 の南東に位置する。建物の北東半は調査区外へひろがり、桁行 3 間×梁間 2 間で北西から南東方向に棟をもつと考えられる。規模は桁行 5.2 m で梁間 1.8 m、柱間幅は桁行が 1.7 ~ 1.8 m を測る。

2 柵列 (第 35 図、図版第 6)

SA 01 (第 35 図) C 15・16 から D 15 で検出した。規模は 16 間で全長 12.0 m、柱間幅は 0.7 m 程を測る。柵列の方向はほぼ東西で、S B 21 ~ 26 の棟と直交する。S D 05 が西側に隣接して S A 01 と



第29図 SB29 (縮尺1/60・1/80)



第30図 SB30 (縮尺1/60・1/80)

同方向にのびており、集落内を区画する一連の遺構とも考えられる。また、P 03～13はSR 05、P 17はSR 04下層と重複しており、SR 04・05が埋没後に構築されている。

3 溝 (第6・36～40図、図版第12～15・22)

SD 01 (第36図) A 9とB 9・10で検出した。SR 03と直交してほぼ南北にのび、調査区外の北方へ続く。幅広く直線的で底部に浅く段をもつ。SR 03はC 10で分岐し2条となり、北側流路が埋没後にSD 01が構築されている。SD 01とSR 03により方形状に区画され、内部は小形のピットが群在する。周辺で中世の遺物がやや多く出土しており、屋敷地が調査区外にひろがると考えられる。墨書の坏A、坏Aと坏蓋や甕等、越前焼の甕と片口鉢や播鉢、常滑焼の壺、古瀬戸製品の折縁深皿と土師質土器皿、茶臼等が多く出土した。底面付近でも越前焼等が出土しており、中世以降に埋没したと考えられる。

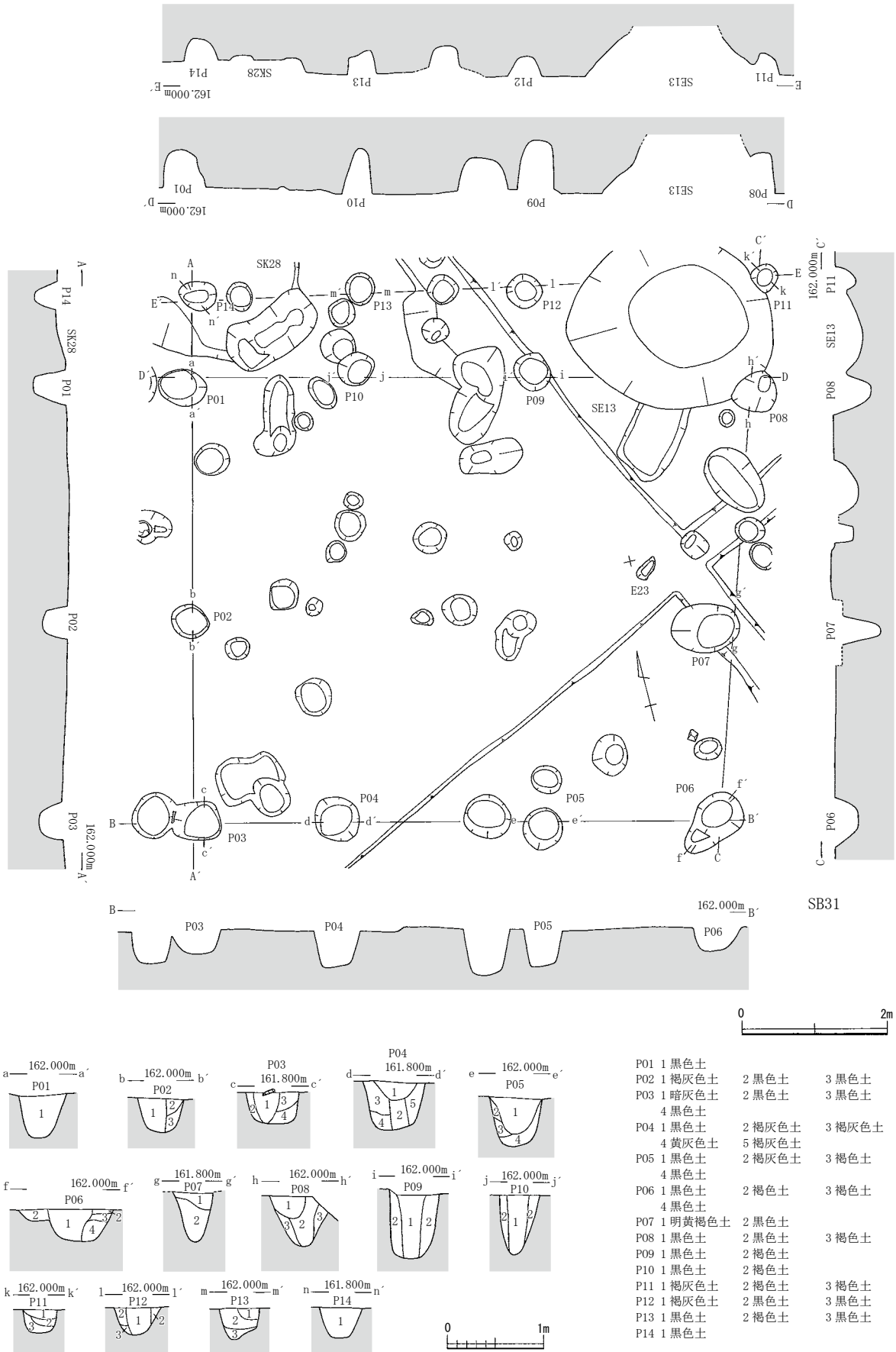
SD 02 (第36図) B・C 9でSB 14の南側に位置し、細長く直線的に東西にのびる。SB 14の梁間と平行するが関連は不明確である。また、土師質土器の破片や石鏃等が僅かに出土した。

SD 03 (第36図) D 11・12でSE 04の北東に位置する。緩く湾曲して弧状を呈し、南東へのびる。

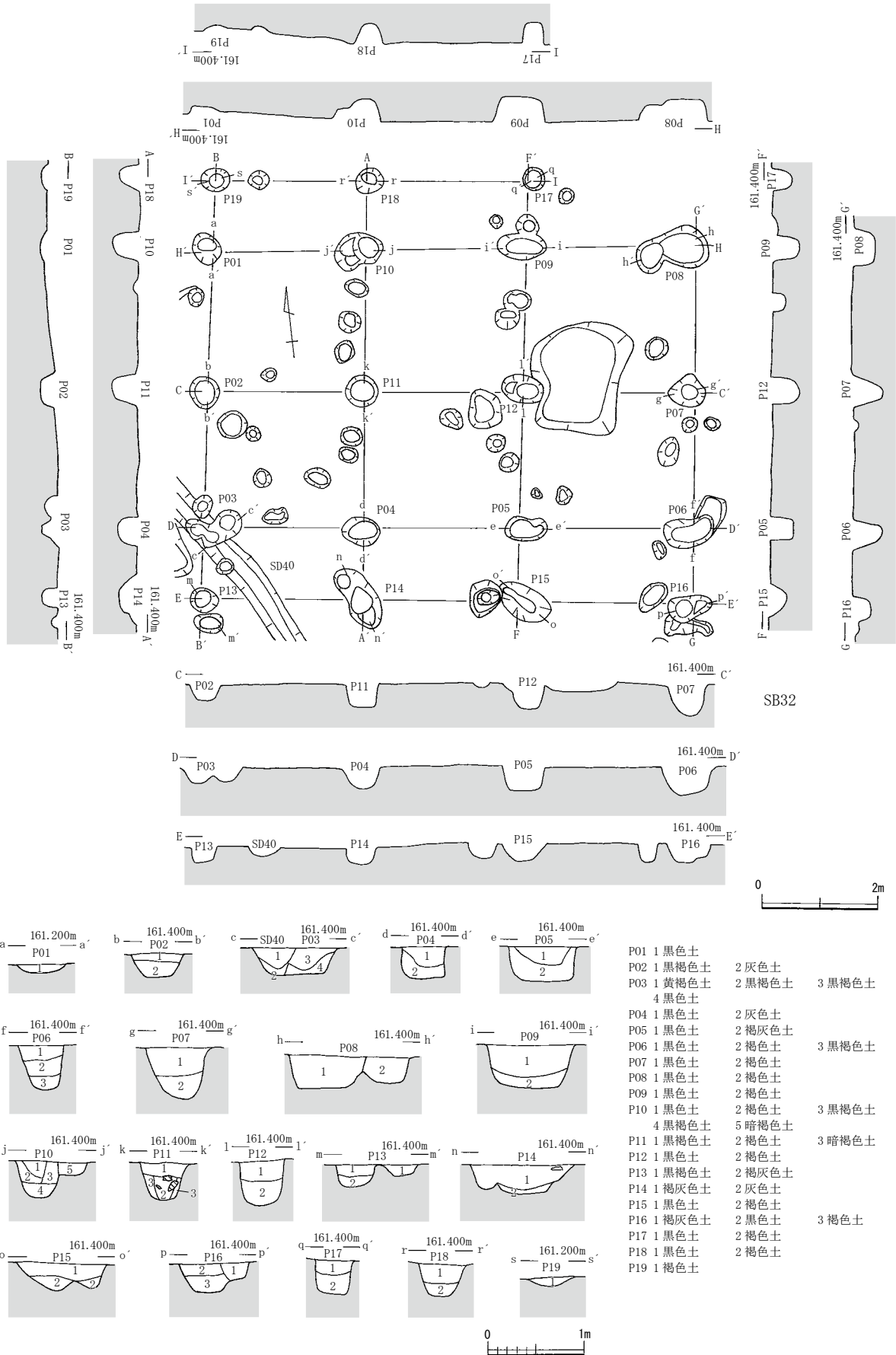
SD 04 (第36図) A 17からB 16・17で検出した。SR 04の肩から東西にのびて調査区外へ続く。やや幅広く不整形な形状で、南肩に緩く段をもつ。SA 01とSD 04・05は、SR 04と斜交するが東西で一直線上に構築されている。前述の通り、集落内を区画する一連の遺構とも考えられる。

SD 05 (第36図) D 15でSB 21の北東に位置する。緩く湾曲して弧状を呈し、途切れるが細長く

第1節 小矢戸地区の遺構

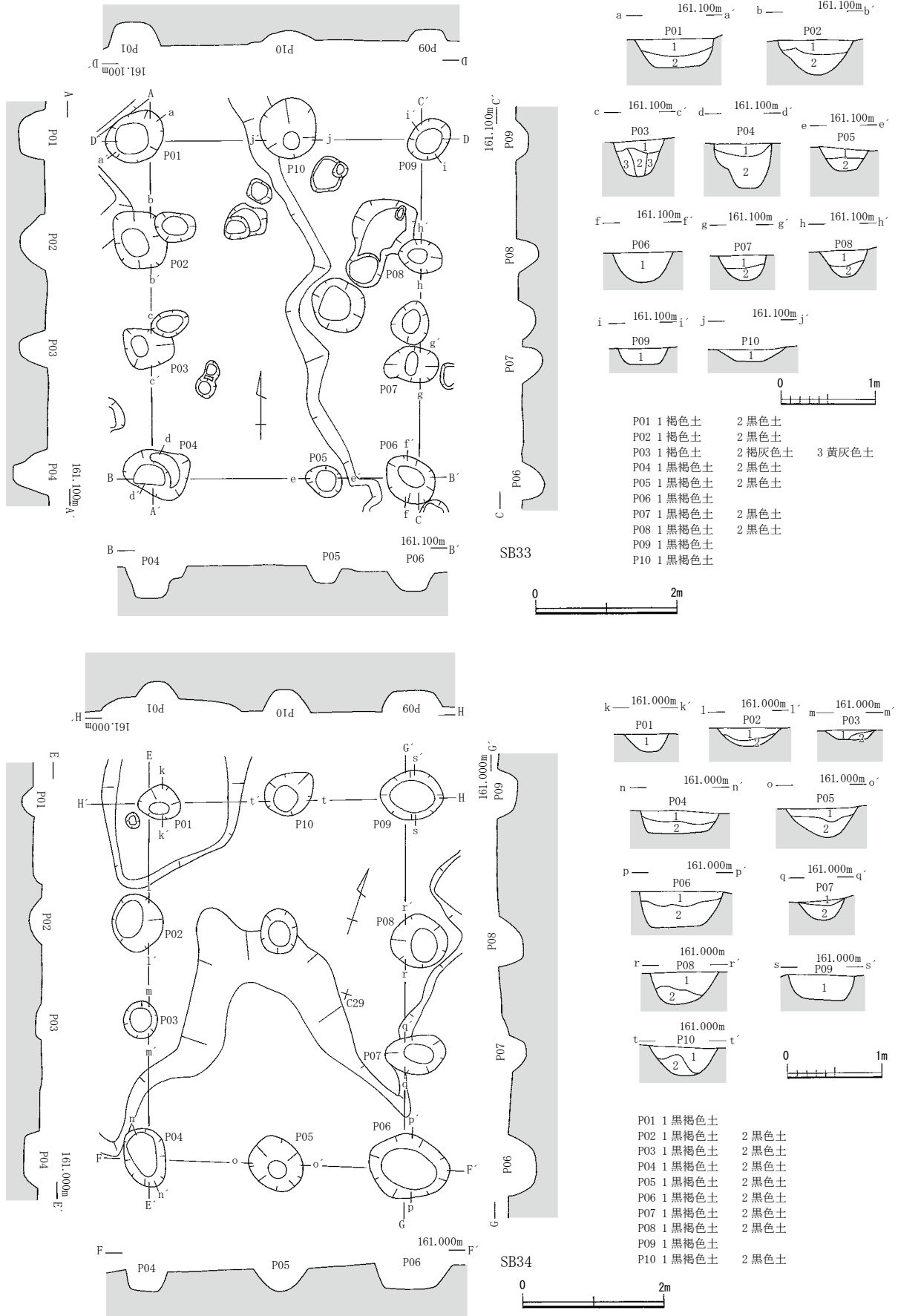


第31図 SB31 (縮尺1/60・1/80)

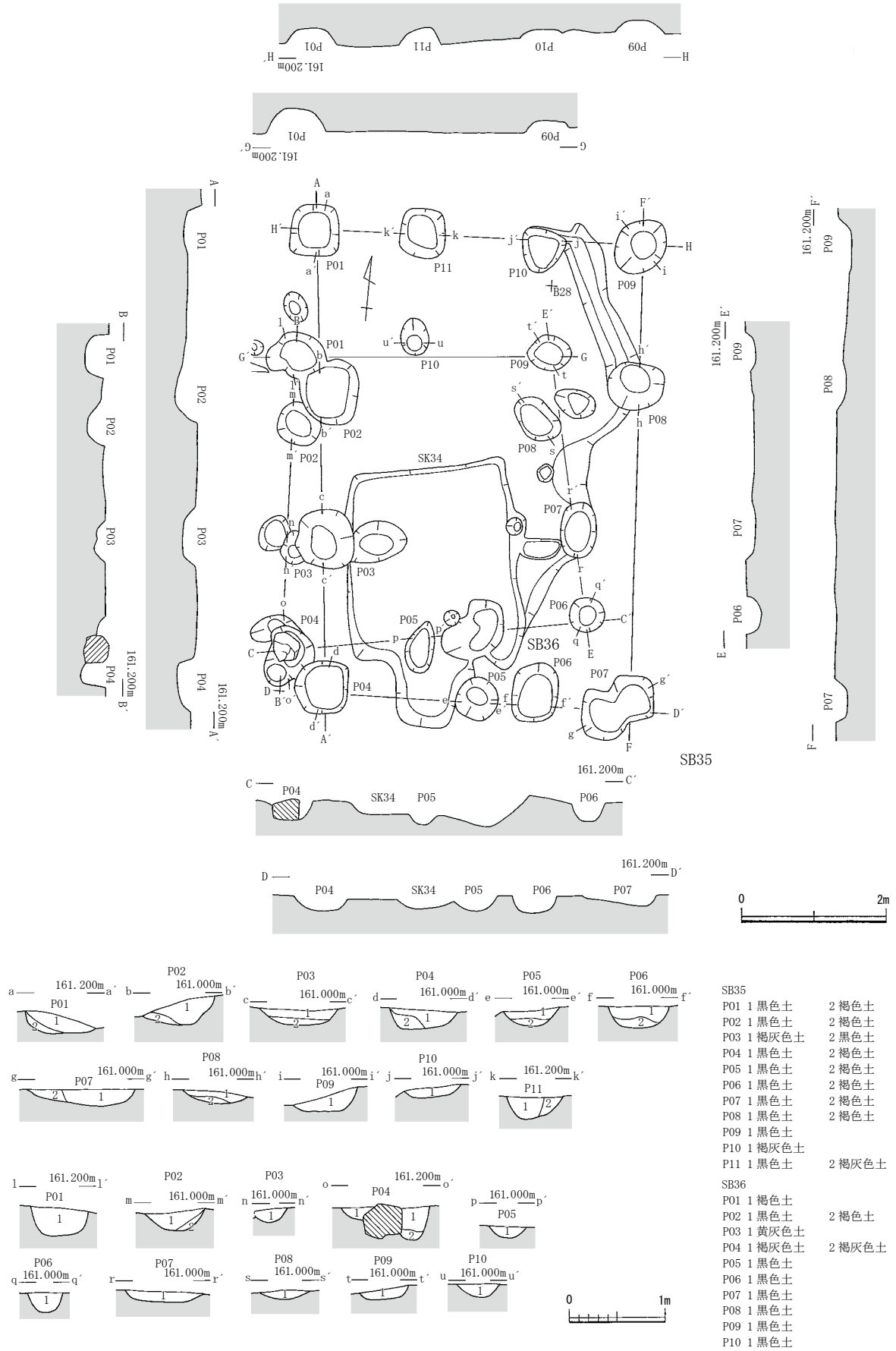


第32図 SB32 (縮尺1/60・1/100)

第1節 小矢戸地区の遺構

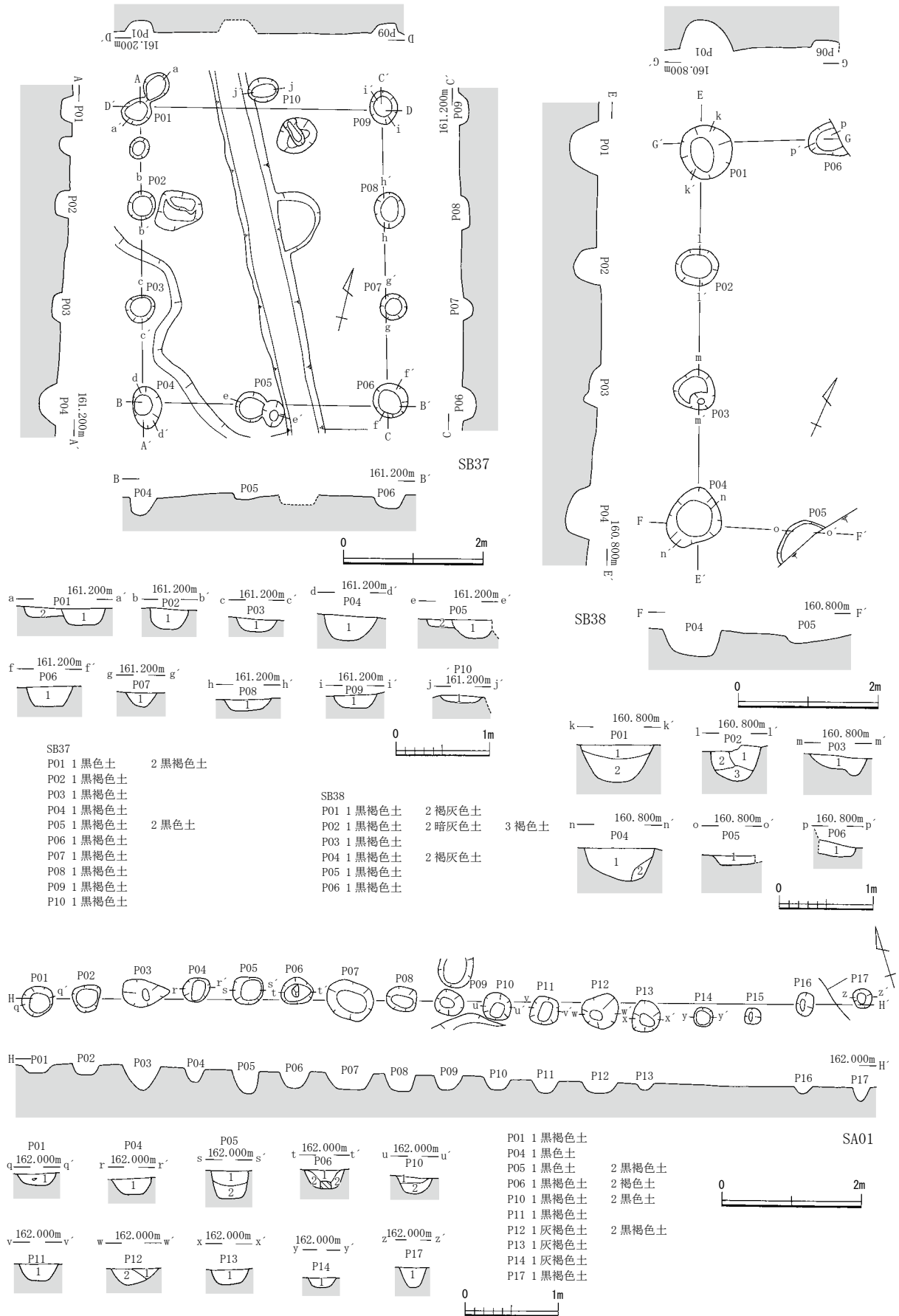


第33図 S B33・34 (縮尺1/60・1/80)

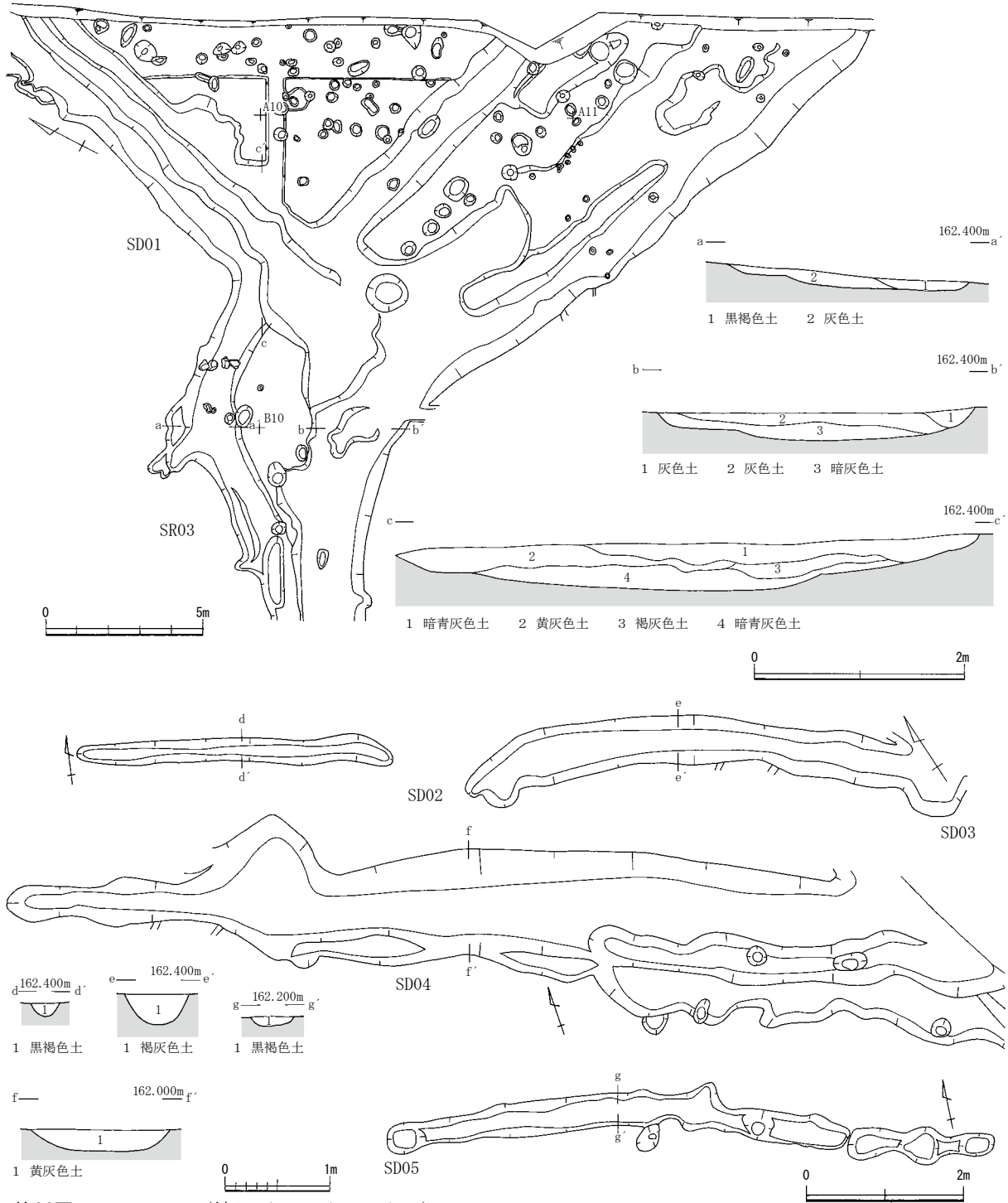


第34图 SB35・36 (縮尺1/60・1/80)

第1節 小矢戸地区の遺構



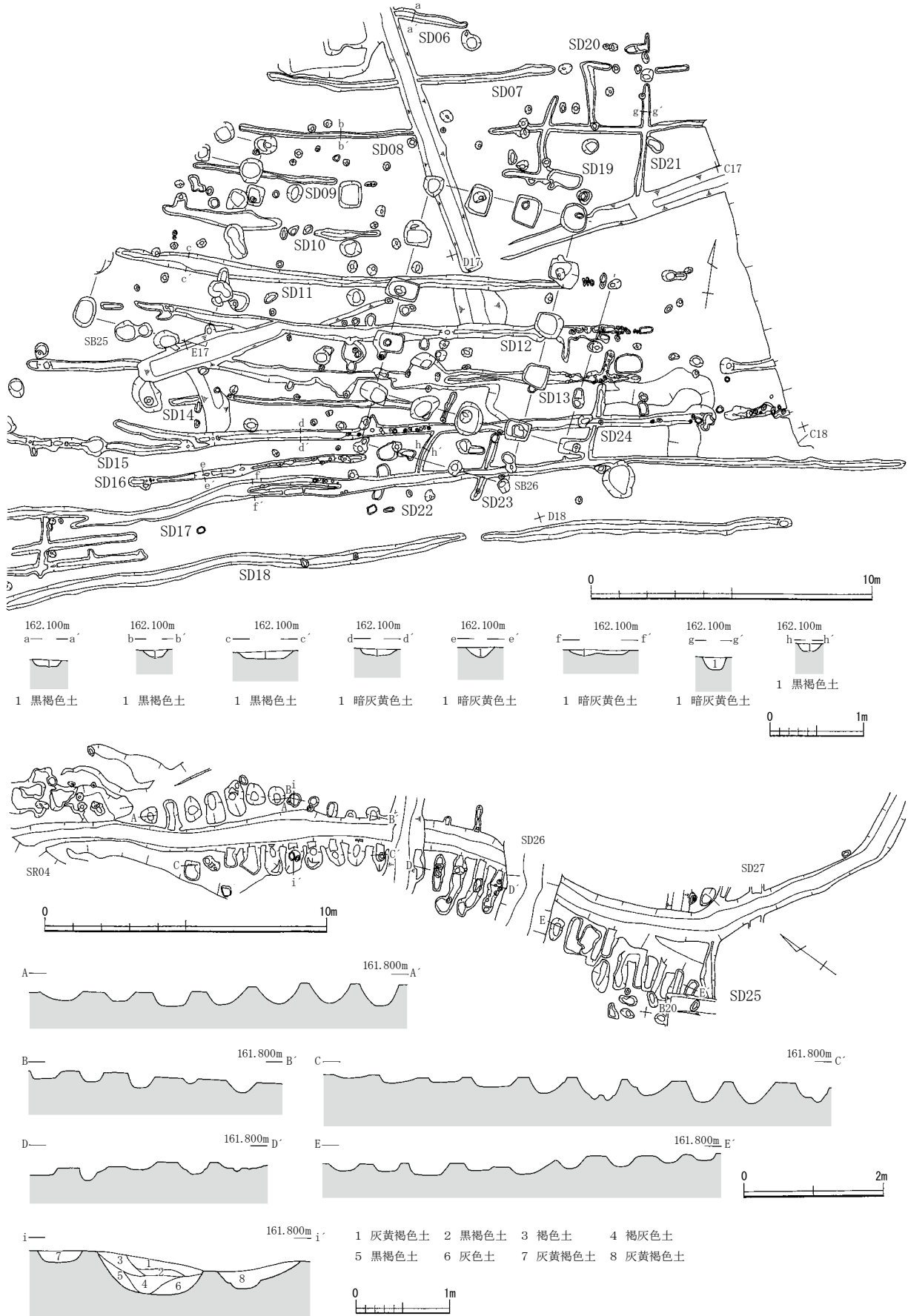
第35図 SB37・38、SA01 (縮尺1/60・1/80)



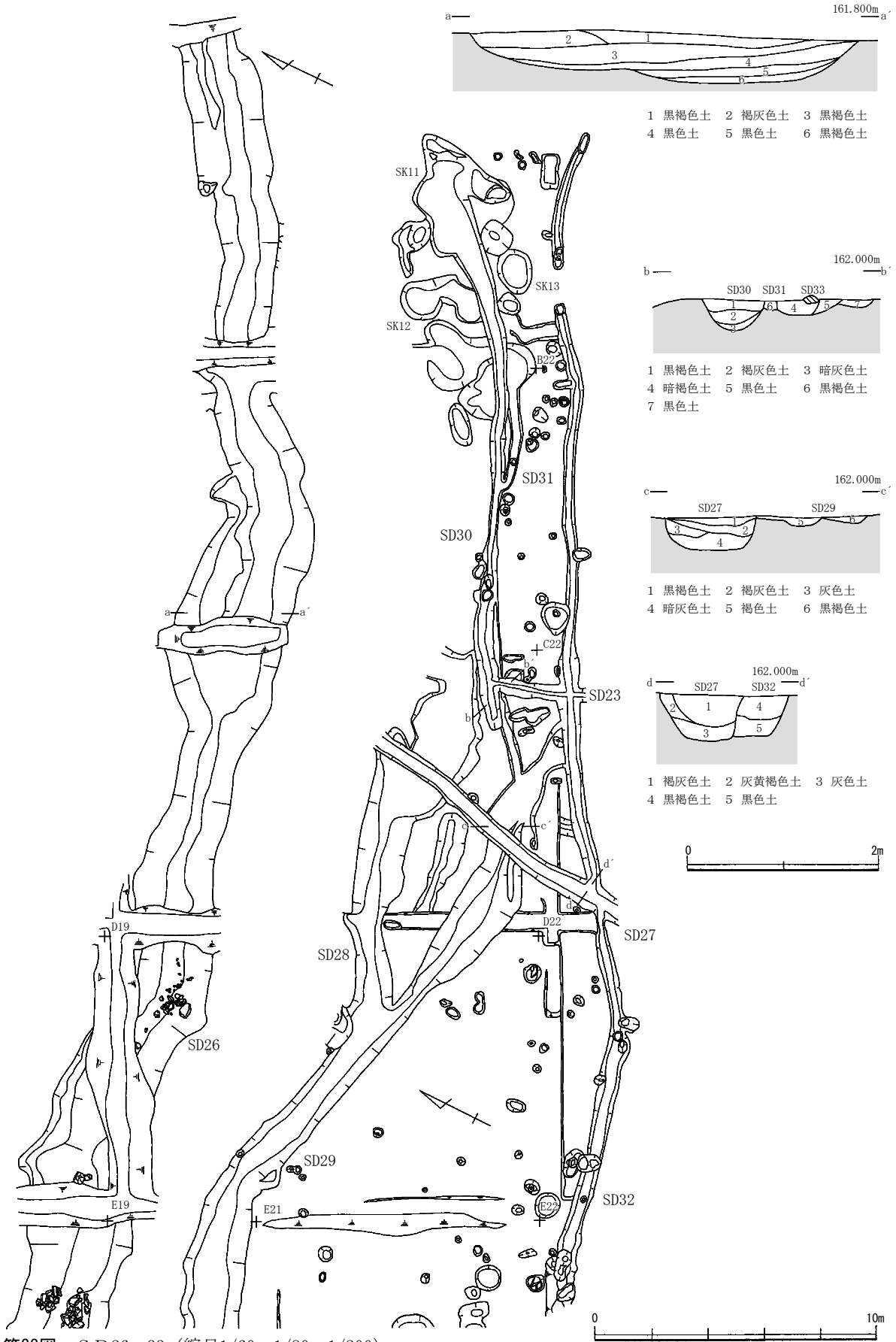
第36図 SD01～05 (縮尺1/60・1/80・1/200)

東西にのびる。東半は底面に浅いピットがほぼ等間隔に並び、東側に隣接するS A 01と連続的である。

SD 06～24 (第37図) C 18とD・E 16～18、F 16・17で検出し、建物群の南側にまとまる。SD 13・15～18は県道区から続き、既に報告した。SD 06～18は、1.8～2.0m程の間隔で平行し、細長く東西にのびる。SD 07～10・18は中間が途切れ、SD 12・13東端とSD 15中央は底面に凹凸がある。SD 19～24も2.0～3.0m程の間隔で平行して細く南北にのび、SD 06～18と斜交する。SD 06～21はSR 06、同09～11はSB 25、同11～15・17はSB 26と重複しており、SR 06が埋没後にSD 06～21、次にSB 25・26の順で構築されている。SD 07で墨書の坏Aや坏Aと坏蓋、他に土師質土器の破片



第37図 SD06~25 (縮尺1/60・1/80・1/200)



第38図 SD26~33 (縮尺1/60・1/80・1/200)

が東半中心にやや多く出土した。SD 08～18では、須恵器や土師質土器の破片が僅かに出土した。

SD 25 (第37図) A 20とB 17～20で検出した。B 17でSR 04の東肩から緩く蛇行しながら南東へ細長くのび、途中で大きく湾曲して調査区外の東方へ続く。SD 25の南東半以外では、不整な楕円形状のピットが等間隔に群在し2条の列をなしている。ピット列は幅0.8～1.8m程で、共に断面は凹凸が著しく波板状となる。道状遺構等の基礎とも推察されるが不明確である。また、SR 07やSD 26・27と重複しており、SR 07が埋没後にSD 25、次にSD 26・27の順で構築されている。

SD 26 (第38図) A～D 19とE 18・19、F 18・19で検出し、西端は県道区であり既に報告してある。幅広くほぼ直線的に東西にのび、途中で僅かに湾曲して調査区外の北東へ続く。須恵器の甕と越前焼の甕や播鉢等が少量出土した。SD 26の以北は古代、以南からSR 08にかけては中世や弥生時代の遺構と遺物が多く分布している。周辺は遺構が疎らであり、SD 26は中世における集落境の溝とも考えられる。また、SD 25やSR 04・06・07と重複しており、埋没後にSD 26が構築されている。

SD 27 (第6・38図) A～C 20とD 21・22、E 22～24、F 23～26で検出した。北東の調査区外から続き、C 20で南方、E 23で南東へ屈曲して細長く直線的にのびる。他にSD 30～33・40も同様な形状であり、屋敷地の区画溝と推察される。また、SD 25・28・29・32・35、SK 29・30、およびSR 04と重複しており、埋没後にSD 27が構築されている。須恵器の坏A・Bと壺や破片、越前焼の甕や壺、土師質土器の破片等が北半のB・C 20からD 21にかけてやや多く出土した。

SD 28 (第38図) D・E 21で検出した。SD 29から分岐して北東へのび、断面は浅く不整な形状である。SD 29と覆土が共通しており、同時に存在したと考えられる。弥生土器の甕等が少量出土した。

SD 29 (第38図) D 21からE 20・21、F 20で検出した。西側は県道区から続き、既に報告してある。SR 06からやや幅広く東方へのびて途中で緩く湾曲し、東端は断面が浅く不整な形状となる。SD 27・31・32と重複しており、SD 29が埋没後に構築されている。弥生土器の甕と壺や高坏・器台等が西半を中心に多く出土した。また、粉挽白下白も出土している。

SD 30 (第38図) B～D 21で検出し、北東から南西に細長くのびる。SD 31と平行してほぼ重なり、SD 33とは直交する。SD 31・33、SK 11・12と重複しており、SD 31とSK 11・12が埋没後にSD 30が構築されている。また、SD 33と前後関係は不詳である。

SD 31 (第38図) C・D 21で検出し、SD 30と同様に北東から南西に細長くのびる。SD 30・33と重複しており、SD 31が埋没後に構築されている。土師質土器の破片が僅かに出土した。

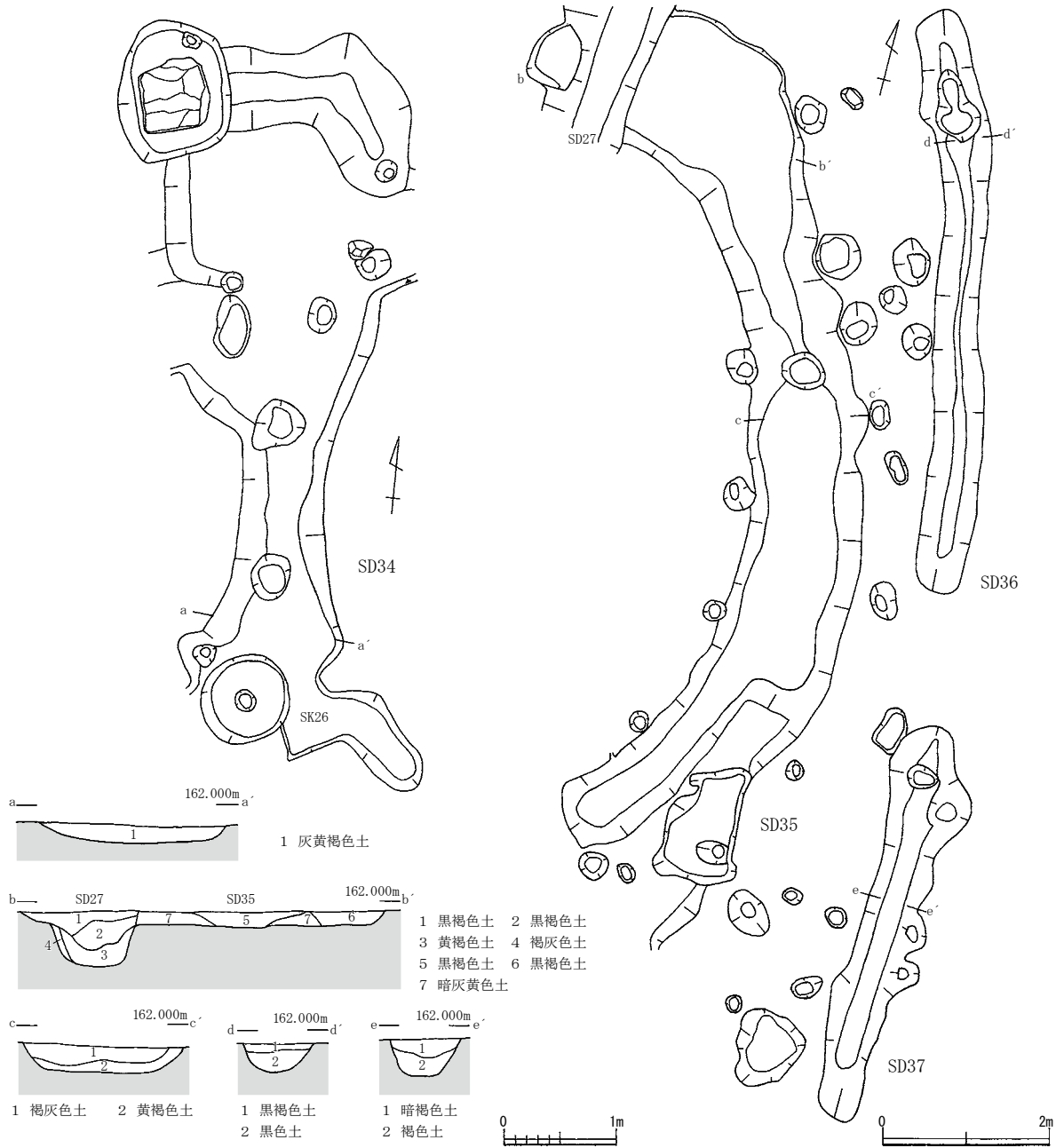
SD 32 (第38図) B～F 22で検出した。途中で緩く湾曲しB 22で途切れるが、ほぼ直線的に北東から南西に細長くのびる。SD 27・29と斜交、SD 33と直交し、SD 40とは北東端で隣接する。SD 29が埋没後にSD 32、次にSD 27の順で構築されている。SD 33・40と前後関係は不詳である。また、須恵器の甕と土師質土器の皿や破片等がやや多く出土した。

SD 33 (第6・38図) D 21～25で検出した。ほぼ直線的に北西から南東に細長くのび、SD 30～32と直交する。また、SD 38と重複するが前後関係は不詳である。弥生土器の甕等が北半で少量出土した。

SD 34 (第39図) D 22・23で検出した。北半は幅広く中程ですばまり、南半はやや細く南北にのびる。断面も浅く不整な形状を呈す。また、南端でSK 26と重複するが前後関係は不詳である。

SD 35 (第39図) E 23・24で検出した。北西から南西へ大きく湾曲し、やや幅広くのびて弧状を呈す。北西端は断面が浅く不整にひろがり、SD 27と重複する。土師質土器の破片が僅かに出土した。

SD 36・37 (第39図) SD 36はE 23・24、SD 37はE 24でSD 35の東側に位置し、共にほぼ

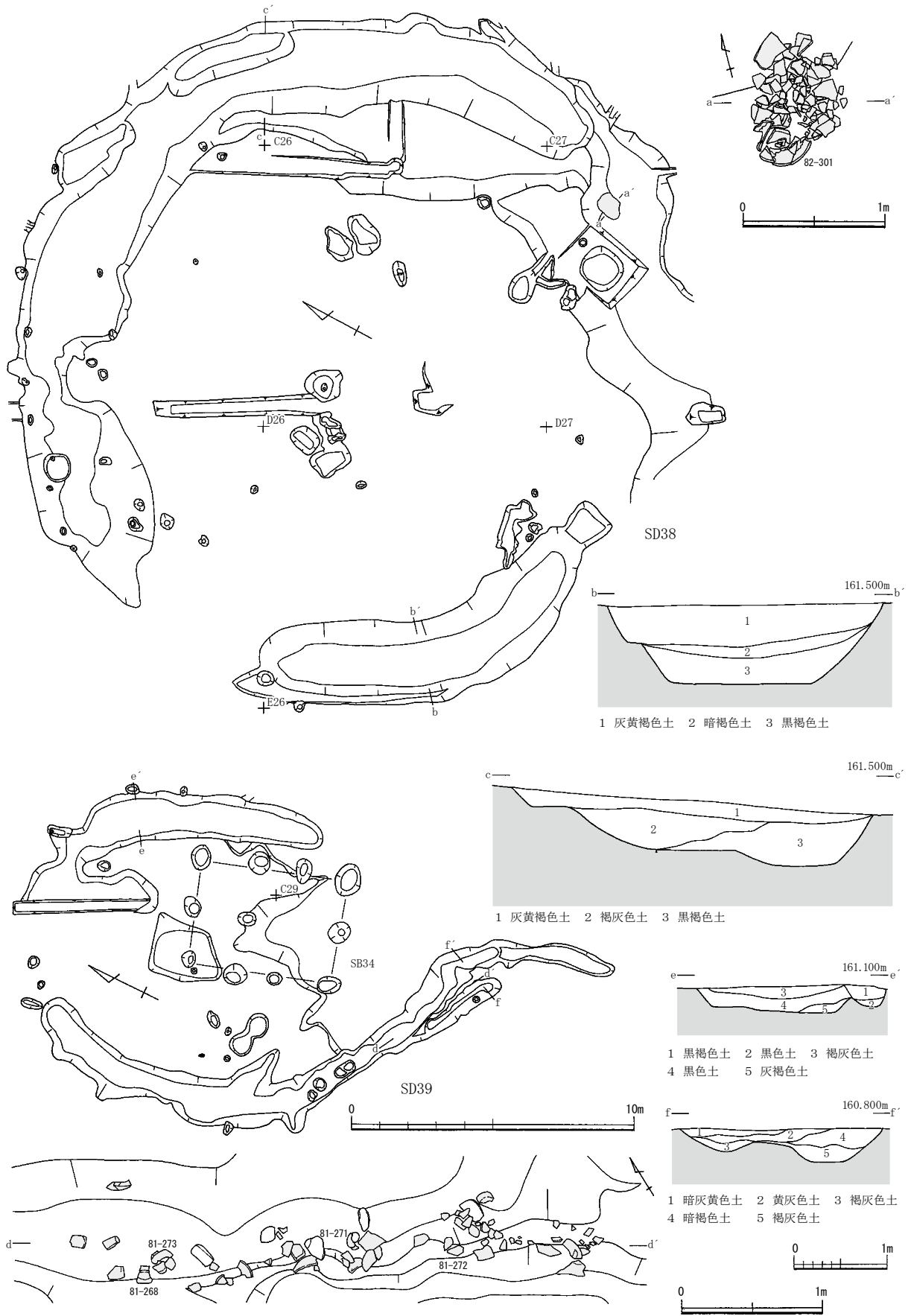


第39図 SD34~37 (縮尺1/60・1/80)

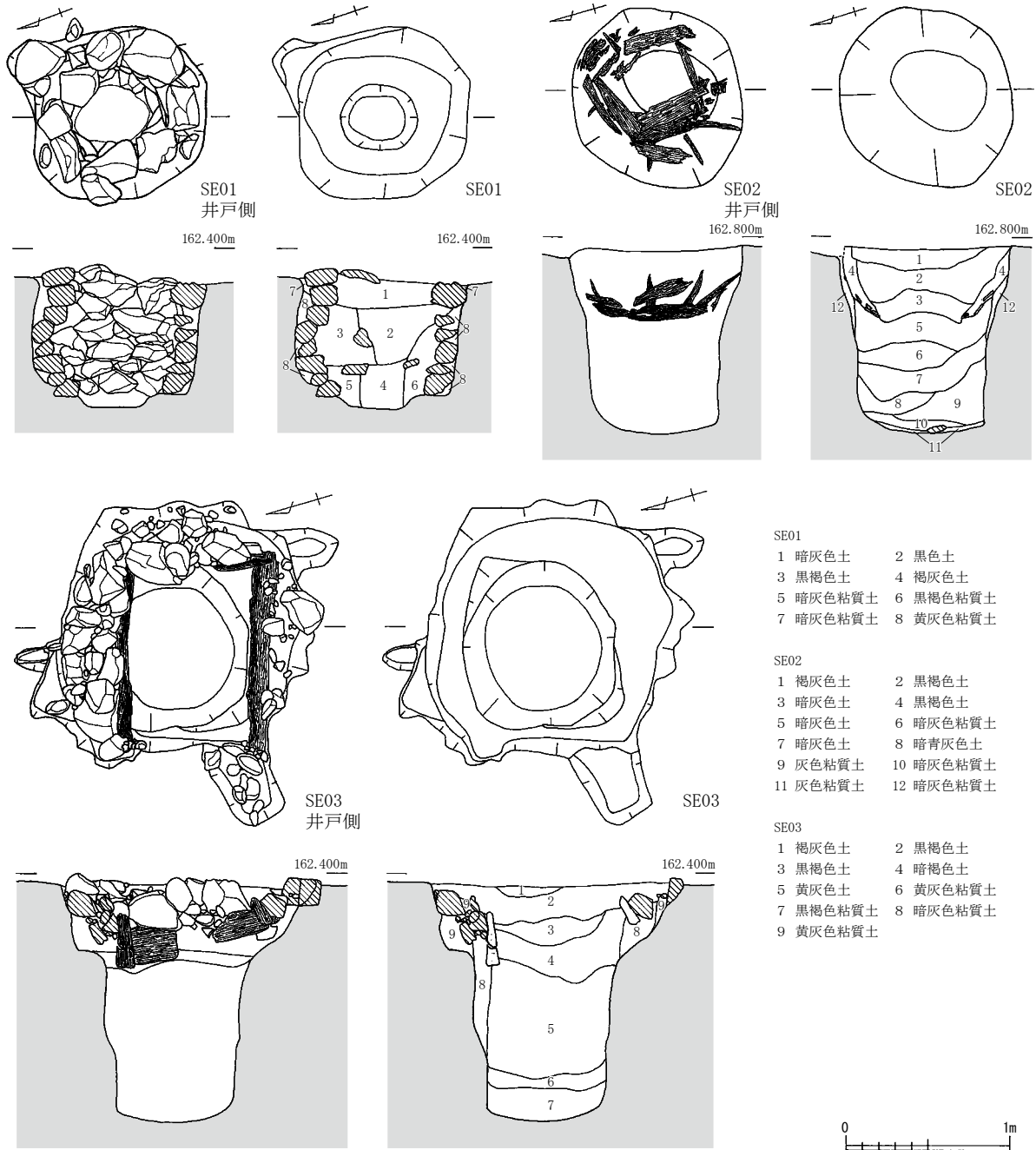
南北に細長くのびる。また、SD 37 からバンドコが出土した。

SD 38 (第40図) C~E 25~27で検出した。大きく湾曲して幅広くのび、西と南側で途切れるが大形の円形状を呈す。北西は断面が浅くなり、南東はSR 08との区分が不明瞭で不整な形状である。周溝状だが性格は不詳であり、西側の県道区から調査区外にも同様な形状の溝が隣在していると考えられる。須恵器の坏Aと坏蓋や破片、土師器の甕、弥生土器の甕と高坏、及び土師質土器の破片等が南半中心に多く出土した。また、須恵器の大甕1個体分が南東の肩でまとまって出土した。

SD 39 (第40図) C 28・29とD 28~30でSB 34の周辺に位置する。北半は大きく湾曲してやや幅広くのび、北側では途切れるが円形状を呈す。中程から南東へ直線的にのび、途中で南方へ湾曲する。須恵器で墨書の坏Aや坏A・Bと皿、甕と鉢や破片、及び土師質土器の破片等が南東半を中心に握拳大程の礫と共に一括して廃棄された状況で多量に出土した。



第40図 SD38・39 (縮尺1/40・1/60・1/200)



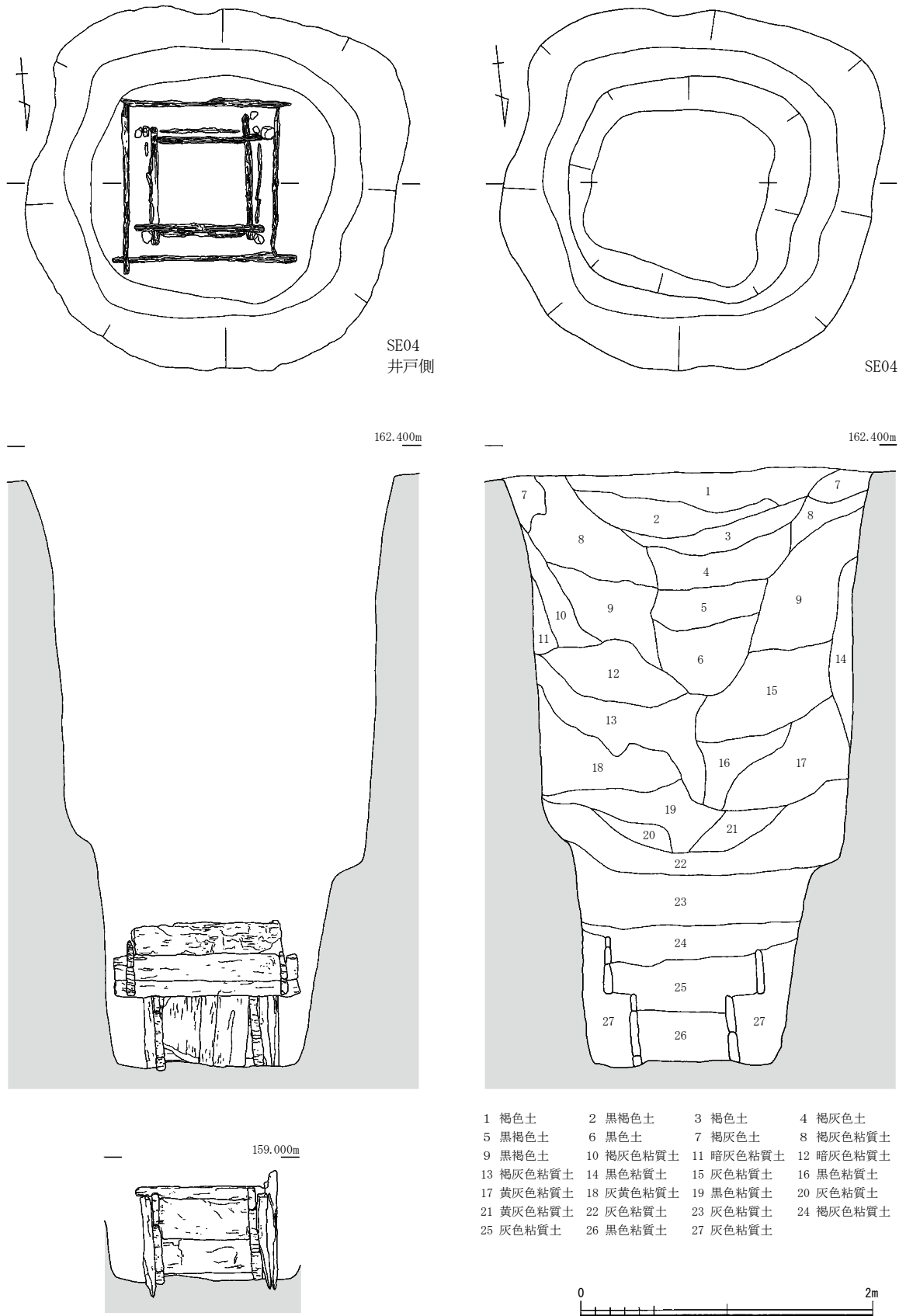
第41図 SE01~03 (縮尺1/40)

SD 40 (第6図) A 21・22 と B 22 ~ 26、C 26 で検出した。北方の調査区外から続き、B 22 で南東、B 25 で南方へ屈曲し細長くのびる。SB 32 の P 03、SK 14・15・18 と重複しており、埋没後に SD 40 が構築されている。土師質土器の皿等が北半で少量出土した。

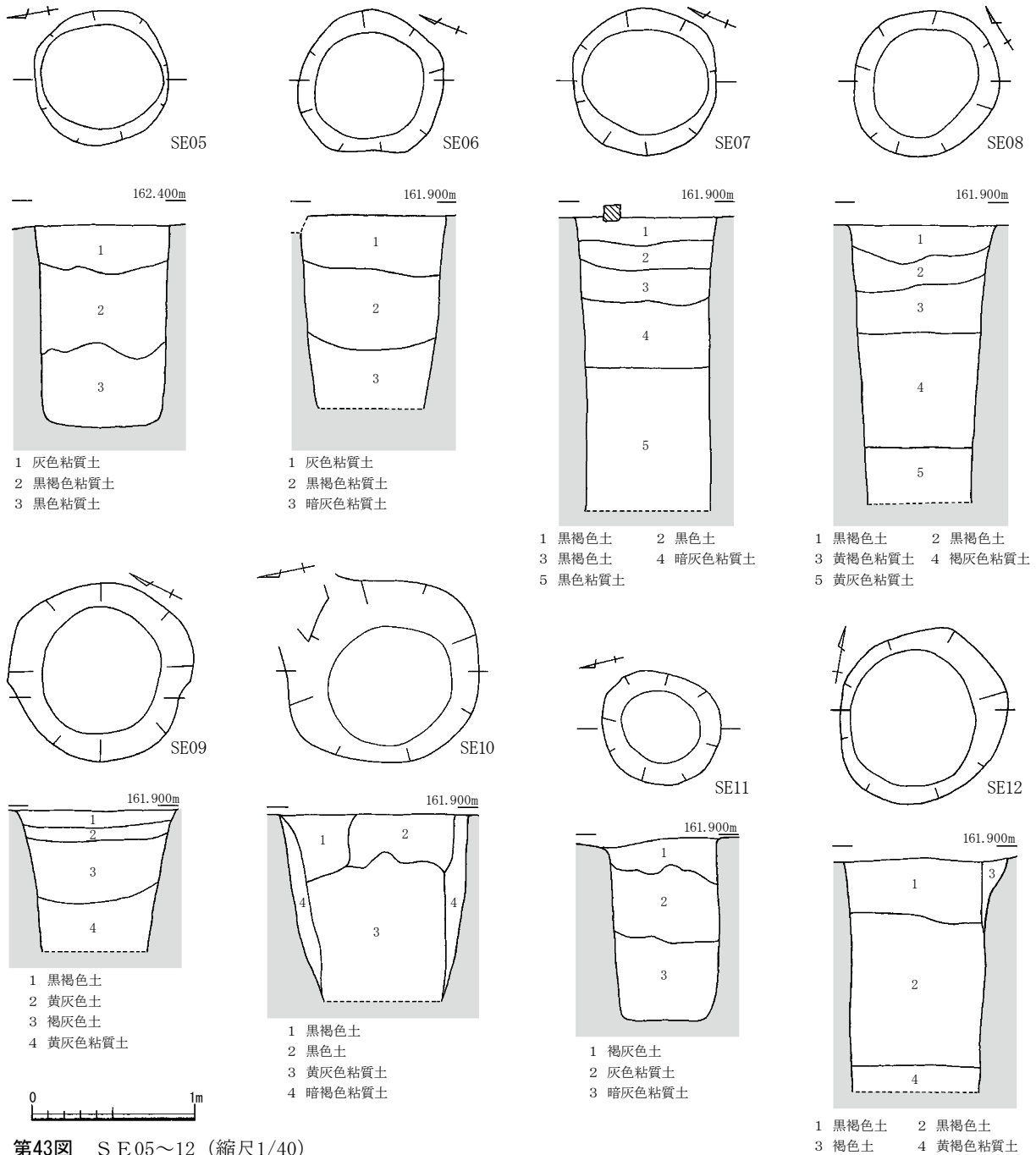
4 井戸 (第41 ~ 44 図、図版第16 ~ 18)

SE 01 (第41 図) C 8 で SB 13 の南側に位置し、井戸側に石組をもつ。掘方は平面がやや不整な円形状で、長軸 1.1 m を測る。断面は幅広の筒状で底部中央に緩く段があり、深さは 0.8 m である。石組は、20 ~ 30cm 大の礫がやや斜め上方に 7 ~ 8 段積み上げられ、内径 0.5 ~ 0.7 m を測る。また、須恵器の破片や土師質土器の皿等が少量出土した。

SE 02 (第41 図) D・E 8 で SB 12 の南東に位置し、井戸側上部に木組をもつ。掘方は平面が円



第42図 SE04 (縮尺1/40)



形状で長軸 1.2 m を測る。断面は筒状だが上部で斜めに緩く開き、深さは 1.1 m である。木組は、大半が倒壊し不明確だが、幅 15 ～ 20cm 程の板材を用いた方形の横板組であり、四隅と各辺中程に補強用とみられる杭をもつ構造であったと推察される。また、覆土の上層中心に越前焼の甕と土師質土器の皿や破片、下層では箸や曲物片等がやや多く出土した。

SE 03 (第 41 図) D・E 9 で SE 02 の南東に位置し、井戸側上部に木組と石組をもつ。掘方は上部がやや不整な隅丸方形で、長軸 1.5 m 程を測る。下部は円形状で底部中央が北西へずれ、長軸 1.0 m である。断面は筒状だが上部で斜めに大きく開き、深さは 1.4 m である。木組は、幅 20 ～ 25cm 程の板材を用いた方形の横板組で、長軸 1.1 m を測る。石組は、北と東側を中心に遺存し、握拳大程の礫が木組の上位に 1 ～ 2 段積まれている。越前焼の甕や土師質土器の皿の他、底部付近で網代片が出土した。

SE 04 (第42図) D 12でSB 17の北東に位置し、大形で井戸側下部に木組をもつ。掘方は平面が隅丸形状で、長軸2.7mを測る。断面は筒状だが、下部で明瞭に段をもつ。また、上部で斜めに緩く開き、深さは4.0mである。木組は上下2段の横板組で、共に平面は正方形を呈す。幅20～30cmで厚さ5cm程のケヤキの板材が用いられ、両端近くを上下から切込んで相欠仕口が作出されている。交互に組合せて上下段とも2段分積み上げられ、上段は幅1.0mで高さ0.5m、下段は幅0.6mで高さ0.7mを測る。下段の外面には、四隅に幅10cm程の杭と各辺に幅30cm程の板材を用いた縦板組があり、補強用と考えられる。墨書の坏Aや転用硯の坏B、坏A・Bと坏蓋の他、土師質土器の破片等が多く出土した。

SE 05～12 (第43図) いずれも小形で素掘りの井戸である。掘方は平面が円形状で長軸0.9～1.2mを測る。断面は筒状を呈し、SE 09・10は上方へ斜めに緩く開く。作業の安全を考慮し、SE 05・11以外は未完掘である。SE 05・11は深さ1.2m程を測り、他は深さ1.0～1.8mまで検出した。SE 05はC 8でSE 01の南西、SE 06はD 21でSD 28の北東に位置する。SE 07はF 21、同08～10はE 22、同11はE 23、同12はF 23で検出し、SB 31の北西から南東に分布する。また、SE 12で土師質土器の皿や破片が僅かに出土した。SE 07では、越前焼播鉢と土師質土器の破片が少量出土した。

SE 13 (第44図) E 22でSB 31の北東に位置する。大形の井戸で、掘方は平面が東西へひろがる楕円形状を呈し、長軸で2.8mを測る。断面は筒状だが上部で斜めに大きく開く。前述同様に作業の安全を考慮して未完掘であり、深さ2.0mまで検出した。SB 31のP 08・11と重複するが、前後関係は不詳である。また、越前焼播鉢や染付碗、土師質土器の破片等が少量出土した。

SE 14 (第44図) C 25でSB 32の南西に位置し、大形で井戸側下部に曲物をもつ。掘方は平面が円形状で、長軸3.4mを測る。断面は深鉢形で、深さ2.9mを測る。上部と中程に段をもち、斜めに大きく開く。曲物は1段分検出したが、13層は掘方の覆土であり、何段積か不詳である。薄板材が1枚分僅かに遺存し、径0.6mで高さ0.2m程である。土師質土器皿や青磁碗の他、須恵器の坏A・Bや坏蓋、土師質土器の破片等が多く出土した。また、有茎尖頭器も1点出土している。

5 土坑 (第45～47図、図版第19・20)

SK 01 (第45図) F 3でSB 16の南東に位置し、平面は楕円形を呈す。SK 01・02は、底面のほぼ中央に小形で円形のピットをもち、底部が2段となる。時期不詳だが陥穴とも考えられる。

SK 02 (第45図) E 4でSK 01の東側に位置し、平面は円形状を呈す。4.3m程の間隔でSK 01とほぼ東西方向に並ぶと考えられる。

SK 03 (第45図) B 9でSD 01の西側に位置する。平面は楕円形を呈し、断面は緩く立ち上がる。常滑焼の壺や越前焼の甕、土師質土器の皿や破片等が少量出土した。

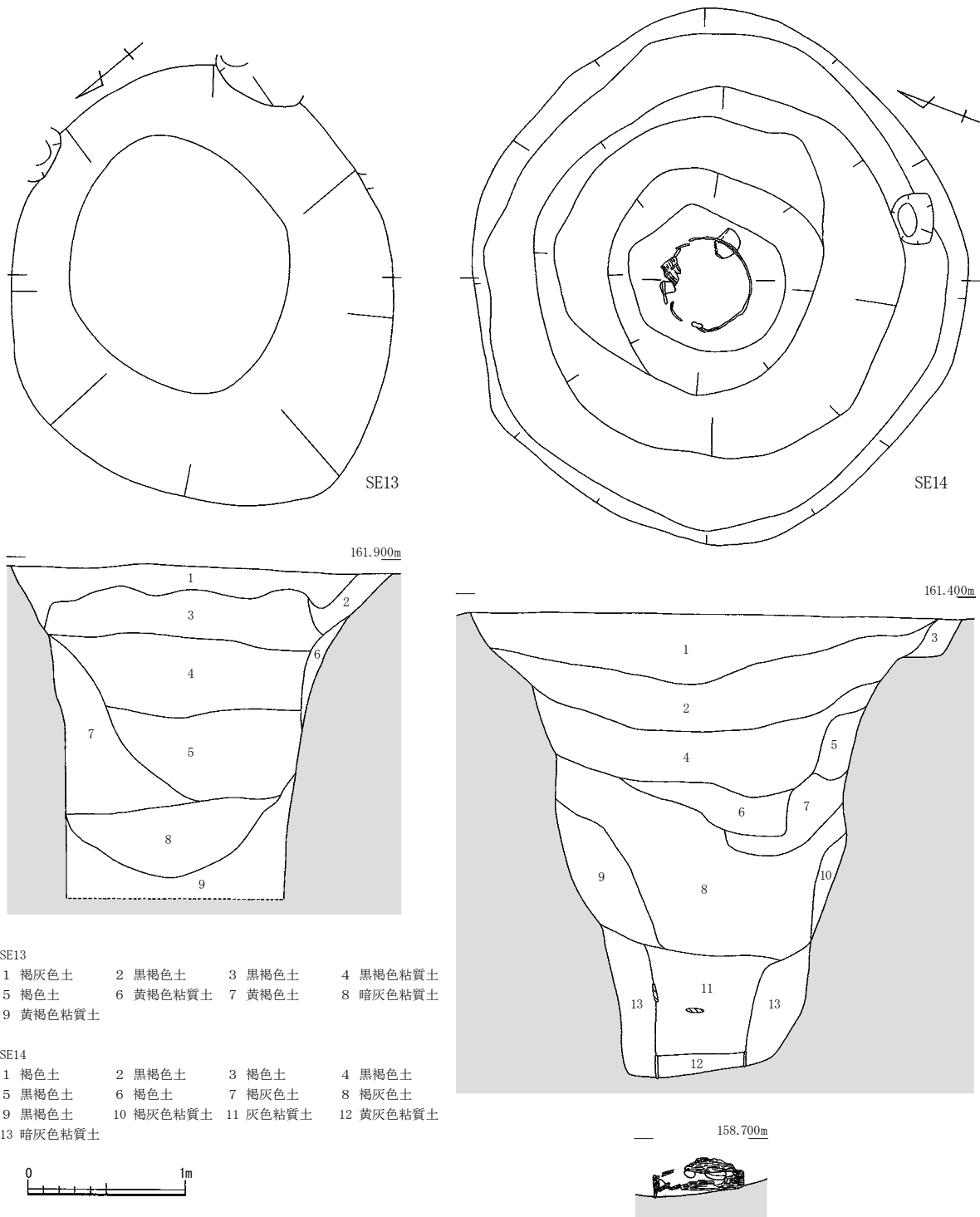
SK 04 (第45図) B 9でSK 03の南西に位置する。平面は円形状を呈し、底面は平坦である。

SK 05 (第45図) E 11で遺構の集中域から離れ、SR 01の南側に位置する。平面はやや不整な楕円形で、南西の肩に段をもつ。覆土に炭や焼土を多く含み、南半中心に多くの土器が一括して廃棄された状況で出土した。須恵器は坏Aと坏蓋や甕等、土師器は甕等が出土している。

SK 06 (第45図) E 14でSB 20の北側に位置し、平面は凹凸のある不整な形状を呈す。断面は浅く、底面のほぼ中央で僅かに段をもつ。弥生土器の甕と壺、高坏や器台等がやや多く出土した。

SK 07 (第45図) E 8・9で検出し、平面はやや大形の隅丸方形を呈す。SK 07～09は法量が同程度であり、SR 01の北側にまとまる。また、土師質土器皿や木製品の匙が出土した。

SK 08・09 (第45図) E 8でSK 07の西側に位置し、共に平面は長い楕円形を呈す。断面は浅く、



SE13
 1 褐色土 2 黒褐色土 3 黒褐色土 4 黒褐色粘質土
 5 褐色土 6 黄褐色粘質土 7 黄褐色土 8 暗灰色粘質土
 9 黄褐色粘質土

SE14
 1 褐色土 2 黒褐色土 3 褐色土 4 黒褐色土
 5 黒褐色土 6 褐色土 7 褐色土 8 褐色土
 9 黒褐色土 10 褐色粘質土 11 灰色粘質土 12 黄灰色粘質土
 13 暗灰色粘質土

第44図 SE13・14 (縮尺1/40)

SK 09 西側の立ち上がりは不明瞭である。重複しており、SK 09 が埋没後に同 08 が構築されている。SK 09 から越前焼の甕や青磁碗、土師質土器の皿や破片等が少量出土した。

SK 10 (第 45 図) E・F 13 で検出した。遺構の集中域から離れ、SB 22 の北西に位置する。平面は大形でやや不整な楕円形を呈し、底面に凹凸をもつ。また、須恵器で墨書の坏 A や坏 A・B と坏蓋、甕と壺、他に土師器の甕や土錘等がやや多く出土した。

SK 11 (第 46 図) B 21 で検出し、SK 11～13 は SD 30 の北東にまとまる。SK 11・12 は、平面が

凹凸のある不整な形状であり、ピット数基が重複して土坑状を呈すとも考えられる。また、SD 30と重複しており、SK 11・12が埋没後に構築されている。

SK 12 (第46図) B 21でSK 11の西側に位置する。平面は中程がくぼむ不整な楕円形を呈す。

SK 13 (第46図) B 21でSK 11の南側に位置し、小形の楕円形を呈す。

SK 14 (第46図) A・B 22でSK 11の東側に位置する。平面は中程がくぼむ長い楕円形で溝状を呈す。SK 14・15・18はSD 40と重複しており、各々が埋没後にSD 40が構築されている。

SK 15 (第46図) B 22でSK 14の南西に位置する。やや不整な楕円形で、西側の肩に段をもつ。

SK 16 (第46図) B 23でSK 14の南東に位置し、他の遺構からやや離れる。平面は円形状で、断面は緩く立ち上がる。

SK 17 (第46図) B 23でSK 16の西側に位置し、SD 40と隣接する。平面はやや不整な楕円形で、北西の肩に段をもつ。

SK 18 (第46図) B 23でSK 17の南側に位置し、長い楕円形状を呈す。断面は浅く立ち上がる。

SK 19 (第46図) B 24でSK 18の南東に位置する。不整な形状で、断面は浅く立ち上がる。

SK 20 (第46図) C・D 23でSK 18の南西に位置し、平面はやや不整な楕円形を呈す。SD 33と重複するが前後関係は不詳である。

SK 21 (第46図) C 24でSK 20の南東に位置する。やや不整な形状で、断面は浅く立ち上がる。

SK 22 (第47図) D 20・21でSD 28の北側に位置し、平面はやや不整な隅丸方形を呈す。底面の南東に掘り込みがあり、底部が2段となる。

SK 23 (第47図) D 21でSK 22の東側に位置する。平面は隅丸方形で、断面は緩く立ち上がる。

SK 24 (第47図) E 21でSK 23の南西に位置する。不整な楕円形で、底面中央に僅かに段をもつ。

SK 25 (第47図) D 22でSD 34の北東に位置し、平面はやや不整な楕円形を呈す。SK 25～27はSK 01・02と同様、底面のほぼ中央に小形で円形のピットをもち、底部が2段となる。また、9.4m程の間隔で北東から南西方向へ列状に並ぶ。時期不詳だが陥穴とも考えられる。

SK 26 (第47図) D 23で検出し、平面はSK 27と同様に円形状を呈す。SD 34と重複するが前後関係は不詳である。

SK 27 (第47図) E 24でSD 36の東側に位置する。

SK 28 (第47図) F 22でSB 31の北西に位置する。平面はやや大形で不整な方形形状を呈し、断面は浅く立ち上がる。SB 31のP 14と重複するが前後関係は不詳である。また、越前焼播鉢や古瀬戸製品の破片、石製品の中砥等が少量出土した。

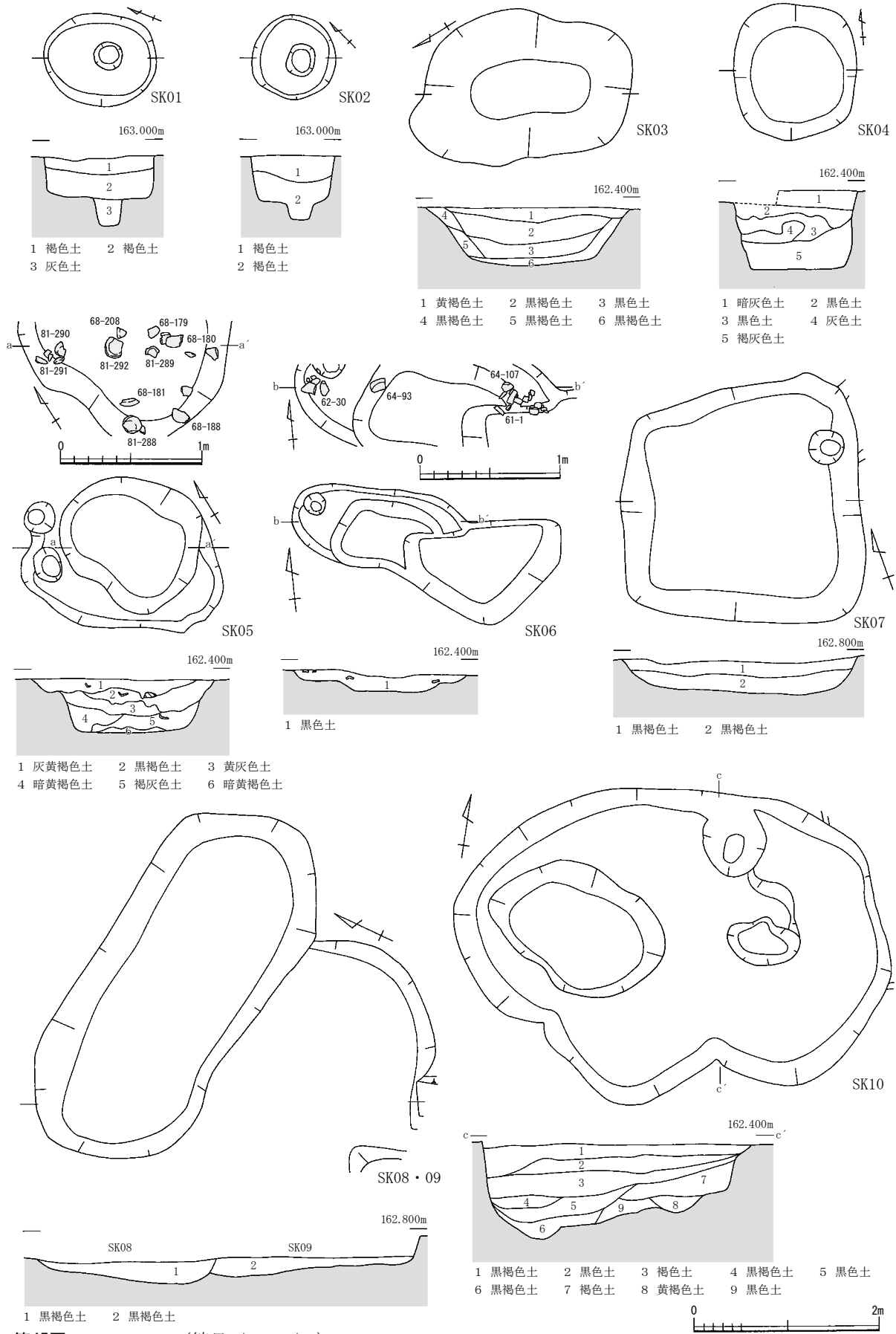
SK 29・30 (第47図) 共にF 26でSD 27の南側に隣在し、小形で不整な楕円形を呈す。SD 27と重複しており、SK 29・30が埋没後に構築されている。SK 29から土師質土器の破片が少量出土した。

SK 31 (第47図) E 27でSB 37の北側に位置し、やや小形の楕円形を呈す。

SK 32 (第47図) E 27でSK 31の北東に隣在する。やや不整な形状で、南北の肩に緩く段をもつ。

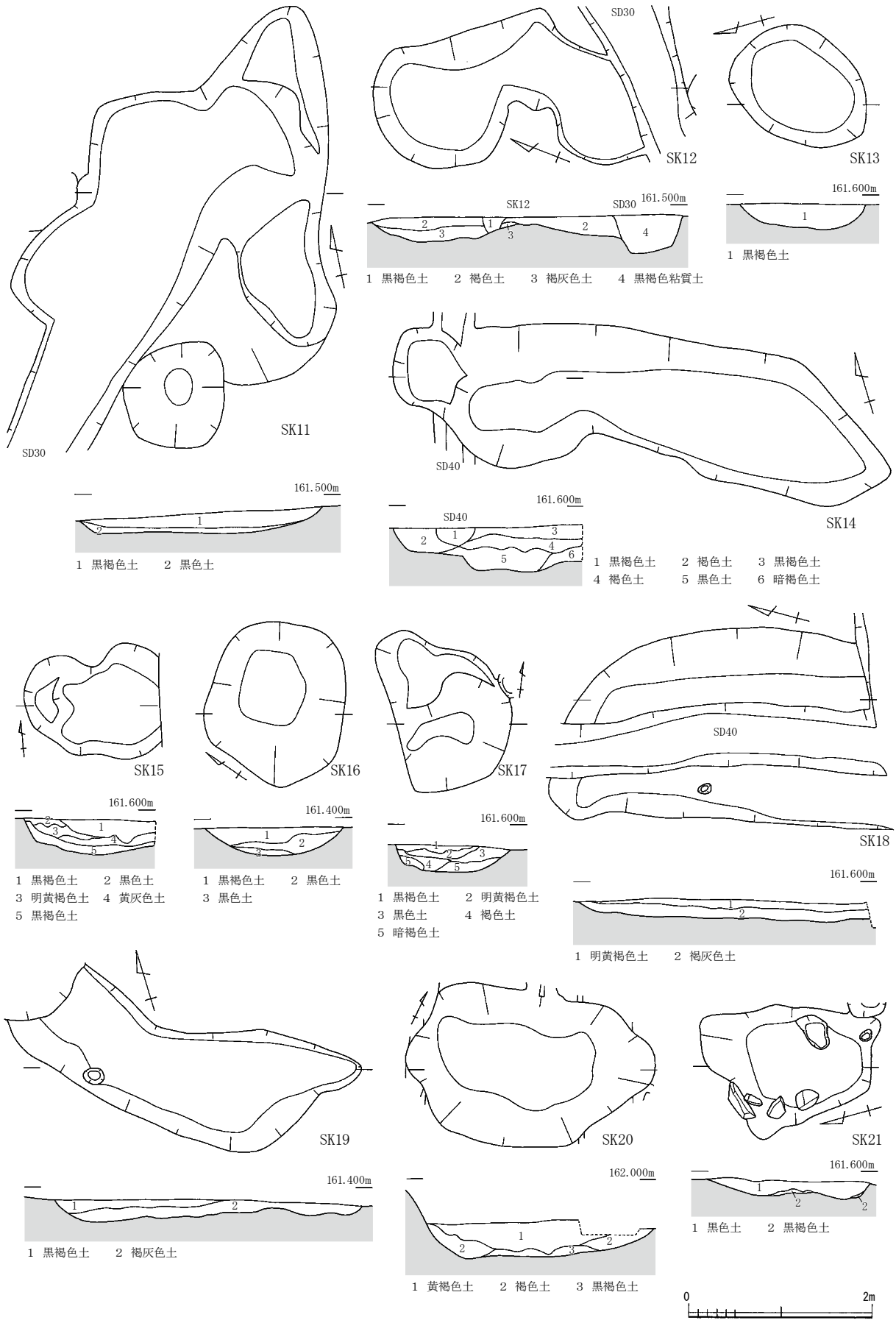
SK 33 (第47図) A 25でSB 32の東側に位置し、調査区外の北東へひろがる。平面はやや不整な楕円形とみられ、底面に凹凸がある。また、土師質土器の皿等が、覆土の上層中心に一括して廃棄された状況で多量に出土した。

SK 34 (第47図) C 28でSB 35の南半に位置する。やや大形の方形形状で南側が大きく湾曲し、断面は浅く緩やかに立ち上がる。SB 36のP 05と重複しており、SB 36が埋没後に構築されている。



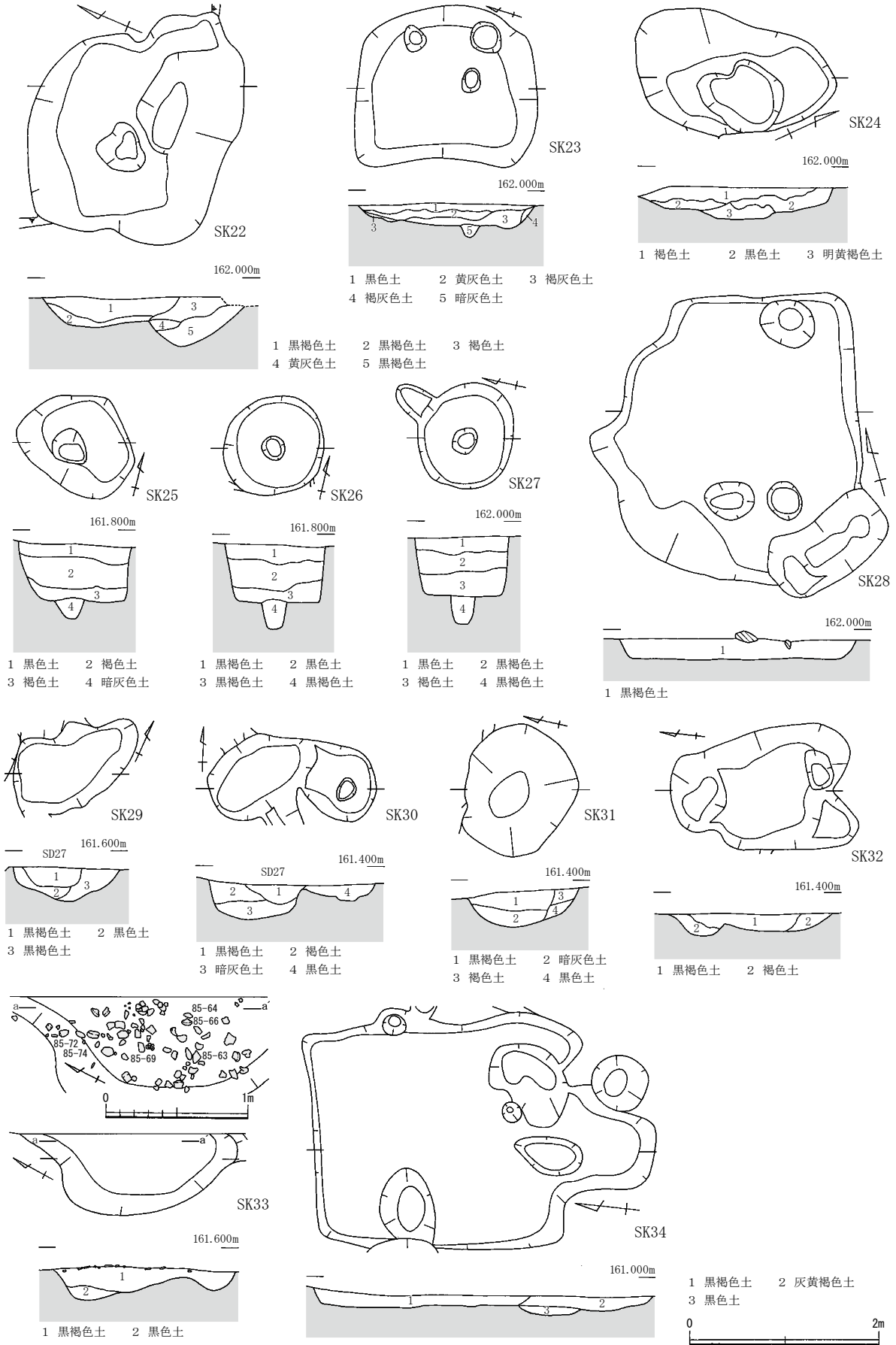
第45図 SK01~10 (縮尺1/40・1/60)

第1節 小矢戸地区の遺構

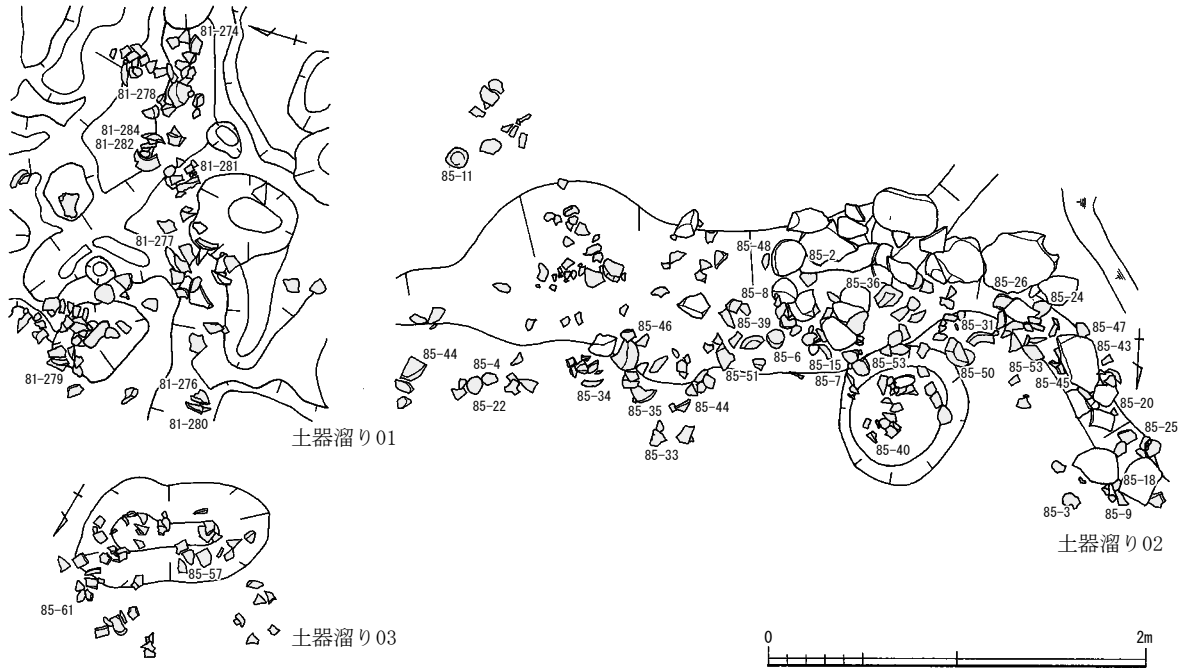


第46図 SK11~21 (縮尺1/60)

第4章 遺構



第47图 SK22~34 (縮尺1/40 · 1/60)



第48図 土器溜り01～03 (縮尺1/40)

6 土器溜り (第48図、図版第21・22)

土器溜り01 (第48図) C13でSB18の東側に位置する。大きく湾曲してのびるSR04の南肩で検出し、底面は凹凸が著しく不整な形状を呈す。須恵器と土師質土器が握拳大程の礫や砥石と共に一括して廃棄された状況で多量に出土しており、途中で屈曲するが北東へ帯状にひろがる。須恵器は、墨書の坏A・Bと坏蓋、坏A・Bと坏蓋や皿、及び壺や破片からなり、土師質土器も破片等がある。

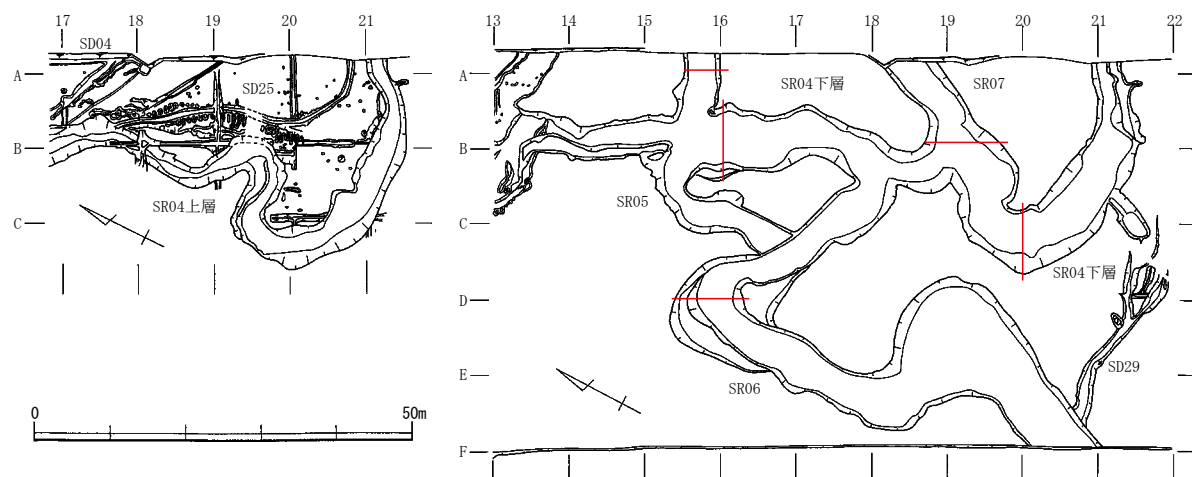
土器溜り02 (第48図) B20・21でSD27・30の間に位置し、東西にのびる緩い段で検出した。土師質土器の皿が、30～40cm大の礫と共に一括して廃棄された状況で特に多量に出土した。礫は南側の段上、土師質土器は北側の段下にまとまり、東側はやや疎らとなる。北西で緩く湾曲し、段に沿って東西に帯状にひろがる。

土器溜り03 (第48図) C22でSD32・33・40の間に位置する。ピットが埋没後に多くの土師質土器皿等が一括して廃棄されており、中央は疎らだがやや不整な楕円形状にまとまる。

7 旧河道 (第6・36・49・50、図版第1・3・23・24)

SR01 (第6・50図) A13・14からF8・9にかけて検出した。西端は県道区で、既に報告した。幅広くほぼ直線的に東西にのび、調査区外の東方へ続く。中央東側で北肩が湾曲して中洲状の高まりがあり、底面はピットや段により凹凸が著しい。遺物は流路のほぼ全体で多量に出土したが、東端のA・B13と中央のC11やD・E10で特にまとまる。須恵器の坏A・Bや坏蓋、皿や碗、甕と壺等、墨書の坏A・Bや坏破片が多く、墨書土器は中央西側のD・E10で特にまとまって出土した。また、土師器の甕や碗、灰釉陶器の碗等も少量だが出土している。他に越前焼の甕や土師質土器の皿、弥生土器の甕、木製品で漆器碗や糸巻等、有茎尖頭器や打製石斧等も少量出土した。

SR02 (第6・50図) A～C-1～1で調査区北端に位置する。C0・1で湾曲して幅広くのび、調査区外の西方と北東へ続く。A0・1では東端で大きく蛇行し、底面は全体的に凹凸が著しい。遺物はB・C0・1で南東の肩から底面にかけて多量に出土した。越前焼等は少量だが、須恵器の坏A・Bと坏蓋、甕や壺等が埋土上層を中心に多く出土した。また、須恵器の坏Hや甕、弥生土器の甕と壺や高坏・



第49図 SR04~07 (縮尺1/1,000)

器台等は埋土下層を中心にやや多く出土した。縄文土器と有茎尖頭器や石匙等も少量出土している。

SR 03 (第6・36図) A 10・11 から F 10・11 にかけて検出した。南西端は県道区で既に報告した。やや幅広で緩く湾曲しながら北東へのび、南西と中央の肩に段をもつ。C 10 で南北2条に分岐し、湾曲して調査区外の東方へ続く。また、SD 01 と直交し、SR 01 とは斜交している。遺物は流路の北東半にまとまり、特に分岐した南側流路から多く出土した。須恵器の坏A・Bと坏蓋等もあるが、中世の土器・陶磁器が多く出土している。越前焼の甕や播鉢、古瀬戸製品の花瓶、青磁・白磁の碗、土師質土器の皿等があり、他に石製品のバンドコや五輪塔等も出土した。

SR 04 (第6・49・50図) A 20・21 から C 12 にかけて検出した。埋没の過程から古代の上層段階と弥生時代後期を主体とする下層段階に区分できる。共にC 12 でSR 01 の南肩から南東へのび、C 13 とD 19・20 で大きく湾曲して調査区外の東方へ続く。下層段階は、上層段階より流路が東側に幅広く、断面も深く埋土は粘質土である。不明確だが下層段階はSR 05～07、上層段階はSR 01と同時期に流路が形成されていたと推察される。中世のSD 26・27と土器溜り02や古代の遺構面と重複しており、下層段階が埋没後に上層段階の流路や古代の遺構面、次に上層段階が埋没後に中世の遺構面が形成されたと考えられる。坏A・Bと坏蓋や甕等が、C 12・13の南肩やB 20・21で埋土上層を中心にやや多く出土した。弥生土器の甕や壺、高坏・器台と鉢等が、流路南端のB・C 20・21とD 20で北肩から底面にかけて埋土下層を中心に特に多量に出土している。他に縄文土器や打製石斧等も少量出土した。

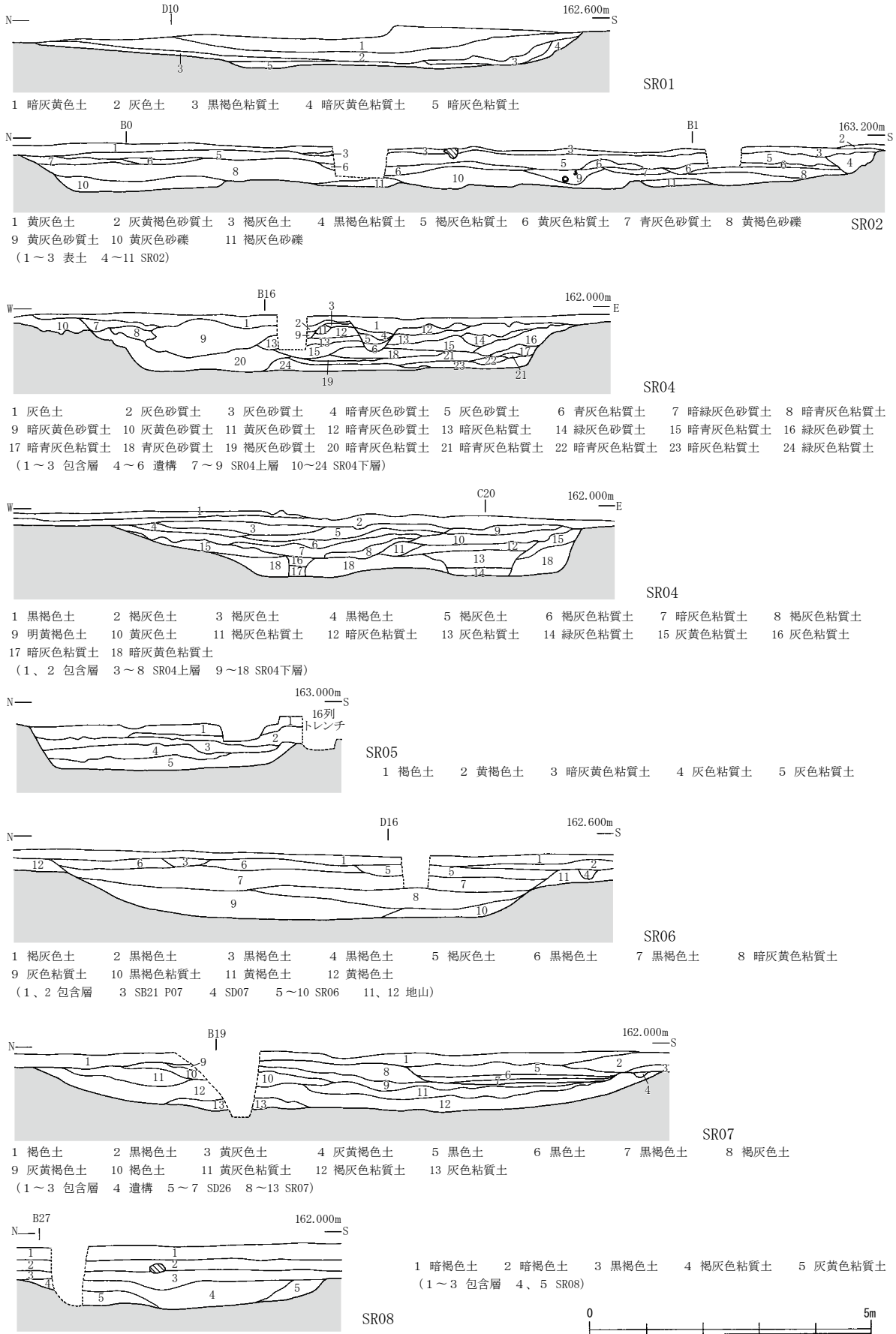
SR 05 (第49・50図) A・B 15 と C・D 15・16 で検出した。D 16 でSR 06 の北肩から幅広くのび、C 15 で湾曲し調査区外の北東へ続く。SR 04 下層やSR 06 と斜交するが重複はみられず、埋土や遺物も類似する。弥生土器の甕と壺や高坏・器台等が、流路南西を中心に埋土下層から多量に出土した。

SR 06 (第49・50図) C 17・18 から F 19・20 にかけて検出した。南西端は県道区で、既に報告した。D・E 15 と E 18・19 で大きく湾曲し、蛇行しつつ幅広くのびる。C 17・18 でSR 04 下層へ続き、SR 07 と同一の流路とも考えられる。弥生土器の甕と壺や高坏・器台等が、D・E 16 の北側とE・F 19・20の南東で、肩から底面にかけて埋土下層を中心に多量に出土した。他に土版が1点出土している。

SR 07 (第49・50図) A 18 と B 18・19 で検出した。SR 04 東肩から幅広くのび、調査区外の北東へ続く。SD 25・26 と重複しSR 07 が埋没後に構築される。弥生土器の甕が埋土下層で僅かに出土した。

SR 08 (第6・50図) A 26・27 から E 27 で検出した。不整な形状で幅広く北東へのび、B 26 で屈曲して調査区外の北方へ続く。北西の肩に段をもつが断面は浅く、南東の立ち上がり不明瞭である。

第1節 小矢戸地区の遺構



第50図 S R01・02・04~08土層断面図 (縮尺1/100)

第2節 太田地区の遺構

1 掘立柱建物（第51～56図、図版第27・28）

SB 39（第51図） D 38 から E 38・39 で検出した。桁行2間×梁間2間で北西から南東方向に棟をもつ。規模は桁行4.3mで梁間3.7m、柱間幅は桁行が2.1m程で梁間が1.4～2.3mを測る。梁間の柱間幅が不規則であり、やや小形の方形を呈す。P 01でSD 66、P 02で同80、P 08で同62と重複しており、各溝が埋没後に構築されている。また、P 06でSK 37と重複するが前後関係は不詳である。P 01・06から須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

SB 40（第51図） E 38・39 から F 38・39 でSB 39の南西に位置する。建物の南西半は調査区外へひろがり、桁行3間以上×梁間2間で南北方向に棟をもつと考えられる。規模は桁行5.1mで梁間3.0m、柱間幅は桁行が1.6～1.8mで梁間が1.3～1.9mを測る。P 02～06で須恵器と土師質土器の破片が少量出土した。

SB 41（第52図） D 39・40 から E 39・40 でSB 39の南東に位置する。桁行2間×梁間2間の総柱構造で、南北方向に棟をもつと考えられる。規模は桁行4.0mで梁間3.6mを測り、やや小形の正形状を呈す。柱間幅は桁行が2.0m程で梁間が1.6～1.8mを測る。P 06でSB 43のP 05、P 08で同P 02、P 09で同P 04と重複し、埋没後にSB 43が構築されている。また、P 01でSD 54、P 03で同53、P 04・09で同51と重複しており、各溝が埋没後にSB 41が構築されている。

SB 42（第52図） D 40 から E 40・41 でSB 41の南側に位置する。桁行2間×梁間2間の総柱構造で、不明確だが南北方向に棟をもつと考えられる。規模は桁行3.7mで梁間3.5m、柱間幅は桁行と梁間とも1.6～1.9mを測る。南西隅柱のP 03が内方へずれており、やや小形で不整な方形を呈す。P 06以外の各柱穴から土師質土器の破片が僅かに出土した。

SB 43（第53図） D 39・40 から E 39 でSB 41の北東に位置し、桁行4間×梁間3間で東西方向に棟をもつ。規模は桁行7.3mで梁間4.5m、柱間幅は桁行が1.4～2.0mで梁間が1.4～1.6mを測る。P 02でSB 41のP 08、P 04で同P 09、P 05で同P 06と重複しており、SB 41が埋没後に構築されている。

SB 44（第54図） C・D 40 でSB 43の東側に位置し、桁行3間×梁間3間でほぼ東西方向に棟をもつ。規模は桁行6.0mで梁間4.8m、柱間幅は桁行が1.7～2.5mで梁間が1.4～1.8mを測る。

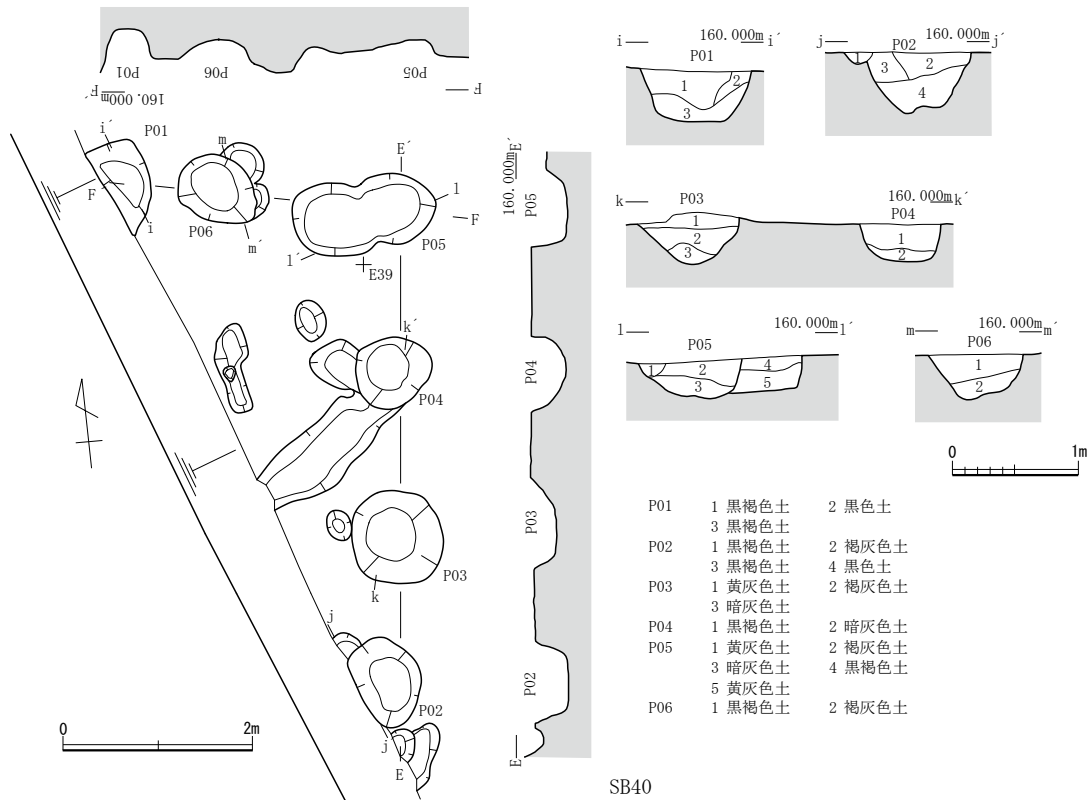
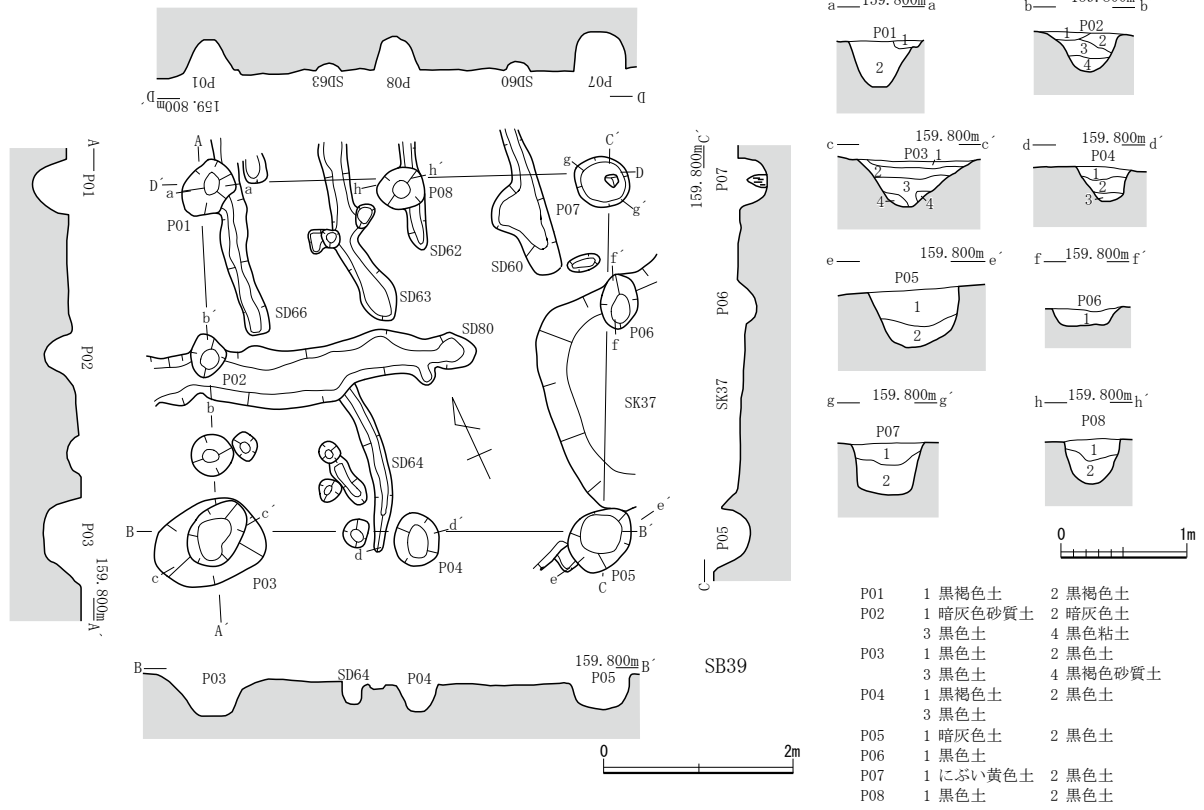
SB 45（第54図） C 38 から D 38・39 でSB 43の北側に位置し、桁行3間×梁間3間で東西方向に棟をもつ。規模は桁行5.2mで梁間3.8m、柱間幅は桁行が1.8m程で梁間が1.2～1.4mを測る。P 04でSD 54、P 05で同51・52、P 06で同50、P 07・08で同49と重複しており、各溝が埋没後にSB 45が構築されている。また、P 11でSD 46、P 11・12でSK 39と重複するが前後関係は不詳である。

SB 46（第55図） C 36・37 でSB 45の北側に位置する。桁行2間×梁間2間の総柱構造で、ほぼ東西方向に棟をもつと考えられる。規模は桁行と梁間とも3.7mを測り、やや小形の正形状を呈す。柱間幅は桁行が1.8～2.0mで梁間が1.6～2.0mを測る。

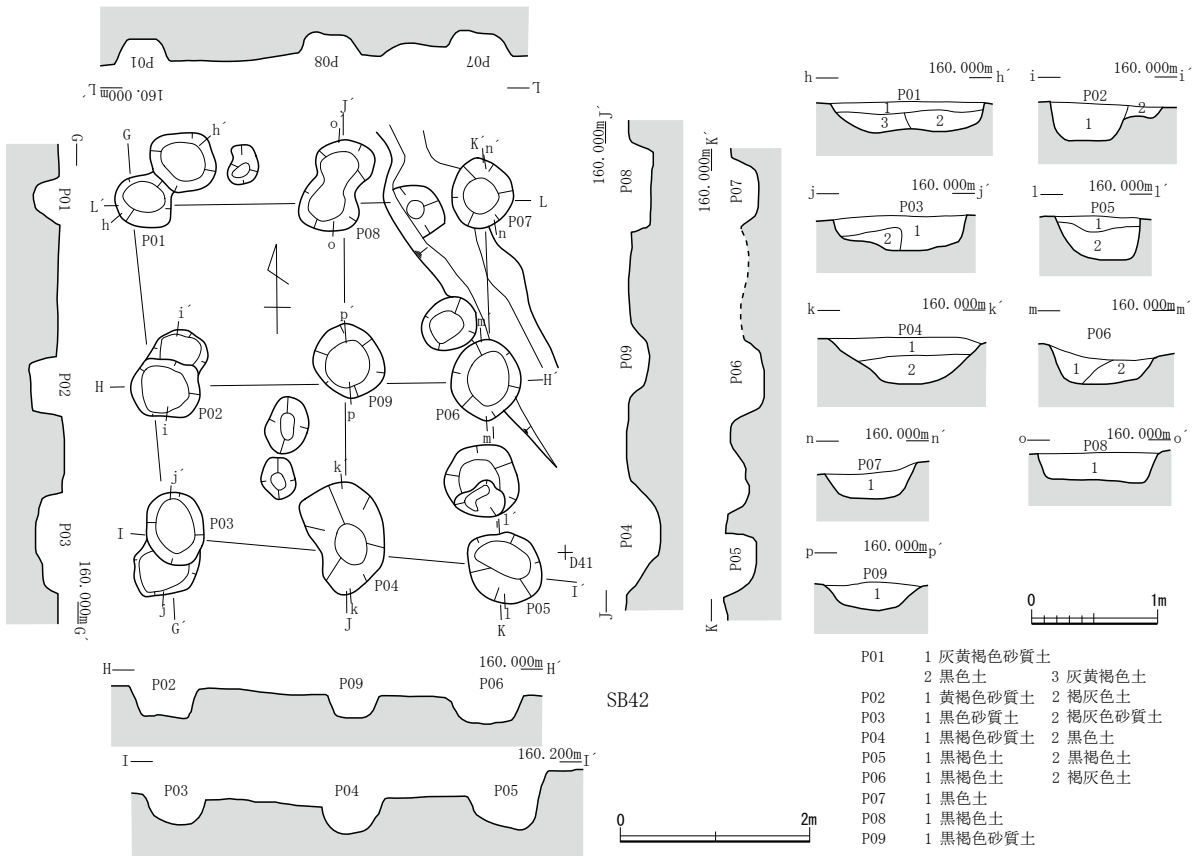
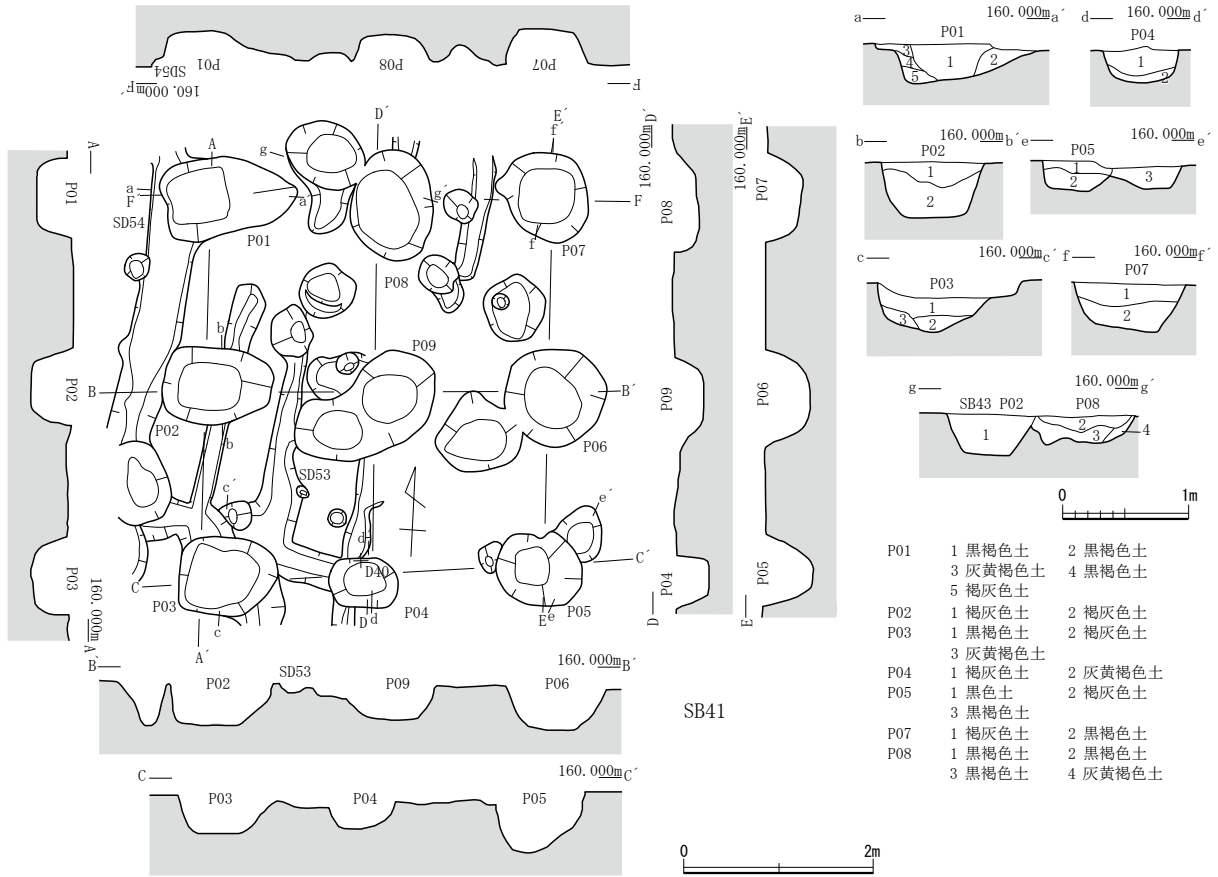
SB 47（第55図） C 36 でSB 46の北西に位置する。桁行3間×梁間2間の総柱構造でほぼ東西方向に棟をもつ。規模は桁行4.7mで梁間4.2m、柱間幅は桁行が1.4～1.7mで梁間が1.8～2.4mを測る。

SB 48（第56図） D 32 で検出し、遺構の集中域から離れている。桁行3間×梁間2間で北西から南東方向に棟をもつ。規模は桁行5.1mで梁間3.8m、柱間幅は桁行が1.4～2.0mで梁間が1.8～2.0mを測る。各柱穴ともSB 49と同様にSR 09と重複しており、同09の底面で検出した。時期は不詳だが同09の埋没過程で離水した時期があり、SB 48・49が構築されたと推察される。

第2節 太田地区の遺構

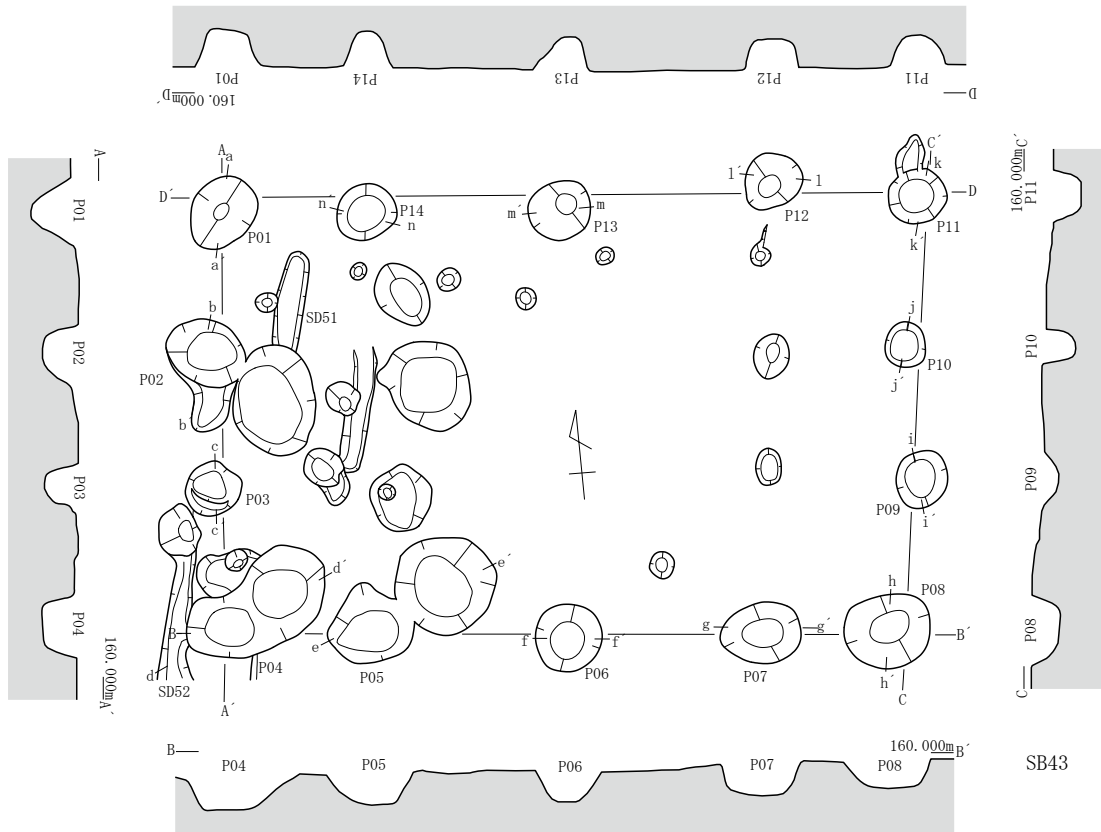


第51図 SB39・40 (縮尺1/60・1/80)

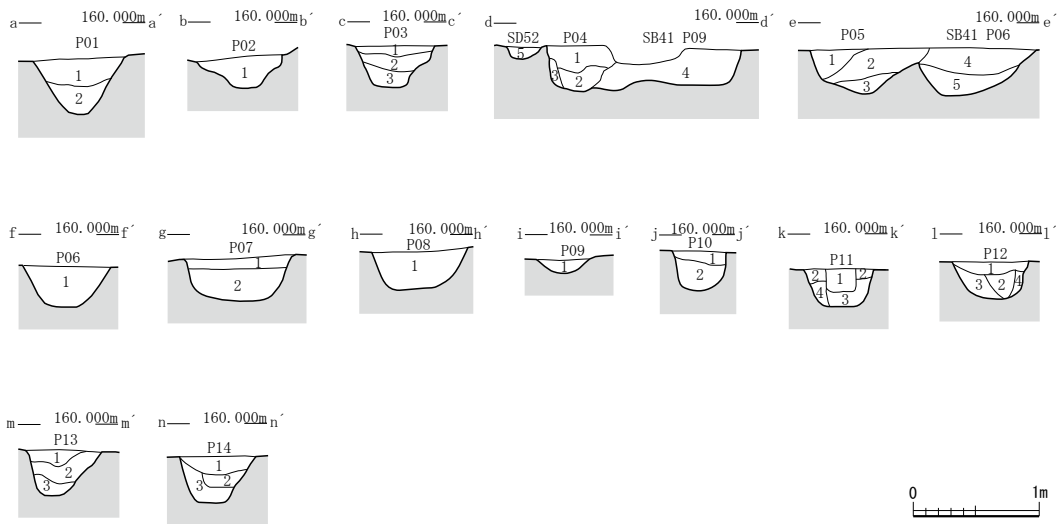


第52圖 SB41・42 (縮尺1/60・1/80)

第2節 太田地区の遺構



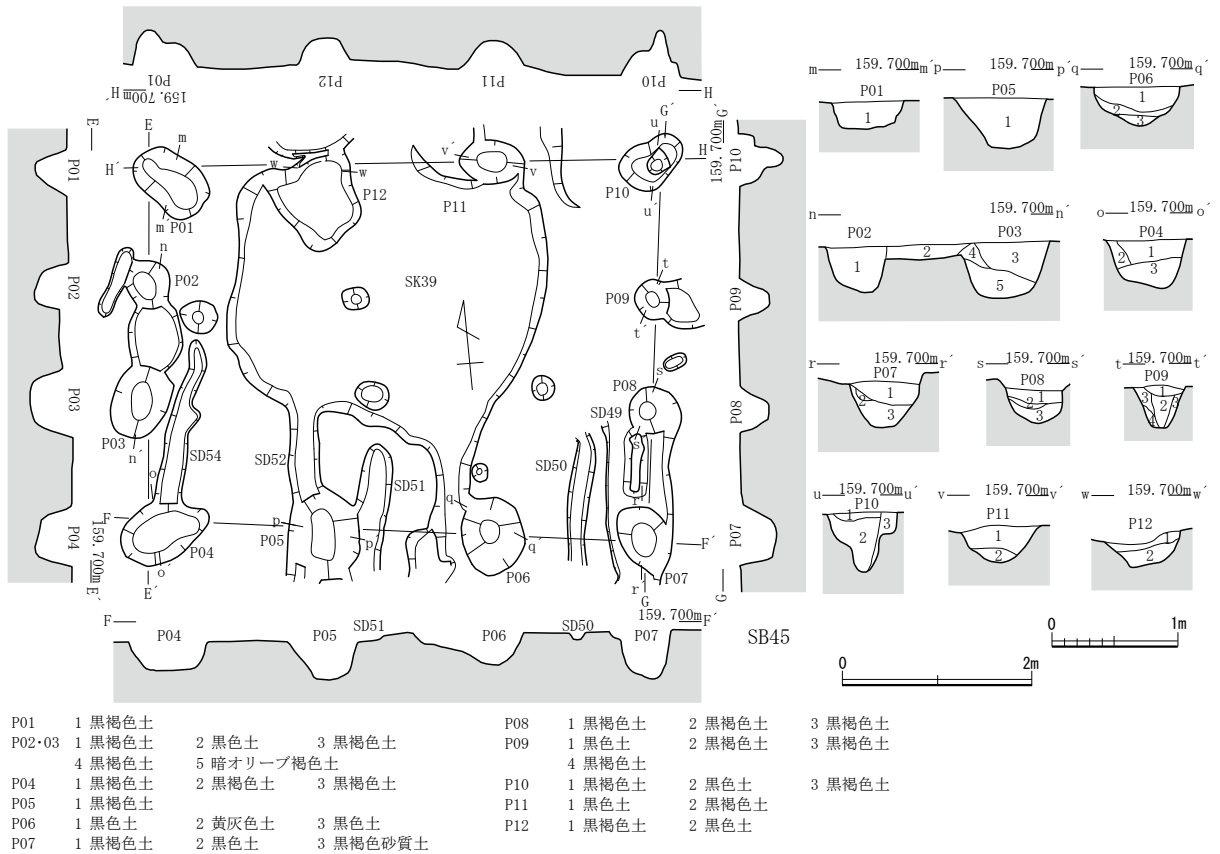
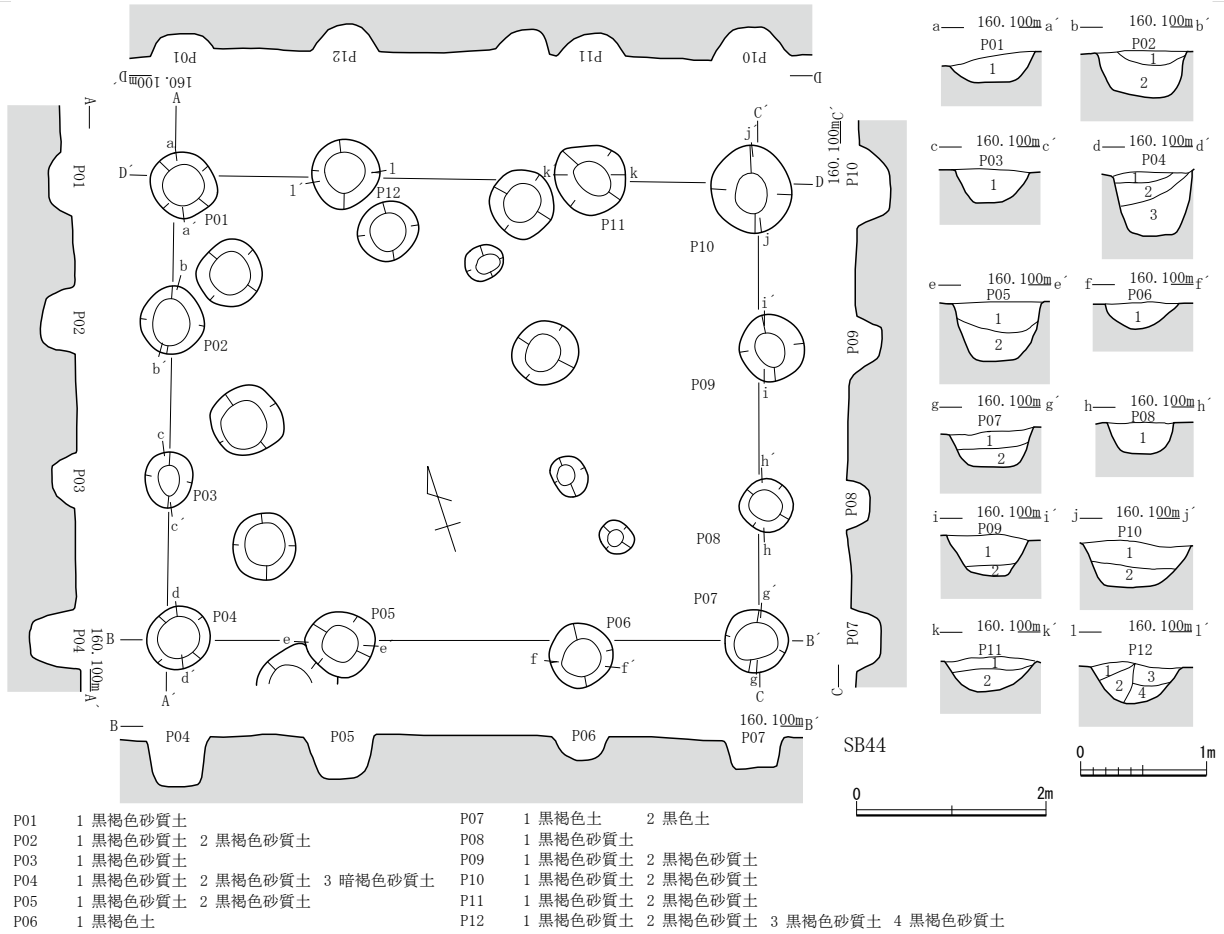
0 2m



0 1m

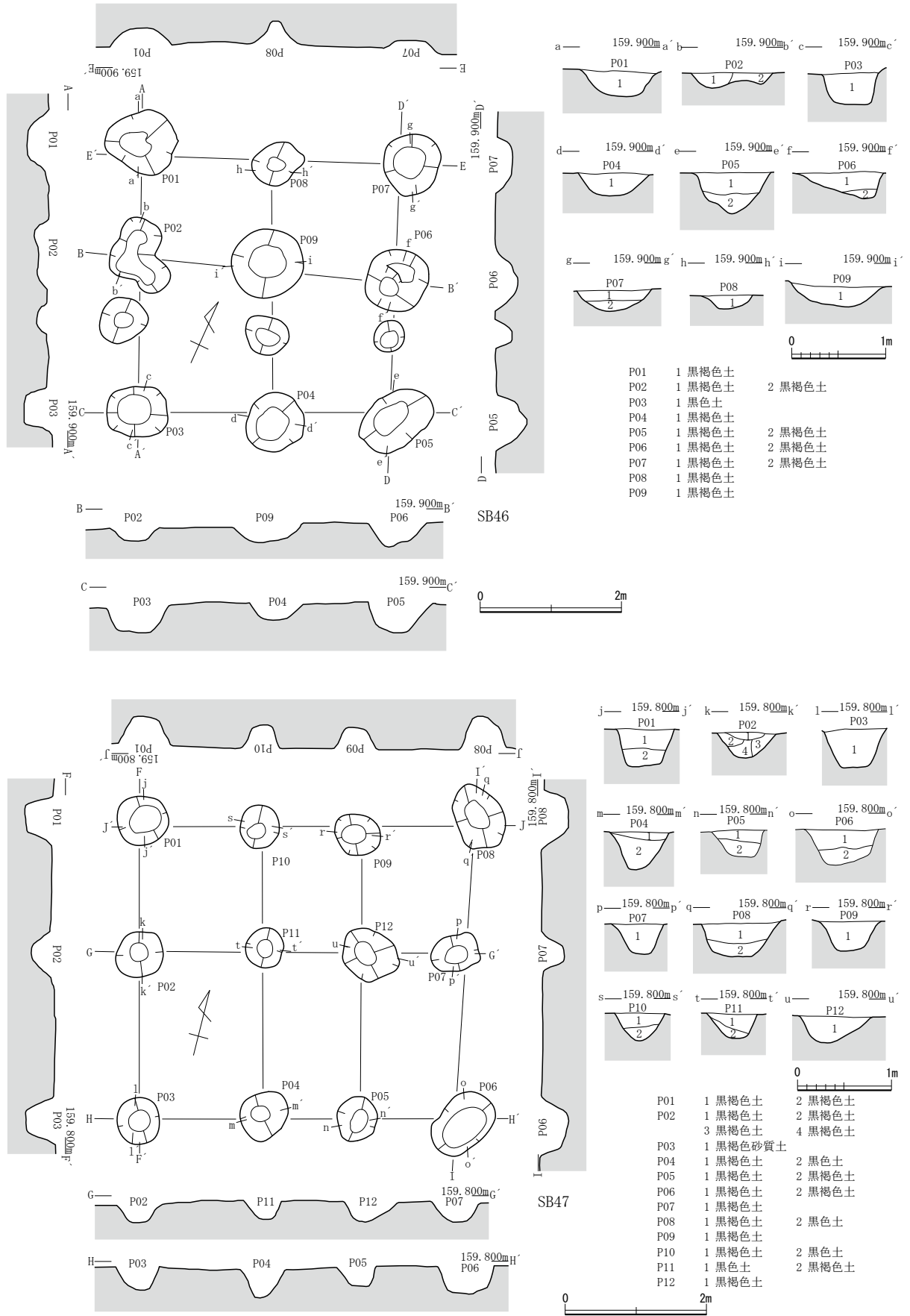
P01	1 黒色土	2 黒褐色土	P08	1 黒色砂質土			
P02	1 黒褐色土		P09	1 黒褐色砂質土			
P03	1 褐灰色土	2 褐灰色土	3 灰黄褐色土	P10	1 黒色土	2 黒褐色土	
P04	1 黒褐色土	2 黒褐色土	3 灰黄褐色土	P11	1 黒褐色土	2 黄灰色土	3 黄灰色土
	4 褐灰色土	5 黒褐色土		P12	1 黒褐色土	2 黒褐色砂質土	3 黒褐色土
P05	1 黒褐色土	2 黒褐色土	3 黒色土		4 黒褐色土		
P06	1 黒色砂質土			P13	1 黒褐色土	2 黒褐色砂質土	3 黒褐色土
P07	1 黒色砂質土	2 黒褐色砂質土		P14	1 黒褐色土	2 黒色土	3 黒褐色土

第53図 SB43 (縮尺1/60・1/80)

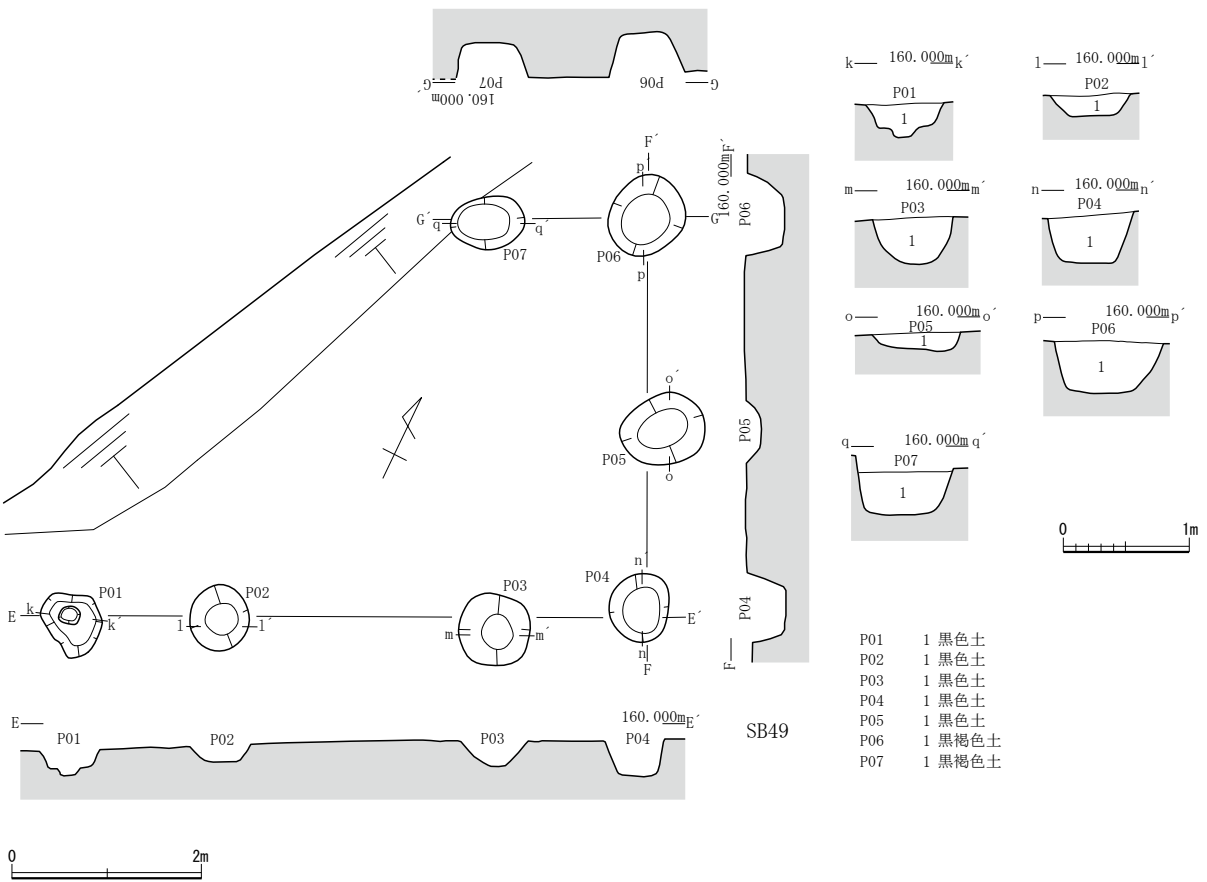
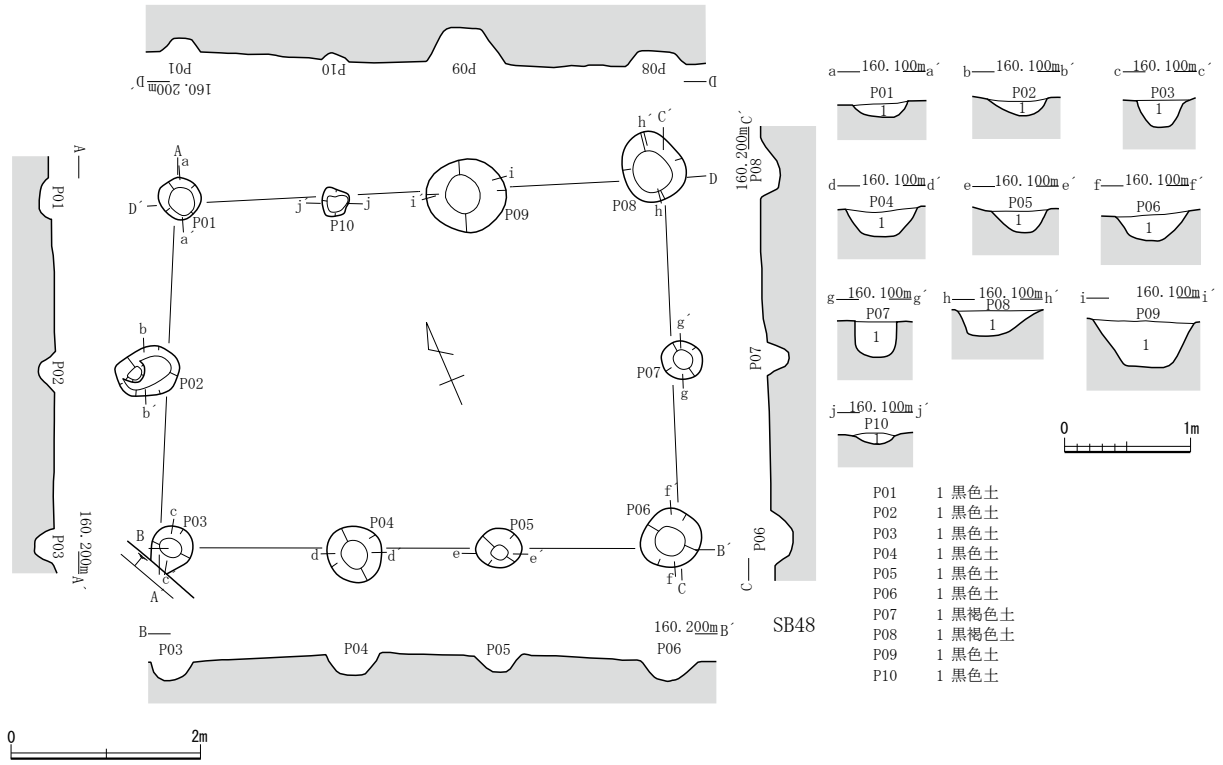


第54図 SB44・45 (縮尺1/60・1/80)

第2節 太田地区の遺構

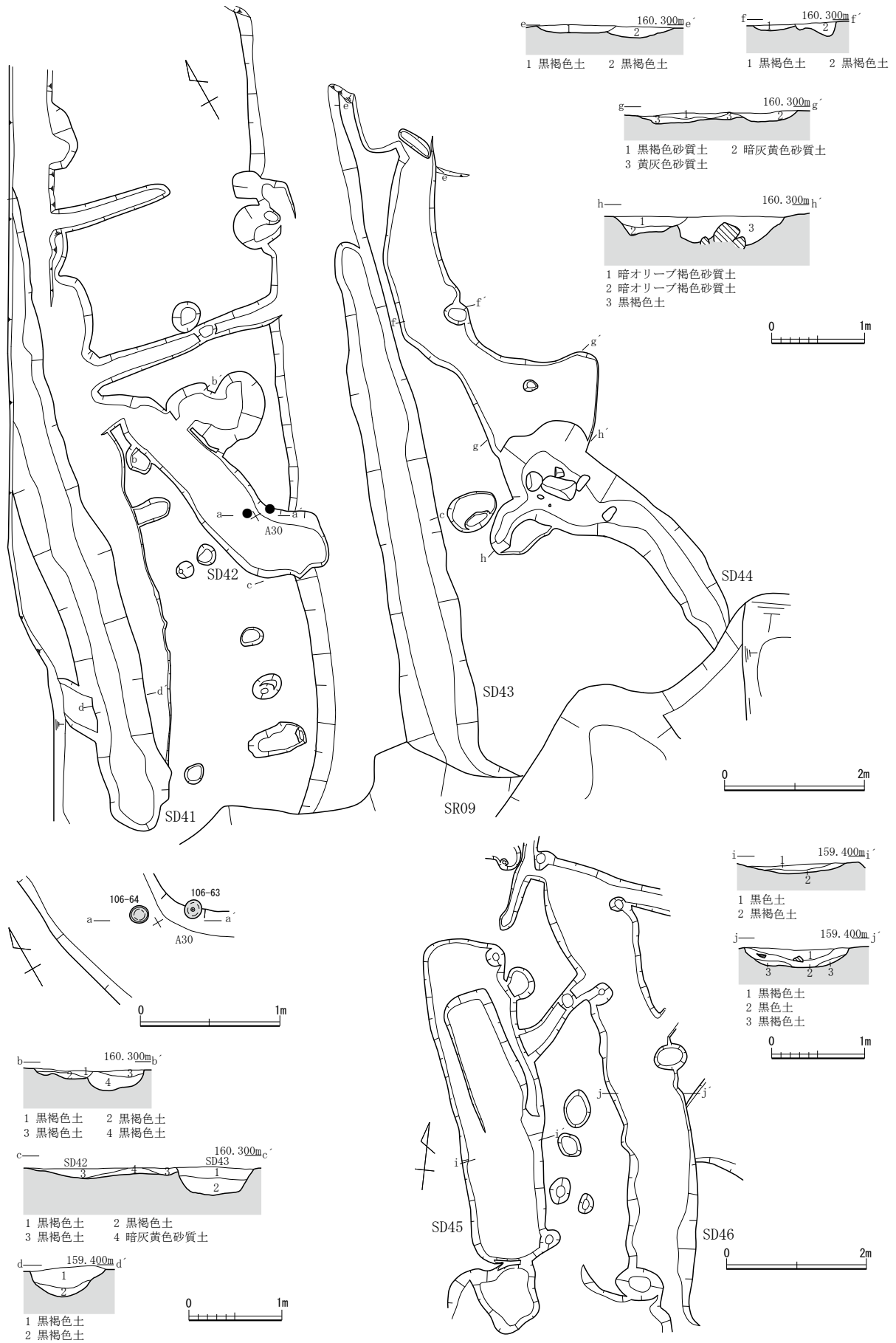


第55図 SB46・47 (縮尺1/60・1/80)



第56図 SB48・49 (縮尺1/60・1/80)

第2節 太田地区の遺構



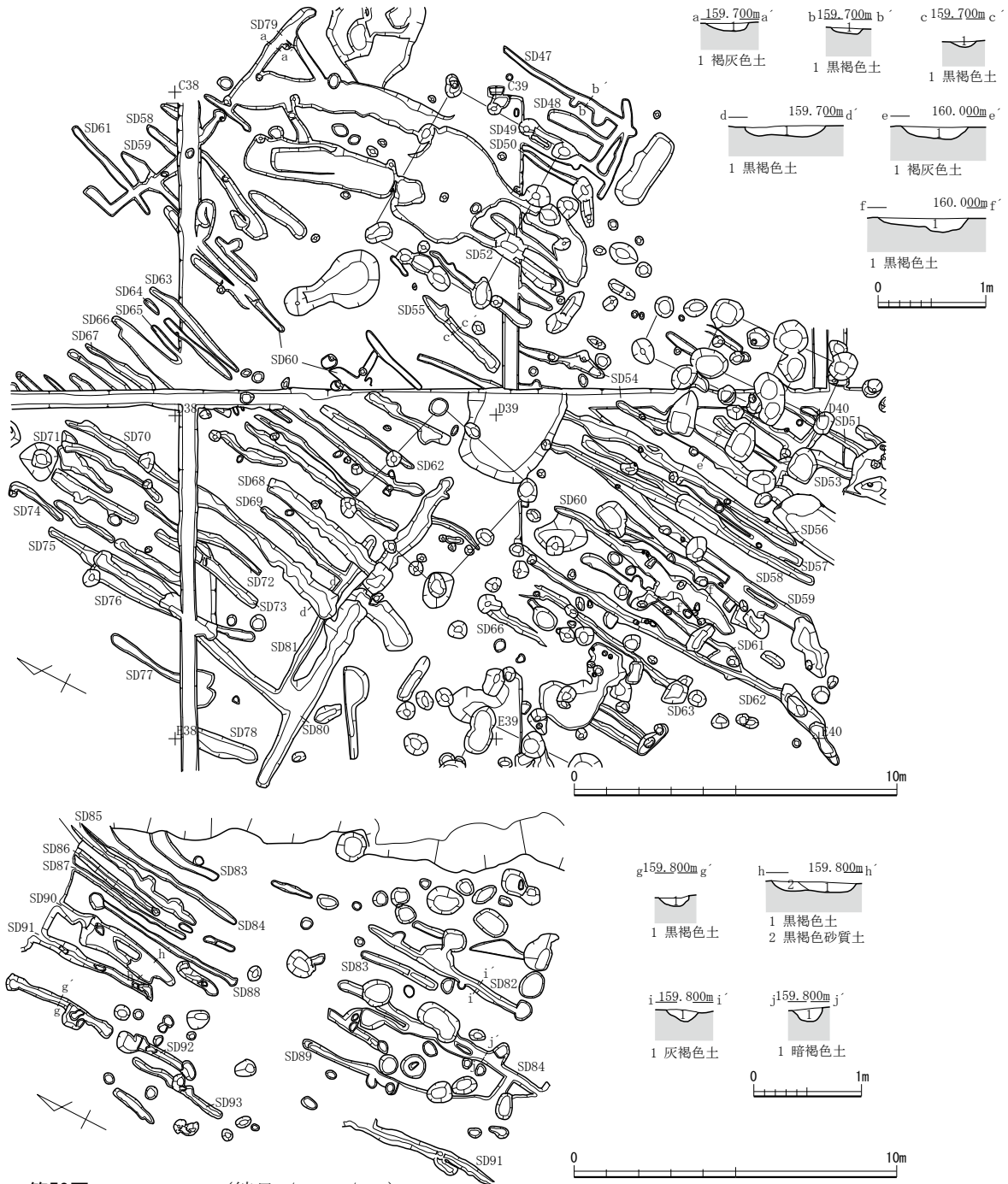
第57図 SD41~46 (縮尺1/40・1/60・1/80)

SB 49 (第56図) D 31でSB 48の北西に位置する。建物の西半は調査区外へひろがり、桁行3間×梁間2間で北東から南西方向に棟をもつと考えられる。規模は桁行6.0mで梁間4.2m、柱間幅は桁行が1.6~2.8mで梁間が1.9~2.2mを測る。

2 溝 (第57・58図、図版第25・26・28)

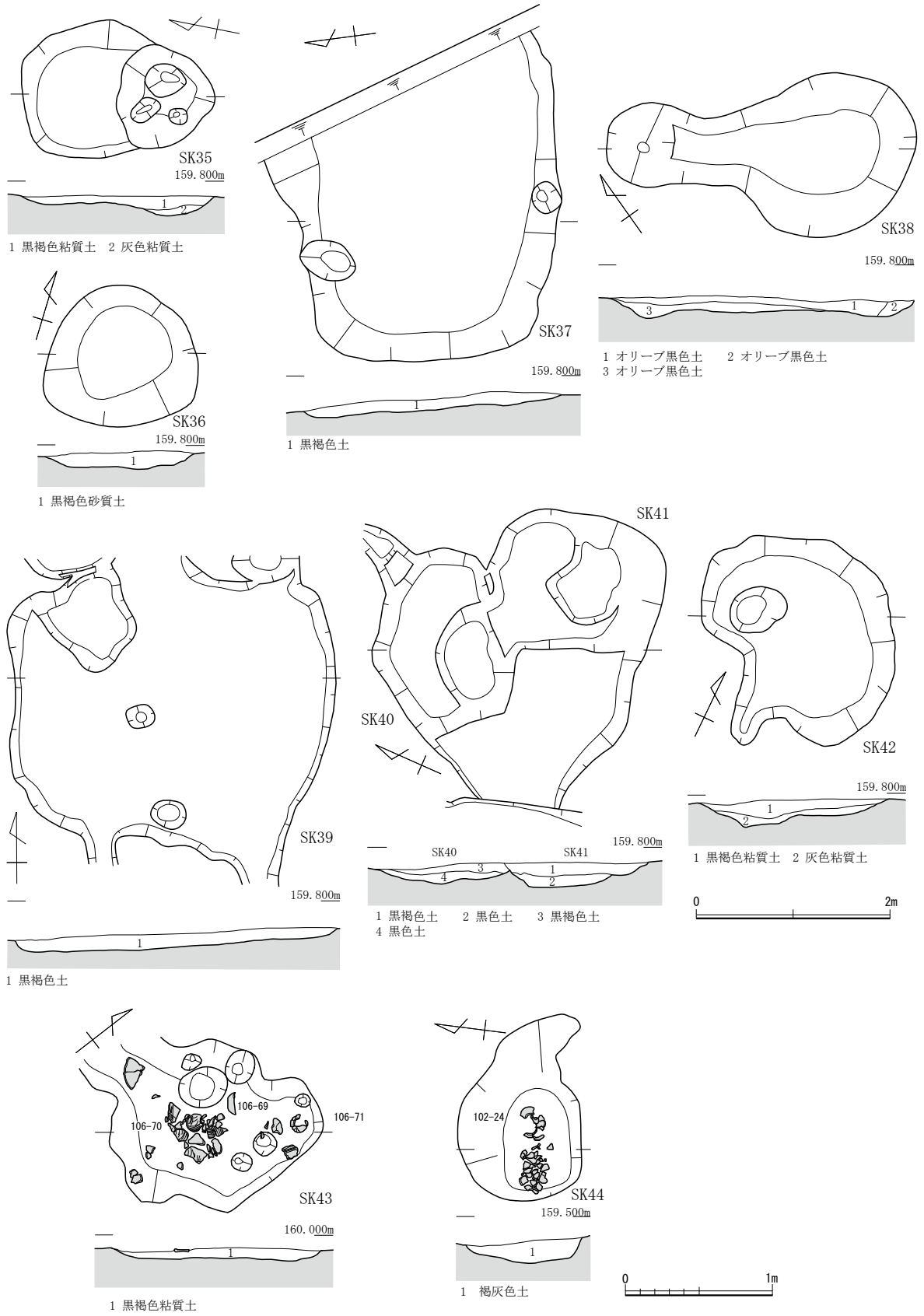
SD 41 (第57図) A 29とB 29・30で検出した。SD 41・43・44は、調査区外からSR 09へ向けて南北にのびる。SD 41は、やや幅広く直線的で底部に段をもつ。土師質土器の破片が少量出土した。

SD 42 (第57図) A 29・30とB 29・30で検出した。ほぼ南北にのびて途中で南東へ緩く湾曲し、SD 43と重複するが前後関係は不詳である。須恵器の坏蓋2点が、南東の肩付近で隣在してまとまり、



第58図 SD 47~93 (縮尺1/60・1/200)

第2節 太田地区の遺構



第59図 SK35~44 (縮尺1/40・1/60)

他に土師質土器の破片等が少量出土した。

SD 43 (第57図) A 29・30とB 30で検出した。SD 41とほぼ平行して直線的にのび、西肩に幅広く段をもつ。須恵器と土師質土器の破片が少量出土した。

SD 44 (第57図) A 29・30で検出した。緩く湾曲して中程に段をもち、やや不整な形状を呈す。ほぼ中央の底面で20～40cm大の礫がまとまって出土した。また、土師質土器の破片が少量出土した。

SD 45 (第57図) D 38でSB 45の北側に位置する。SD 46とほぼ平行し、北西から南東へやや幅広くのびる。墨書の坏A、須恵器と土師質土器の破片が少量出土した。

SD 46 (第57図) C・D 38で検出した。緩く湾曲してやや幅広くのび、SB 45のP 11やSD 79と重複するが前後関係は不詳である。墨書の坏蓋、須恵器と土師質土器の破片が少量出土した。

SD 47～81 (第58図) C 38・39とD 37～39、E 37～40、F 38～40で検出し、SB 41～44の北西にまとまる。SD 47～78は、0.7～1.0m程の間隔でほぼ平行し、細長く南北にのびる。大半は断面が浅くて連続せず、中間が途切れている。SD 79～81は、12.4m程の間隔で平行して細長く東西にのび、SD 47～78とほぼ直交する。小矢戸地区のSD 06～24と同様な形状や分布の状況だが、溝群の方向や間隔が異なる。また、SD 49～52・54はSB 45、同51・53・54はSB 41、同62・66・80はSB 39と重複しており、各溝が埋没後に構築されている。SD 52はSK 39、同56・58はSK 37、同79はSD 46と重複するが前後関係は不詳である。SD 51～63・69～81で、須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

SD 82～93 (第58図) B 37・38とC 38でSB 46の東側にまとまる。0.7～1.0m程の間隔でほぼ平行し、細長く南北にのびる。SD 47～81と同様な形状だが、直交する溝はみられず、比較的狭い範囲にひろがる。SD 82～86で、須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

3 土坑 (第59図、図版第28・29)

SK 35 (第59図) E 37でSD 70～75の北側に位置し、平面は小形でやや不整な楕円形状を呈す。須恵器と土師質土器の破片が僅かに出土した。

SK 36 (第59図) D 37でSK 35の北東に位置し、他の遺構からやや離れる。平面は小形の円形状を呈す。土師質土器の破片が僅かに出土した。

SK 37 (第59図) D・E 38・39でSB 39の東側に位置する。平面はやや大形の楕円形だが断面が浅く、東半の立ち上がりは不明瞭である。SB 39のP 06、SD 56・58と重複するが前後関係は不詳である。坏Aと土師質土器の破片が少量出土した。

SK 38 (第59図) D 38でSB 45の北西に位置する。平面は中程がくぼむ楕円形を呈す。

SK 39 (第59図) D 38・39でSB 45の北半に位置する。平面はやや大形の楕円形で、断面は浅く立ち上がる。SB 45のP 11・12、SD 52と重複するが前後関係は不詳である。

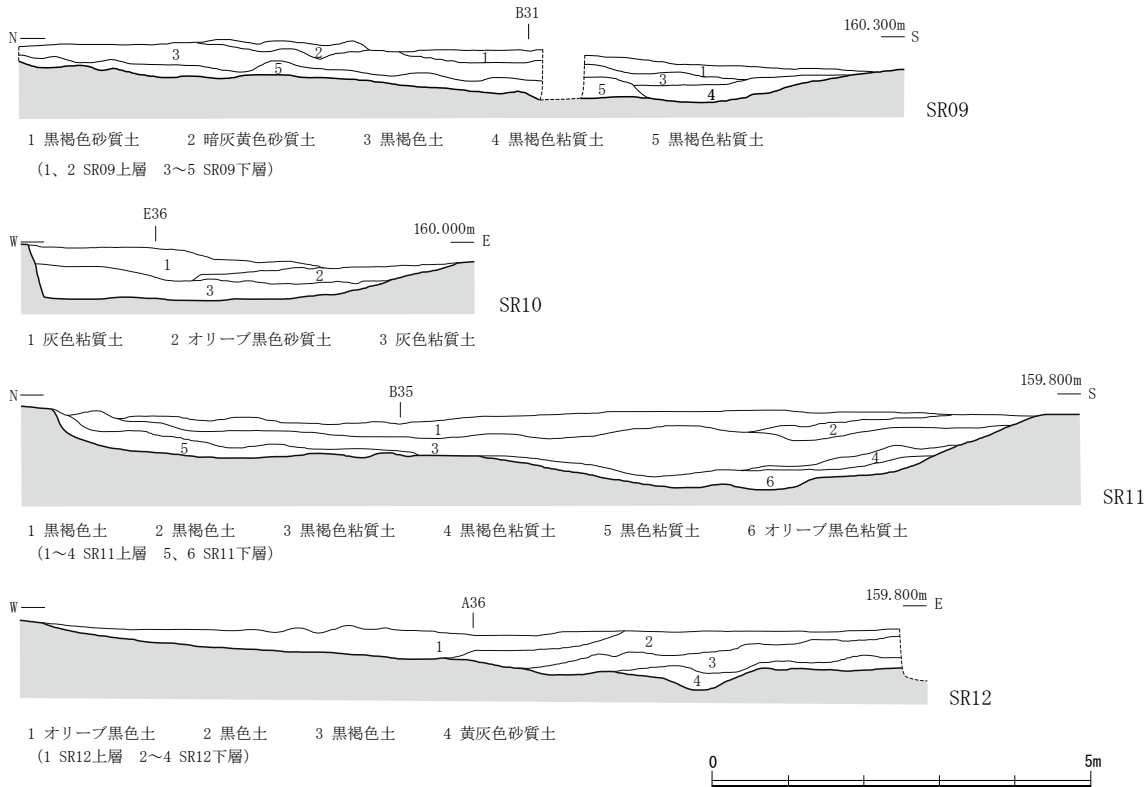
SK 40・41 (第59図) C 38でSB 45の北東に位置する。共に平面はやや不整な楕円形で、底面に緩く段をもつ。重複しており、SK 40が埋没後に同41が構築されている。坏Hと土師質土器の破片が少量出土した。

SK 42 (第59図) C 40でSB 44の北東に位置し、平面はやや不整な楕円形状を呈す。

SK 43 (第59図) E 39でSB 40の東側に位置し、小形で不整な形状を呈す。須恵器の坏Aと鍋、土師質土器の破片等がまとまってやや多く出土した。

SK 44 (第59図) B 38でSD 82の南東に位置し、小形の楕円形を呈す。弥生土器の壺と破片がまとまって出土した。

第2節 太田地区の遺構



第60図 SR09～12土層断面図（縮尺1/100）

4 旧河道（第6・60図、図版第26・29）

SR09（第6・60図） A30・31からE35にかけて検出した。SR04と同様、埋没の過程から古代の上層段階と弥生時代後期を主体とする下層段階に区分できる。E35でSR10の北肩から北西へのびるが、東肩の立ち上がりは不明瞭である。D30・31で大きく湾曲して幅広くなり、調査区外の東方へ続く。不明確だが下層段階はSR11・12下層、上層段階はSR10や同11・12上層と同時期に流路が形成されていたと推察される。須恵器の坏A・Bと坏Hや坏蓋、甕と壺等は、流路のほぼ全体で埋土上層を中心にやや多く出土した。他に土師質土器皿や越前焼、青磁と白磁の破片等も少量出土している。また、弥生土器の甕と壺や高坏・器台等は、流路北端の肩付近から埋土下層を中心に特に多量に出土した。

SR10（第6・60図） E35～37とF35～38で検出した。幅広く調査区外の南方へ続くが、SR09や同11と同一の流路とも考えられる。須恵器で墨書の坏A、坏A・Bと壺や鉢等、及び土師器の甕等が少量出土した。他に打製石斧も少量出土している。

SR11（第6・60図） A34・35からD35にかけて検出した。A・B34で緩く湾曲して幅広くのび、調査区外の北東へ続く。SR12と斜交するが重複はみられず、埋土や遺物も類似している。須恵器の坏Aと高坏や甕等が、流路南西のC・D35で埋土上層から少量出土した。また、弥生土器の甕と壺や高坏・器台が、北東端のA34・35で埋土下層を中心にやや多く出土した。

SR12（第6・60図） A35～39とB35～38で検出した。B35でSR11の東肩からやや幅広く湾曲してのび、南東端は浅く立ち上がる。SR11・12の下層段階は、流路が上層段階より東側に幅広く、調査区外へひろがる。同一の流路であったが下層段階の埋没後、上層段階の流路や古代の遺構面が形成されたと考えられる。須恵器の坏A・Bと甕や高坏等が、流路の南東端を中心にやや多く出土した。他に弥生土器の甕や鉢等も少量出土している。